

「お早う御座います！」と、彼は聲をかけた。「昨晚はどうも誠に有り難う御座いました。嬢の奴が何でも第一番の網にか、つた物を御禮の印に上げるつて申したさうで、其奴あよく言つたと私も心地よく思つたわけですよ。此りや唯た一尾で、餘り淋しい、物足りないやうな氣もするんですがね、何しろ御約束ぢやあるし、神様の思召にも適ふだらうと思ひますから、氣持よく受けて下さいな。神様が網に充満下されば、それを背上げるんですけれどね。」

「なアに、なアにあんな鉛の切片なんか極つまらない物で、そんな御禮なんて價値のあるもんぢやありませんよ。向ふ三軒兩隣と云ふ位で、近所同士は御同様に助け合ふのが當然でさア。假に私がお前さんの身になつたとしても、此れんバつちの僅かな物に、御禮なんて爲やしませんからね、本來なら御断わり申すんだが、折角の御志ですから、お前さんの氣を悪くしても詰らないし、有り難く頂戴しとさせよう。」

と私は丁寧に挨拶して、其魚を妻に渡した。

それから取敢ず魚を作つて置かうと云ふんで、妻が庖刀を當て、腸を出す拍子に、非常に硬い透明な物を發見したが、妻は玻璃の玉だと思つたので、一番末ッ子に玩具として與つた。其玉は強い光を發して非常に美しいので、多勢の子供等は末ッ子の手から其れを取つて、一人々々取り合つて、頻りに感心してゐた。

夜になつてランプが點されても未だ子供達は魚の腹から出た玻璃の玉の様な物を弄んで居たが、彼等の爲に晚餐の支度をして立働らいてゐた私の妻が、鳥渡ランプと彼等との間に立ち塞がつて燈火の光を遮ると、其玉が強い光を發したので、子供等は不思議がつて其玉を奪ひ合ひ、年齢のゆかぬ子供は大き

な子供が其れを貸して緩り見せて呉れないと云つて、ワアと泣き出した。

私は、一番大きな子に聲をかけて、一體どうしたのかと尋ねると、例の玻璃の玉が暗い所でも能く光るから、それで大騒ぎして居るのだとの返辭、私はそれを聞くと、妻にランプを消して見ろと命じた。さうして我々は、其玉の光の實に強い事を見し、ランプが無くとも平氣で寢床へ行けるのを見て驚いた。

ランプが消されて玻璃の玉が強い光を發した時に、子供たちは大いに驚いたり喜んだり、一齊に大きな聲を出して喝采したので、其騒々しさが近所合壁へ鳴り響いた。ところが丁度我々の家と壁一重を隔てた隣には、金持の寶玉商の猶太人が住んでゐて、而も彼等夫婦の寢室と我々一同の寢室とは相接するやうな風になつてゐたもんだから、我々の家に於ける此騒ぎの時丁度今や熟すり寢込まうとしてゐた夫婦は、悉かり眼を覺されて了つた。

夜が明けると猶太人の妻は私の家へやつて来て、昨夜は寢入初を妨たげられて實に閉口したと叱言を言つた。

「ラチエルさん！」と私の妻は彼女の名を呼んで、「どうも濟みませんでしたね。だけれどもねえ、子供ツてもものは詰らない事でも直に大きな聲で泣いたり笑つたりする者なんですから、何卒勘忍して下さいよ。これを御覽なさい。」と妻は例の玉を見せて、「これは魚の腹から出たんですがね、此玻璃玉が馬鹿に光ると云ふんで宅の子供が大騒ぎをしたんですよ。」

「なるほどアエーシャさん、これが妻の名であつた。玻璃の玉ですか。だけど普通の玻璃よりは餘程奇麗だし、丁度私ん宅にも其れと同じのが有るから、私が買つて御對にさせよう。賣つてくれます

か？」

此二人の女の話を黙つて聞いてゐた子供等は、俄かに其會話の邪魔をして、鼻聲になりながら玉を賣るなど母に願つたので、彼女は彼等を慰める爲に、あ、決して賣らないよと約束した。

猶太人の妻は斯う云ふ風にして、私の子供等の爲に玻璃の玉を手に入れ損つて、直に行つて了つたが、彼女は、親しく私の家で實見した物に就て委しく其良人に話さなければ承知が出来ないので、私の宅から歸りがけに其足で直に彼等の店を出してある所へ急いで行つた。さうして、間もなく又歸つて来て再び私の家に立寄り、私の妻に對つて、例の玉は餘り奇麗で、手に入れ度いと思ふから、廿圓で賣つては呉れまいかと申出でた。

私の妻は、單だ詰らぬ玻璃の玉だと思つて居たのに、それにしても餘り莫大な價格だと思つたので、直に賣買の約束はせず、先づ私に聞いてからでなければ手放す事は出来ないと言へた。丁度其時私は仕事に出て居た所から晝飯上りに歸つて来たので、妻は私を呼び留めて、例の玻璃の玉を隣の女房さんが廿圓で買はうと仰しやるが、賣る氣は有るか尋ねた。すると、私は忽ちサアドが鉛を私に呉れた時に、これで善い運を開けと言つた事を思ひ出したので、直に返辭はせずに黙つてゐた。猶太人の妻は、私の黙つて居るのは價格の附け方が低い故だと早合點して、今度は斯う言つた。

「奮發して五十圓上げる事に爲ませうよ。五十圓で賣つて下さいな。」
最初廿圓と切出したのが急に五十圓に一足飛をしたのを見るや否や、私は此奴は油斷が出来ぬと思つたので、五十や六十や七や仕様が無い、私はもつと大金を目的にして居るのだ、と澄して見せると、
「さうですか……ちやア思ひ切つて百圓出させよう。そんな玻璃の玉に百圓と云へば實に大金ですよ。」

百圓出して玻璃の玉なんか買つては良人に何と言はれるか知れやしない。」

これを聞くと共に私は、さては彼の玉はダイヤモンドに相違ないと氣が附いたので、悉皆沈着いた態度になつて、世間にあれ位のダイヤモンドは珍しいから私は十萬圓でなければ賣らない、實際の價格は却々十萬やそこらではないんだけれど、隣同士の懇意な間柄だから十萬圓に減けるのだ、若しそれだけ出すのは厭やだと云ふのなら、私は外の寶玉商に賣つて十萬以上の金を握るつもりだと申渡した。すると、猶太人の妻は愈々熱心になつて私と賣買の約束を結ばうと云ふので、漸次言ひ價を競上げて来たから、私は益々十萬圓説を固く持つて下らず、彼女が遂に五萬圓まで出さうと言つたが、私は頭として頭を横に振つた。

「私はもう五萬圓以上に計らひかねます。」と彼女は言つた。「良人と相談してからで無くては駄目ですから今夜良人が歸りましたら見せてやつて下さい。」

私は彼女の申出を承知した。

夜になると、猶太人は店から歸つて私の家へ来た。

「お隣の御主人。甚だ御手数敷ではあります、當家の内儀が拙者の妻女にお見せ下つたと云ふダイヤモンドを、私にも鳥渡拜見させて頂き度いのですが。」

と言ふので、私は早速彼を家の中に呼び入れて、ダイヤモンドを見せると、彼は緩り費つて頼りに賞め立てながら篤と検査した上で、
「これは成程立派なものですわい。エ、私の妻女は五萬圓まで奮發したさうですが、私は七萬まで出させよう。特別の大奮發をするんですから何卒それで譲つて下さい。」

と言つたが私は、
「いや、折角ですが七萬ちや駄目です。内儀から御聞きになりましたらうが、私は十萬圓から總一文
でも減けないんですよ。」

と斷言した。彼は、それでも幾何か減けて貰はうと云ふ量見で、随分長い間こぎつてみたが、何うし
ても私の決心が動かないと云ふ事を見抜くに至つて、且つ又、外の寶玉商に見せられては堪らないと
考へたので、溢々ながら私の言ひ價通りに約束を定め、取敢ず手附金として千兩囊を二つ出した。さう
して、翌朝殘金全部を渡す時間をきめて歸り、夜が明けると約束通りに九萬八千圓と云ふ大金を持つて
來たので、私は金と引換にダイヤモンドを渡してやつた。

斯う云ふ風にしてダイヤモンドを賣つて、實に希望以上の、限りの無い程に私には思はれる莫大な富
を得て、私は深く神の博愛仁慈を感謝した。私は又直にも恩人サアドの前に身を投げ伏せて感謝の意を
表し、サアヂに對しても同様に感謝しやうと思つた——假令其企畫が都合よく運ばなかつたとは云ひな
がらサアヂは最初の恩人であつたからであるが、彼等兩人の住所を全く辨へないので、何うする事も出
來なかつた。

それから私は此新たに得た莫大な金を如何にして用ひやうかと散々考へに考へた結果、其日終日
と又其翌日終日と全二日を費して、其時まで私が自らやつてみたと同様に、乏しいパンを得る爲に汗み
づくになつて致々と勞働して居る同業者を訪ね廻り、悉く前金を渡して、各自の伎倆熟練に應じて各種
各様の綱を製造して呉れるやうに依頼し、出來上りさへすれば又直に金を渡すからと勵ました。
此方法によつて私はバグダッド市の綱製造業を殆んど一手に握るやうになり、人々は皆私の金拂ひの

奇麗なのを喜んで、私の爲に善く働らいて呉れた。

何しろ殆んど獨占事業と云ふのだから、大勢の職人の手によつて造り出される品物が夥多しく集まる
ので、私は市内の諸々方々に大きな倉庫を借り受けて、それに商品を積込ませ、倉庫には一名づゝ主任
の店員を置いて、卸小賣兩方ともやらせたので、瞬く間に私の収入は驚く程増加し、充分の利益を見る
事が出来るやうになつた。其後、總本店と云ふやうなものを設ける必要を感じて來たので、地所を買つ
て其處へ建築したのが、昨日教王の御目に留つたと云ふ其建物である。あれは彼のやうに大きな立派な
宮殿のやうに見えるけれども、大部分は商品を積込んで倉庫の役目をさせてあるので、私はじめ家族一
同の部屋と云つては極めて少ないのだ。

私が此新築の家に轉居してから暫らく経つて後、私の身の上に就ては殆んど忘れかゝつてゐた恩人兩
人は、或日ふと私の事を思ひ出して、其後どんな風になつたか試みに見てやらうと云ふんで、私の舊の
住居を訪問して近所の人から悉かり事情を聞かされ、私が今はバグダッド屈指の大製造家となつて、名
前も舊のやうに安つぱくハツサンとは言はず、コヂア、ハツサン、アルハツバルと稱して居る事を知つ
て實に驚いたさうだ。

彼等は直に其足で私の新宅へ訪ねて來た。私は彼等が門に近づいたのを見ると、席を立てて駆け出し、
恭やしく彼等の服の裾に接吻しやうとしたが、彼等は然う爲せないので、私を抱きしめて呉れた。私は今
此やうな氣樂な身分になつても決して舊の身分——即ち貧乏な綱造りのハツサンであつた事は忘れな
し、彼等の恩義を忘れるものではないと云ふ事を緊と述べ、先づ彼等を席に着かせて私は彼等に對合つ
て腰を下した。

時に、サアヂが先へ私に話しかけた。

「ハッサン君！ 僕はもう嬉しくて、充分に口では言へない程ですが、君の運命に斯くまでも驚くべき變化の生じたのは、全くのところ僕が進呈した四百圓の爲めでせうな。」

「おい、君はまだ先にハッサン君が打明けた失敗談を信せず居るのかい？ どうも困つたもんだね。僕はこの二度の失策がハッサン君の身に繫つた事を全く信じて居るのに。だがまあ兎に角主人公の口から直接、我々二人の執れが此現在の繁榮を致すに力あつたかを承はらうではないか？」

二人の女の争論の後を受けて私は斯う言つた。

「あなた方暫く御耳を拜借致したい。私は此前と同じやうに正直に其後の事をお話申し上げませう。」と、今しがた述べた通りの事を委しく物語つた。

然し、どうもサアヂは私の話を全くは信じない様子で、
「ハッサン君！ 其魚の話だの、又その魚の腹の中から出たと云ふダイヤモンドの話などは、私にや前の兀鷹が頭巾を掠つた話だの、君の御家内が糠と風呂石鹼を取替へたと云ふ話と同様、失禮ながら何うも信用する事が出来ませんな。然しまア何方にしても、君が既に貧乏を脱して富豪の一人になられたと云ふ事は確かだ、私の方法で成功して貰はうと企てた通りになつたのだから、私は心から御喜びを申し上げますよ。」

と言つた。

やがて、日も大分西に傾いたし、遅くなつかけたると云ふんで兩人が歸らうとすると、私は彼等を留め

た。

「もう一つ是非お願いしたい事が有ります。それは外でも御座いませませんが、今夜は是非私どもへ御泊りを願ひたいのです。明朝は、私が田舎に買つて置きました小さな家がありますから、それへ川傳ひに御案内致して、夕方歸りたいものと存じて居りますんです。」

「有り難う！ 別にサアヂ君にさへ差支が無ければ、私は喜んで受けませう。」

と、サアヂが言ふと、サアヂも、此愉快な小集から引き離されるやうな難しい用事は更に無いから安心してくれと言つた。

こんな話をして居る間に、女中が晚餐の支度が出来たと知らせて来たので、私は彼等兩人を別の廣間に案内すると、明煌々たる燈火に照された室内の器具調度や、御馳走の品々を見て、彼等は頻りに褒立てた。私は又食事の興を補ける爲に、音楽を聴かせたりダンスを見せたり、其他出来るだけの響應をして私の感謝の一端を彼等に示さうと努めた。二人の客は頗るの上機嫌になつて了つた。

翌朝は早く出かけて新鮮の空気を呼吸しやうと云ふ事に約束してあつたので、我々は早く起きて支度も匆忙に、日の出の頃川へ行き、豫て用意をさせて置いた遊山船に乗り、熟練した六人の漕手に、流に従がうて漕がせたんだから、早い事は早い事は、一時間半と費らぬ中に私の別荘へ到着した。

我々は先づ庭を散歩した。そこには橙やレモンの木が並木を成して立つてゐて、色美しい果實は花を着け、木々の間は皆同一の間隔を置き、近所の小川から掘割を引いて、水の供給に差支へぬやうにしてあるのだ。私は此長い廣口とした並木道の終點に在る大木の林を客に示した。庭は此大木の林を以て劃られて居るのである。

私は前々から自分の子供を二人だけ保護の爲に、適當な保護者を附けて此別荘へよこして置いたのだ。丁度我々が並木道の終點にある林の前へ行つた時に、子供たちは其林の中へ入つて遊んでゐたが、非常に高い一本の木の上に鳥の巢を發見してワイ／＼騒ぎ出した。さうして一人の下男に對つて其巢を取つて来るやうに命じたので、下男は早速巧みに登つて行き、巢のある枝に達して見ると驚いた。有り觸れたものと異つて頭巾で造つてあつたからだ。下男は直に造作も無く其れを手にして下りて來たが、餘り珍らしいので、囁私が入る事であらうと考へて、年長の子供に渡して、私の所へ持つて來させた。

二人の友と私は皆々此妙な巢を見て驚いたが、私は忽ち其頭巾が過日兀鷹に掠はれたものに相違ない事を認めて一層驚き、精細に検査して翻覆して見てから、私の客に斯う言つた。

「あなた方は、初めて私と御會ひになつた時に、私が冠つてゐた頭巾を御記憶で御座いますか？」

「いや我々兩人とも、別に注意してゐなかつたから記憶しちや居りませんよ。然し其中に百九十圓入つて居れば決して疑ふ事は出来ませんな。」

とサアドが答へた。

「私が巢を解く前に篤く御覽下さい。」と私は再び巢を手に取つて言つた。「ね、此頭巾は木に引懸つてからもう餘程日の經つ料物ですよ。中に造られた巢は極新らしいものです。それだけでも兀鷹が此れを掠つた日に、木の上へ落すか引懸けるかしたものだ」と云ふ事が充分に證據立てられるちや御座いませんか。」

斯く語りつゝ、私は頭巾に巻附けてあるリンネルの布の中から財布を取り出して見せた。流石のサアドも

其財布は彼が私に與へた物と同じだと云ふ事を認めないわけには行かなかつた。私は直に彼等の目の前で財布を開けて、

「さア、あなた方、金は入つてゐました。金額が丁度合ふか何うか一つ御計算なすつて下さい。」

と言ふと、サアドは一々計算して、慥かに百九十圓あつたと答へた。サアドも此明白な事實を疑がふわけには行かなかつた。

「ハッサン君。いかにも此金が御役に立たなかつた事は明らかに解りました。然し、第二回目の分

君が機壺の中へ隠したとか云ふ、其金は果してお話のやうになつたものか、何うもね……」

と言ふから、私は、

「二度頂だいた金の事に就ては私は確かな事實を申上げたのですが、私は何とか致して貴下に御満足をして頂ける程の證據を御目にかけて度いと思つて居ります。」

と答へて、彼等を家の中へと導びくと、丁度よい都合に食事の支度が出来たと云ふところ。食後、私は暖かな日光に浴しつゝ、午睡をするやうに客に勸めて、自分は庭の手に就て植木屋に命令する爲に出かけた。

夜になつてから我々は馬に乗つた。さうして、美しい月の光を浴びながら野路を駈ける事二時間ばかりにしてバグダッドへ歸つた。

すると、其晩の事、馬丁の手ぬかりから、馬に食はせる物が何も無いと云ふ騒ぎが起つた。既に方々の店は閉つて居るし、據なく馬丁どもは手を分けて近所に何か無いかと探して歩く中に、一人の奴隷は或る店で一壺の糠を發見した。彼は直に其糠を買ひ、壺は翌朝返すと云ふ約束をして其まゝ悉くり持

つて来て、馬どもの餉秣槽に分けてやつて居る中に、リンネルの布で緊りと包んだ物を発見した。非常に重いが中には何が入つて居るか怪しみながら彼は私の所へ持つて来た。一瞥見ると私は其包の正體を悟つて、二人の恩人に聲をかけた。

「神様は、私があなた方に總ての證據を御目にかけて別れるのを残念と思召したらしう御座います」と、サアヂの顔を見て、「此包の中には私が二度目にあなたから頂いた使ひ残りの百九十圓と云ふものが入つて居る筈です。私が自分でチャンと結へましたんですから、布に見覚えがありません。」

と、彼等の目の前に金を出して見せた。序に其壺も持つて来させて見ると、儘かに私が入れた物と同じであつたが、尙ほ念の爲め、妻の部屋へ持たせてやつて、壺を記憶して居るか尋ねさせると、正しく相違ないとの返答であつた。

斯うなつてはサアヂも服従せざるを得ない。彼は其邪推疑念を捨て、其親友サアヂに對つて言つた。

「僕は君に降参した。富を成すの方法が金ばかりではないと云ふ事が能く解つた。」

私はサアヂに對つて斯う言つた。
「私が貴下を欺しなどはせぬと云ふ證據に神様が見つけ出すやうにして下さいました此お金と、今日の晝間田舎の家の庭で発見致しましたお金と、都合併せて三百八十圓と云ふものは、貴下に御返し申しませんから何卒其お含みでお出下さい。私は貴下の御心地の清い事を存じて居ります、決して成功の曉には金を返して貰はうなんていふ御考を下すつたのでは無いと云ふ事を信じて居りますから、幸ひに私の申出に御賛成下さるやうでしたら、神様が御喜びになるやうに、明日早速貧乏な正直な人に呉れてやる事に致しませう。」

二人の友人は喜んで其晩もまた私の家に宿つた。次の日、愈々彼等は歸宅すると云ふので、私と抱き合つた時に、私は繰返し「彼等の恩恵を感謝し、彼等と私との間に温かき友情を養ひ上げる許可を得、大いに光榮として近い中に彼等を訪問する事を約束して別れたのである。」

ハツサンの長語物を聞き終つて、教王は唇を開いた。

「コチア、ハツサン。久しぶりで余は左様云ふ楽しい話を聞いて、満足に思ふぞ。神様が汝に富を與へた不思議な方法は實に面白い。汝は永しに神様に對して感謝を続け、恵まれた富を有益に使はねばならぬぞ、汝の好運命を作つた其ダイヤモンドは今余の寶になつて居るのぢや。あのダイヤモンドの因縁の解つたのは何より結構な事ぢや。然し何ぢやな、汝の恩人ぢやと云ふ其サアヂとか云ふ男は、ダイヤモンドの件に就て未だ何とか疑念を抱いて居るかも知れぬから、友人のサアヂと共にいつか都合の好い時を見はからつて此宮殿に連れて来るがよい。さうしたら、余は彼等を寶藏の番人の所へ送つて、現に余の寶物中の寶物として大切にして居るダイヤモンドを見せてやらう。」

と、教王はコチア、ハツサンとシヂ、ヌウマンとババ、アブダアラとの三人に對つて、頭を合點々々してみせて、満足の意を示したので、彼等三人は一同に玉座の前に平伏して敬意を表し、徐かに退いて歸宅した。

○良人に殺された婦人の話

これも教王ハラウン、アル、ラシッドが變装して視察して歩いた當時の話であるが、教王は或る夕暮

に、總理大臣のギアアと侍従長のメスルウアを供に連れて王宮を出かけた。さうしてバグダッドの廣い辻々や市場を幾つも幾つも過ぎた後、或る小さな町の通路に入込むと云ふと、向ふの方から白い髯の生えた丈の高い男が、其頭の上には網を載せ、隻手には竿を持つて、月の光を浴びて来るのに出會つた。總理大臣は王の命令に従がつて其男を呼留め、何う云ふ商賣をして居るか尋ねると、其男は答へた。「私は極貧乏な漁夫で御座います。今日は正午から魚捕りに出かけましたが、今まで費つて一尾も取れないのには弱つ了りました。女房や小さい小兒も有りますんですが、斯う不景氣ぢや、食ふ物も食はせる事が出来ません。」

教王は此言葉を聞くと、非常に氣の毒になつたので、其男に聲をかけて、

「暫く宅へ歸るのは見合はせて、もう一度だけ網を投げて見たら何うかな！ 其一網に何が入つても關はず五百圓で買ふが何うだ？」

と言ふと、其男は大喜びで、其日の疲勞も忽ち打忘れ、教王と總理大臣と侍従長との三人と一しよにチグリス河へと引返した。

そこで漁夫が一網投げて、徐ろりに引上げて見ると云ふと、緊りと蓋をした非常に重い洋靴が一つ上つて来た。教王は約束通り即座に五百圓の金を總理大臣に拂はせた。さうして其トランクは侍従長のメスルウアの肩に擔がせ、中に何が入つて居るか早く開けて見たいが一心で足を急がせて宮城に歸つた。さてトランクを開いて見ると、中から現はれたのは棕櫚の葉で造つた大きな籠で、これも嚴重に閉ちてある上を赤い糸で縫附けてあつた。何しろ教王が頗る好奇心を昂めて焦心たがつて居るので、大臣と侍従長は一々糸を解く間も遅しと、ナイフを以て切放して見ると、未だ正體は現れずに卓子掛のやうな

布に包んで其上に嚴重に網をかけた一個の包が出て来た。餘り手数の費つた荷物なので彼等は益々興味を深くしながら、愈々其包を開いて見ると驚ろいた……中には寸断に切り細ざいた若い女の屍體が入つてゐたのだ。

此恐ろしい慘酷しい光景を見た王の驚きは實に言葉にも盡されぬ程で、其驚きは即て烈しい不快の念となり、大いに立腹の顔色で總理大臣に聲をかけた。

「こりや、總理大臣！ 汝の政治する國民の間に斯う云ふ事が行なはれるのか？ 一國の首都に、斯う云ふ慘酷な殺人が犯されるのか？ もし、今後三日の間に此女の殺害者を汝が発見出来なければ、汝と汝の六親三族を悉く死刑に處するから、其つもりで嚴重に探索するが好い！」

随分亂暴な宣言ではあるが、繪言汗の如しとやら、教王の命令とあつては何とも致し方が無い。總理大臣ギアアは非常な煩悶を胸に抱いて其邸宅に歸つた。さうして心ひそかに斯う思つた。「嗚呼！ こんなに入口の多い大きなバグダッドの市中を、僅か三日ばかり探索したつて、到底あの女を殺した罪人なんか発見されるものではない。これが他の大臣なら、今監獄へ入つてる囚人の中から一人選んで其首を切つて、此男があの女を殺した罪人で御座いますと言上して旨く教王に御満足を御させ申すのであらうが、私には到底そんな酷い事は出来ない。假令囚人とは云ひながら此度の事に何の關係も無い者を犠牲とするよりも、自分の一命を取られた方が優だ。あつまらない事が起つたもんだ。」と。

容易ならぬ此殺人事件に就いて命令を受けた警察は申すまでも無く、裁判所の連中も共に力を協せてバグダッド市の内外を隈なく探索したけれど、それは總て徒勞に歸し、遂に總理大臣は愈々一命を失なふ事に覺悟を定めた。三日目になると、恐ろしい火炙りの刑を行なふ柱を用意する間に、王は一方人を

遣はしてギアファの六親三族の者どもを逮捕せしめ、市中一般に王の名を以て、

「總理大臣ギアファ及び其六親三族が火刑に處せらるゝを觀覽せんとする者は、宮城前の廣場に來るべし。」

と云ふ布令を出させた。

すべての準備が出来ると云ふと、宮内判士及び士官は、總理大臣と其六親三族とを廣場に引張り出して、火炎の柱の兩側に置き列べた。廣場を隙間も無く埋めて居る夥多しい群集の人は、誰一人として悲歎の涙を以て此光景に接せぬ者は無かつた。それも其筈である。總理大臣と其六親三族との誠實、仁慈、公平は單にバグダッドの都のみならず、總ての教王の領内に住む人々から深く敬愛されてゐたのである。斯く總ての準備を終つて、たゞ死刑執行の信號を待つばかりの所へ、顔容の立派な一人の青年が群集を押分け押分けて出て来て、遂に總理大臣の前まで来て、丁寧に挨拶した後から云つた。

「總理大臣閣下！ あなたは此様な場所に御立ちになるやうな罪は何も御有んなさらないのです。こんな所を一刻も早く御退場なさい。チグリス河の死美人と關係の有るのは私で御座います。實は私があの女を殺した犯人なのですから、私が刑を受けるのは當然です。」

此言葉がまだ終らぬ中に、今度は一人の老人が群集を押分け進み出て、高い聲で嗚鳴つた。「總理大臣閣下！ 其若い人の申す事を御信用なすつては不可せんよ。トランクの中から出た死美人の下手人は私です。決して、關係の無い者をお懸けにならぬやうに願ひます。」

それから、老人と青年とは互に殺人犯の當人だと主張して一歩も譲らざるやうで、總理大臣は據なく彼等兩人を伴れて教王の前に出で、身を俯伏して七度床に接吻してから斯う言つた。

「陛下！ こゝへ召連れしました老人と若い者は何れも互に死美人の下手人だと申して果しも御座います。せんのですが、如何致したら宜しう御座いますか！」

「連れて行け！」と王は命じた。「二人とも死刑にせよ。」

「然し、全く此兩人の中何れか一人が犯人であると致しますれば、二人ながら刑に處するのは不當の事と存じますですが……」

と大臣が言ふ後から、若い方の男は聲を出した。

「私は天帝に誓つて、かの死美人を手にかけて、寸断／＼に切り、今から四日前にチグリスの河へ投込んだのは私であると云ふ事を斷言致します。私は當然其刑を受くべき人間なので御座います。」

教王は此誓言を聞くと、非常に驚ろいたが、神かけて誓ふと云ふ言葉を信じた。「ふうむ！ どうしてまた彼如慘酷な事をしたのか？ さうしてお前が今白状するやうになつたのは什麼動機によるか委しう聞かせ！ 先づお前の身の上から略と話すがいぞ。」

此死美人と云ふのは、實に私の妻で、こゝに居る此老人の娘なのである。此老人は私の伯父だ。此伯父が娘を私の妻として呉れたのは彼女が未だ十二歳を越えぬ時であつた。彼女は私の所へ嫁いで来てから三人の男の子を儲けた。それは皆今丈夫に育つて居るのである。

妻は決して私に抗らふやうな事は無く、よく私に仕へて私を樂しませる事に全力を盡したから、私も亦彼女を熱烈に愛し、どんな事でも彼女の願ひとあれば聽許れるやうに努めてゐたのである。

ところが今から二ヶ月程前、妻は病氣に罹つたので、私の心配は非常なもの、彼女の身に就て考へ得られるだけの注意を加へ、時間を惜まず費用を虞れず彼女を全快させる爲に全力を盡した。

すると或日の事、妻は病床から頭をあげて、
「ねえ良人。わたし林檎が食べたたくつて仕様がありませんの。随分久しい間食べたいと思つてたんですよ。」

と願つたので、私は直に市場へ出かけて行き、方々の店へ寄つて、林檎を求めたが一つも無い。賣つて呉れさへすれば一つ四五圓と云ふ高い價格でも差支はないと言つたが、何しろ全く時外れと云ふので、何處にも有る筈が無い。私は實に胸を悩まして、なほも其邊をぶらついて居ると、先刻から私の無理な註文に注意してゐた一人の老寄つた庭師風の男が私に聲をかけて、幾ら此バグダッドの市中を足を揺木にして歩き廻つても今頃林檎なんか有らう筈は無い、たゞブツソリアにある教王陛下の御苑に有るばかりだと教へてくれた。前にも述べた通り、私は非常に妻を愛してゐたので、必ず彼女を満足させなければならぬと思ひ、妻にも自分の考を打明けて、早速旅の仕度を調べてブツソリアへと出立した。

バグダッドからブツソリアへ行つて歸るとすれば、普通少なくとも二十日以上は費やさねばならぬのだが、私は殆んど半ば夢中の體で急いでゐたので、僅か十五日間で往復し、一個五圓づつと云ふ代價を拂つて、立派な林檎を手に入れて來た。然るに、歸宅してそれを妻の手に渡して、どんなに喜ぶかと思ひの外、彼女は既うそんなに欲しくは無くなつてゐる様子で、満足げな禮は述べたが直に食べせせず、寢床の傍にそれを置いた。

それから二三日の後、私が平日のやうに、色々立派な織物を賣る自分の店頭に着つて居ると、一人の

醜い顔をした丈の高い黒奴が、手に林檎を一つ持つて丁度私の店の前を通りか、つたので、オヤ／＼珍しい物を持つて居るなと氣を附けて見ると、何うも私が遙々ブツソリアまで行つて高い金を出して買つて來た物と同じやうな氣がするので、私は彼に聲をかけて尋ねた。

「おい／＼。お前さん何處からそんなに美事な林檎を持つて來たのかね。今時珍しいぢやないか？」
「へい。特別の貰ひ物でしてね。」と彼は微笑みながら得意げに答へた。「こりや私の仲の好い或る奥さんが呉れたんですア。今日一寸逢ひに行つて見ますとね、傍に此林檎が三個あつたんで、私も珍しいと思つて、一體何處から手に入れたのかと尋ねて見ると、其奥さんの御亭主だと云ふ、鼻の下の長いお目出度い男が、可愛い女房の爲に遠い所へ二週間も旅をして買つて來て呉れたんださうです。私や其奥さんと別れ際に此奴を一つ貰つて來たんですよ。」

こんな醜い黒ン坊の奴隷が私の妻と懇懃を通するなんて、そんな道理の有らう筈は無いと思ふけれど、今の言葉を聞き其林檎を見れば満更嘘とは思はれぬ。私は直に店を閉ぢて全速力で駆け出して宅へ歸り、直に妻の室に入つてみた。さうして、林檎の置いてある所を見ると、二つしか置いてないから、もう胸をワク／＼させながら、其一つは何うしたかと妻に詰問すると、妻はチラリと林檎の置いてある場所を一瞥したばかり、頗る冷やかな様子で、

「どうしましたかね、私は存じませんよ。」

と答へた。此冷淡な返答を聞くと共に、私は彼の黒奴の言つた事を正しく事實だと合點した。さうして、烈しい嫉妬心やら立腹やらで半ば狂氣の如くになり、前後の思慮分別をする餘裕も無く、腰に挿してゐたナイフを抜いて忽ち妻を殺して了つた。さうして其屍體は大きなトランクの中に入れ、人目に觸

れないやうに夜になるのを待つてチグリス河の岸へ擔いで行つて、投げ込んだのである。
ところが、河から歸つて來ると、私の長男が門のそばに立つて泣いて居るので、何うしたのかと尋ねると、長男は歎息しながら斯う言つた。

「あたね、今朝お母さんに知れないやうにして林檎を一つ取つたの。そして、直に食べちやつては詰らないから、それを持つて弟と一所に戸外へ出て、往來で遊んでゐたらね、丈の高い黒奴がヒョイと掠つてズン／＼向ふへ行くから、あたね一生懸命に後から追つかけて「お返しよ、お返しよ」つて然言つて、それから、林檎はお母さんが病人になつてゐるんで、お父さんが遠い所へ十五日も旅をして辛と買つて來たんで、大切な林檎なんだから返して呉んなさや困るつて言つただけど、何うしても返して呉れないの！ そしてね、何處までも、あたねが追つかけて大きな聲で泣くもんだから、其黒奴がね、引返してあたねを酷く打つてね、一生懸命に逃げて見えなくなつたの、だから、あたねお父さんが歸つて來たら篤く頼んで、お母さんが氣を揉むと不可いから、お母さんには聞かせないやうにして貰はうと思つて今まで待つてゐたの。」

と、子供は又もや烈しく泣いた。

私は私の長男の話を聞いて、到底口では言へない程に、たゞもう氣が遠くなる程驚ろいた。さうして、自分が容易ならぬ重罪を犯し、憎むべき奴隷が私の長男の口から聞いた事を悉皆述べ立てたのを其まゝ、に嫉んで、欺かれたとは知らずに大變な事をして最愛の妻を亡つた事を深く後悔したが既う遅い。殺して了つた者は何うする事も出来ないのだ。

* * * * *

此青年の話を仔細に聞き終つた教王は、驚いて斯う言つた。

「それでは、此殺人事件を惹起したのは其憎むべき奴隷だ。死刑に處せらるゝのは其奴であるべき筈だ。それでは……」と總理大臣の方に向つて「總理大臣！ 余は今後三日の間に其憎むべき奴隷を發見するやうに命ずる。もし三日間に捕へる事が出来ななら、汝が死刑に處せらるゝのちや。汝の責任である以上は氣の毒だが已むを得ない。」

可哀さうなのは總理大臣のギアファである。彼は辛と命拾ひをしたかと息を吐く暇も無く、又もや非常な煩悶を抱いて其邸宅に歸つた。

三日目となつて、愈々總理大臣が死刑を受ける前に教王の王座の前へと引き出されやうとする時、家人は漸やく五歳か六歳になつたばかりの末の娘を連れて來て、父の最後の祝福の言葉を受けさせやうとした。大臣は出迎の役人に暫く猶豫を頼んで、其娘を兩腕に抱きしめ、幾度も幾度も接吻したが、其途端に、子供の胸の所が大層ふくれて、其處から爽快かな佳い香氣がするのに氣が附いたので、

「これ、嬢や。お前胸の所に何を入れておゐるで？」

と尋ねると、娘は無邪氣な顔で答へた。

「林檎よ。ライアン爺やから十圓で買つたの。」

「林檎」と云ふ言葉と「ライアン爺や」と云ふ言葉は、總理大臣に思はず驚喜の聲を發せしめた。それも其筈、ライアンと云ふのは彼の家の下男として使つて居る黒奴の名であつたのだ。大臣は直に娘の胸の内方へ手を入れて林檎を引張出して見ると、正しく教王の御苑に出来るものに相違ない。で、彼は直にライアンを呼びにやつて、其黒奴が恐るゝ前へ來ると唐突嗚りつけた。

「此惡漢め！ きさま此林檎を何處から取つて來た。偽らずに白状しろ！」

「御前様！」と彼は恐縮の體で答へた。「これは慥かに當家の物を取つたのでは御座いませんし、王様の御苑から盗んだのでも御座いません。實は、私が先日日用足しに出かけましたの歸りに或る町を通りますと、三四人の男の子が遊んで居りまして、其中の一人が此林檎を手に持つて居りましたので御座います。何しろ今時何所へ参りましたも林檎なんか一つも有る筈の無い時で、餘り珍らしさにツヒ欲しくなりましたもんですから、ホンの一時の出來心で其れを横取りして逃げましたのです。其時、其子供が私の後から追かけながら申した事を聞きますと、其林檎は子供ではなく、實は病氣に罹つて居る母のださうで、其病人が頻りに林檎を欲しがるので、其良人と云ふのが、態々遠方まで旅行をして求めて來たものだと言ふ事で、悉皆で三つあると云ふ其一つを子供が母親の氣の附かないやうにして取つて來たんだから、又返して置かなきゃ叶ないと申しましたのです。然し、私は取りつばなしで歸つて來ましたが、小さい姫様が是非欲しいと仰しやるので、十圓に賣つて上げましたので御座いまして、決してもう當家や御苑から盗んだものでは御座いません。」

ギアアは、其家に使つて居る奴隸の一人が、一時の出來心から惡戯半分にした事が、何も知らぬ立派な婦人の命を取り、すんでの事に一國の總理大臣たる自分の命をも取らうとした其徑路を考へて實に驚かざるを得なかつた。彼は早速奴隸のライアンを召連れて教王の前に出で、ライアンから聞いた通りの事を逐一言上した。

教王も呆れ返つて斯う言つた。「死美人一件の原因は其處な奴隸の惡戯から起つた事ぢや。早速彼を死刑に處せい！」

「御意の通りに致しませう。」と總理大臣は答へたが、又些いと考へて、「然し、陛下。私は埃及の大臣に關する奇妙な話を聞いた事がありますので、是非それを陛下にも御聞かせ致したいと存じます。もし其話が此度の死美人一件よりも更に不思議で御座いましたなら、此奴隸の二命を奪ふ事だけは御許し下さるわけには参りませんでせうか？」

と哀願すると、教王は肯いて、「それでは早速語つて聞かせるが好い。」と、暫時の猶豫を與へたので、總理大臣は次の如き物語を始めた。

○埃及奇聞

すつと昔の話であるが、埃及の國に、正義を愛し、慈悲心深く、且つ勇氣のある國王があつた。此國王に仕ふる大臣に、聰明な忠實な而も博學多識な傑物があつた。此大臣は一人の男の子を持つてゐたが、これ亦父に劣らぬ立派な人物で、兄をシエムセツデン、マホメッドと云ひ、弟はヌウレッデン、アライと云ふ名であつた。

大臣の死後、國王は大臣の遺兒の兄弟の者に、父と同じく大臣の役を授ける事にして、兄弟の者を呼び、「此度父を失うたのは國の爲にも汝等の爲にも誠に惜い事ではあるが、今さら何と言つても返らぬ事だ。で、余は今後汝等兄弟の者に父と同じ官位を與へる事に決心をしたから、兩人ともよく注意をして、父の名を辱かしめぬやうに勤めて貰ひたい。」

と申渡した。兄弟の者は恭やしく君恩の厚きを謝し、其時から二人の中いづれか一人は必ず國王に侍する事とし、此名譽は兄弟交代に受ける事にきめた。彼等兩人が大臣となつてから左程多くの月日も數へぬ或日の晩、兄弟晚餐を共にした後、打解けて色四方山の話をしてゐた。丁度其翌日は、兄の方が國王の御供をして狩獵に出かけると云ふ事になつてゐたのである。

其時兄が話題を變へて弟に言ふには、

「我々兄弟二人は斯うやつて日夜親睦く暮して居るのだし、お互に未だ妻を娶らずに居るが、寧ろその事何處かの立派な家柄の人で娘を二三人持つて居る人を發見して、其娘二人を我々の妻に貰つては何うだらうね？」

「まことに名案ですな。」と弟は答へた。「私は兄さんの仰しやる事には大賛成です。」

「未だ其ればかりぢやないのだよ。假に我々が子供を持つとしてだね、お前には息子が出来て、私には娘が出来たとしたら、末には此子供同志を夫婦に爲やうぢやないか？」

「無論ですとも！ さう云ふ結婚は益々我々を結合して親密の度を増すのですから、私は無論一も二も無く承知しますよ。然し、其時はね、兄さん。」と少し冗談が、つて「あなたは私の息子に對して、あなたの娘が寡婦となつた時に與へる財産を定めて置けと仰しやるでせうか。」

「何も面倒な事は無いさ。お前だつて結婚の外に、少なくとも三千圓の金と三ヶ所の地面と三人の奴隷を、お前の息子の名で私の娘に與へると云ふ約束位はするだらうから。」

「冗談仰しやつちや不可んよ。私はそんな事は不承知ですよ。我々は肉身の兄弟で、而も同じ役を勤

める大臣ぢやありませんか。兄さんは、我々兩人の意見の中どつちが正しいと御考ですか。男の子と云ふ者は女の子よりも遙と價値の多いものです。あなたの方こそ娘に澤山持參金を付けて下さるのが當然と思ひますよ。然し、失禮ながら兄さんは他の禪で角力を取らうと云ふ御量見のやうですな？」

弟のヌウレッヂンは、これを冗談半分に言つたのだが、兄は眞に氣を不快して了つた。

「假令同役であるからと言つても、お前が私と同等だと考へるなんて、お前少々頭腦が何うかして居やせんか？ 私は、よくお前に知らせして置かう。お前が然う云ふ考で居るのなら、假令お前が息子に什麼條件を付けて來たつて決して私の娘は嫁らないから然う思つておいで。弟の分際で其様な口の利き方をする者が有るもんぢやない、失敬な！」

と、ぶん／＼怒つて自分の部屋に退ぞいた。さうして、翌朝早く起きて王に従がひ、金字塔附近の狩獵に出かけて行つた。

弟のヌウレッヂンは、あゝ云ふ風に兄を怒らせたからには既う同じ家に住んでは居られないと思つたので、丈夫な驛馬を一頭用意し、自分の所有品と定つて居る金銀寶玉の類を身に付けて、家人には鳥渡

二三日忍びの旅行をして來ると言ひ残して、生れた家から出發して了つた。

年久しく住みなれた埃及の都カイロを後にしたヌウレッヂンは、アラビヤの沙漠の方へと道を取り、驛馬を急がせてゐたが、間もなく其驛馬は役に立たなくなつて了つたので、據なく徒歩となつて旅を續

け、頗る困つて居るところへ、折よく隣國のブッソラアへ行く早飛脚が通りかゝつて、彼を馬の背に乗せて呉れた。

やがてブッソラアの都に到着すると、ヌウレッヂンは早飛脚の親切を厚く謝して、馬を下り、何處か

に宿屋を見つげやうと考へながら歩き廻つて居る中に、大勢の供人を従がへた立派な役人に出會つた。見れば、人民は皆彼と行き逢ふ毎に恭やしく敬禮して、其行き過ぎるまで立留つて居る。これは即ちブツソラアの總理大臣で、市内が順序よく治まつて居るか何うかと檢閲する爲に、練廻つて居るところであつた。

此總理大臣は、偶とヌウレッヂンに眼を留めて、非常に注意して睥めた後で、旅人の姿をして居るのにも心つき、暫く行列を止めてヌウレッヂンに聲をかけ、何者で、何處から来たかと尋ねた。

「私はカイロの都から参りましたのです。」とヌウレッヂンは答へた。「身内の者の不親切の爲に國を捨てて出ましたので、何處と云ふ的も無く世界中廻つて歩いて、もう故郷の家へは歸らずに死んで了ひたいと思つて居ますんです。」

總理大臣は非常に氣賀の好い人であつたから、ヌウレッヂンの言葉を聞いて斯う言つた。「これ、若人！ 確乎しなさい。そんな馬鹿な事は言ふもんじゃない。お前さんは世間を渡ると云ふ事が什麼に辛いか確に知らないもんだから那麽事を言ふんだ。まあ私に従つておるで、何とかしてお前さんが國を捨てなげりや叶はんやうになつた其不幸を慰さめて上げる事が出来やうと思ふからね。」

ヌウレッヂンとて他に頼つて行かうと思ふ所も無いのだから、言はれる通りに従つて行つて、當分世話になる事にきめた。

總理大臣は間も無くヌウレッヂンが善良な性質を有つた俊秀の青年である事を見ぬいて、非常に可愛がるやうになり、或日彼に對つて密に斯う云ふ事を語つた。

「見らるゝ通り、私もコレ随分老人になつて居るから、さう長くは此世に生きて居られぬさね。とこ

ろで私には娘が一人有るつきりね、随分方々から縁談の申込もあるのだが、私は大變お前さんが氣に入つたから、娘の婿にして私の養子になつて貰ひたいと思ふんだ。そして、お前さんが幸ひに承知して呉れたら、私はお前さんを養子にしたと云ふ事を國王陛下に申上げて、私の後継者としてブツソラア王國の總理大臣たる官位を御許し願はうと思つて居るのだ。」

これを聞いたヌウレッヂンは、總理大臣の足元に平伏して、其深い情を感謝し、抑へきれぬ歡喜を表はした。總理大臣は直に家令家扶を呼び集め、邸内第一の大廣間を立派に裝飾して、盛大な宴會の用意をせよと命じ、また急ぎの使者を八方に飛ばせて、朝野の貴族名家を招待した。

やがて貴族名家の人々が雲の如くに集會すると、總理大臣は立つて一場の挨拶を述べ、今日急に諸君を招待したのは、ヌウレッヂンと云ふ男を養子に定めたに就いて、其披露を致したいと思つたからであるとして説明した。客は一齊に歡呼喝采して皆此慶事を認めた。それから直に壯麗なる結婚式は舉行せられ、引續いて盛大な宴會に移つた。

話頭一轉、ヌウレッヂンの兄シエムセツヂンは、狩獵を終つて歸宅して見ると、弟が家を捨て、出奔した事が解つたので非常に悲しんだ。それも弟の自恣から出たのではなく、慥かに自分の烈しい怒りの言葉が原因になつて居ると察したので、辛くて堪らなかつた。彼は早速人を四方に遣はして、先づダマスカスあたりから遠くはアレツボオまでも捜させたけれど、ヌウレッヂンはブツソラアに居たのだから方角違ひの搜索では見つかるとは無い。何處にもヌウレッヂンの姿が見えぬと云ふ報告に接したシエムセツヂンは更に遠方の他の處を捜すやうに命じた。そんな事をして居る間に、縁が有つて、彼はカイロ市の或る名門の娘と結婚をした。不思議な事には其結婚式を擧げた日が丁度ブツソラア王國の總

理大臣の娘とヌウレッヂンとが結婚した日と同じであつた。さうして更に奇々妙々と言ふべきは、此結婚から八九ヶ月の後、彼等兄弟は同じ日に子供を一人づつ儲け、シエムセツヂンはカイロ市で女の子を、ヌウレッヂンはプツソラア市で男の子を、夫々に目出度く擧げた事であつた。ヌウレッヂンは其男の子に、ペドレッヂン、ハツサンと云ふ名を命じた。

初孫を得たプツソラアの總理大臣の喜びは實に非常なもので、例の如く朝野の貴族名家を招待して盛大な祝宴を開くやら、立派な贈物をするやらして、大騒ぎをやつた後、其養子を重く見て且つ深く愛して居る事を示さんが爲に、早速宮城へ出かけて行き、其身は老朽事に堪へなくなつたから何卒ヌウレッヂン、アライを代りの總理大臣にして呉れと頼んだ。王は快く直に承知をして、時を移さず、ヌウレッヂンは相當官職の制服と徽章と太鼓と旗印と、寶石を鑲めた金製の文房具箱を授け、新任總理大臣たる事を證した。

それから四年の後、プツソラアの老宰相は歿して、其先祖の墓と一つにして葬られた。ヌウレッヂン、アライは、養父に對する最後の義務を果してからと云ふものは、一心籠めて、只管其子の教育に力を盡した。其子は天性伶俐な學問好の質であつたので、七歳にして早くもコオランの經典を學び、十二歳を越えぬ中に、優れた師傅に指導されて、文武兩道の奥儀を究め、堂々たる見識を具へた外に、彼は其容貌風采に於ても亦非常に美しい男振を有してゐた。

父ヌウレッヂンは伴ペドレッヂンに、充分其後継者となれるだけの實力を與へて置かうと考へたので、非常に重大な困難な事務を見習はせたが、間も無く、彼は其れ以上教へ込む事を何も持つてはゐない程に伴の力が進んだのを見て、寵愛は日に増し募るばかり、いざ今後は仕込んでやつた結果を實驗して樂

しまうかと考へた時、不幸にも俄かに烈しい急病に襲はれ、殆んど一命も危ふいと云ふ重態に陥つた。ヌウレッヂンは、もう死ぬものと覺悟をして早速其子を枕元に呼び寄せ、一冊の本を取出して彼に渡しながらか、斯う言つた。

「此帳面を收めて置け。さうして、餘暇の時に讀んで呉れ。中には、色々な事が澤山書きつけてあるが、其中に、私の身の上に関した事が随分書いてある……何處の國から來た者であるかと云ふ事も、親族縁者一門の關係などは詳しく書いてあるし、お前の生れた日の事もある。今後何かの場合に必要な事も有らうと思ふから、此帳面は大切に保存して置くんだよ。」

伴は元から深く此慈愛厚き父を敬愛してゐたし、現在重病に罹つた事を實に氣の毒に思つてゐた矢先だから、慥かに遺言と思はれる今の言葉を聞くと共に、男泣に泣いて其備忘録を受取り、決してそれを手放すやうな事は爲ないから安心して呉れと斷言した。

ヌウレッヂンは、愈々最後の呼吸を引取りさうな氣がして、鳥渡氣が遠くなつたが、再び正氣に回ると、苦しい呼吸の間から、次のやうな忠告を與へた。

「これ、ペドレッヂン！ 第一に私がお前に教へた事は、如何なる人とも親しむは好いが狎れ過ぎるなど云ふ事だつたね。第二には何人に接するにも穏和である事、これは多くの敵を作らぬ用心だ。第三には腹の立つてる時は口を利かぬ事、諺にも「沈黙は危険を避く」と言つてある位だから、これは特に注意しなげりやならん。第四には酒を飲まぬ事、酒はとかく災害の原因になりやすいからだ。第五には、儉約して生活する事……これは皆よく記憶して居るだらうね？」

と、彼は愈々最後の時まで有益な忠告を言ひ續け、遂に思ふ事は充分に遺言して、何事も残さず、た

だ限り無き悲しみばかりを後にして死んだのである。

ヌウレッツデン、アライは其高い官位に相當する禮を以て葬られた。伴のベドレッツデン、ハツサンが其父の死を悲しんだ事は實に想像の外であつた。世間普通は一ヶ月の喪に服して謹慎懺悔するのが例であるのに、彼は一室に閉籠つたがり悉かり慍ぎ込んで、二ヶ月以上も何人にも面會せず王宮にも參内しなかつたので、察しの無い國王は單に外面から見てもベドレッツデンの怠慢を憤り、直にヌウレッツデンの歿後新たに任命した總理大臣を呼び出し、早速ベドレッツデンの邸に出張して、其邸宅も他の地所も家作も家財道具も悉く没收してベドレッツデンを捕へ、禁錮の刑に處せよと嚴命を下した。

そこで新總理大臣は直に其使命を果さんが爲に、多くの役人を従がへて出張した。すると、此評判を早くも耳にした町の人達は、群を成して往來へ出かけて、總理大臣一行の通過するのを見物してゐたが、其中にベドレッツデン、ハツサンの奴隸が一人居合せて、事の様子を知るや否や、これは至急主人に注進しなければならぬと云ふので、一目散に駆け出した。

歸つて、主人はと捜して見ると、玄關の一室に座つて、ツイ今しがた父が死んだばかりと云ふやうな風をして悲しみに沈んで居る。奴隸は、主人の足元に身を投げ伏せ、息せき切つて主人の服の裾を接吻した後、かう言つた、

「旦那様！ 大變で御座います。直にお逃げなさいまし。」

不幸な若い主人は、驚き顔に尋ねた。

「何事が起つたんだい？」

「旦那様！ 一分もグヅグヅしてゐらしては不可ん。國王陛下が大層あなたを御立腹なさうで御座

います、あなたの財産を没收した上あなたの御身を捕縛しろと云ふ御命令で、今もう其役人どもが來かけて居る途中なんで御座います。」

此忠實な親切な奴隸の言葉は非常にベドレッツデンを驚かした。彼は前後の事を考へる暇も無く、飛上るやうにして長椅子から立上り、大急ぎに靴を穿き、途中で人に出合つても顔を見られないやうに、素袍の布を頭から冠り、何處へ行かうと云ふ目的もないが、取敢ず差迫つた危険を避ける爲に逃げ出した。

急ぎに急いだベドレッツデンは、知らず公衆墓地に入り込んだ。さうして、其日も徐々暮れて來たので、儘よ、懐かしい父の墓に寄り添うて一夜を明す事にしやうと決心した。父の墓と云ふのは天井が圓頂閣になつて居る大きな建物で、ヌウレッツデンが未だ死なぬ前、回々教徒の習慣に従がつて、其身の爲に建築して置いたのだ。其建物を目ざして行く途中、彼は一人の猶太人の商人が市内で用を足して歸つて來ると出會つた。此男はベドレッツデンが何う云ふわけで其邸宅から逃げ出して來たかと云ふ事を知らなかつたが、豫て相識の間柄なので、丁寧に挨拶して聲をかけた。

「御前！ 私はあなたに鳥渡御願ひ致したい事が御座いますね……へい、外でも御座いません、實は御薨去になりましたあなたの御父様が、幾艘かの船に積んだ荷物を御所有になつておゐでなんでして、其れが今は全部御前の御所有となつたわけですが、其れを他の商人に御賣りになります前に是非私に御賣りを願ひたいんで御座いますよ。斯う申しちや少々口憚つたいやうですが、私は其船の品を全部買込む程の金は用意致して居りますんで、先づ第一番に港へ入る船の分だけを御譲り願ふとして、只今千圓だけ内金を差上げて置かうと存じますんで……へい、船はまだ海に居りますんで、追附け港へ入る事になつて居りますんですから。」

斯う言ひながら猶太人は懐中から袋を出して、其中から千圓の封金を取出して見せた。

ベドレッヂンは其邸から逃げ出す時、餘り周章で、旅費は元より何一品身に附けては來なかつたので、猶太人の申出を聞くと、これぞ天の與へと喜んで早速承知の旨を答へた。

「ちやア甚だ御手数ですが、念の爲めに契約書を一通御認ためを願ひませう。紙などは私が持參致して居りますから。」

と言ひながら猶太人は腰帯から矢立のやうなインキ筒を抜き出して、其筒の中からペンに代用する筆の先端を新らしく削つた物を取り出し、一枚の紙と共にベドレッヂンに渡したので、彼は次のやうは文句を書いた。

ブツラアのベドレッヂン、ハツサンは、猶太人イサアクに對して、最近に於て此港に到着すべきベドレッヂンの持船の中、第一番に入港するもの、積荷全部を賣渡すものとす。

右代金として金千圓今日正に受取済に付き、後日の爲め證書一通を茲に作成す。

ベドレッヂンは、これに署名して猶太人の千圓の金と引換に渡し、別れを告げて再び父の墓の方へと足を向けた。

彼は父の墓の前へ出るや否や、其身を地上に投げ伏せてハラ／＼と落涙しながら、おのが身の上につた不運の顛末を、生ける人に物言ふ如くに語つて、暫く然うやつてゐたが遽て立上り、父の墓石に頭を凭せかけて身を横にし、知らず／＼熟すと睡込んで了つた。

彼が熟睡してから餘り多くの時間も経たぬ時に一體の仙人が現はれた。彼等社會の習慣として、晝間は墓地に潜んでゐて、夜になると方々飛廻らうとするのである。此仙人は、弗とした出來心でヌウレッ

ヂンの墓に入つたが、目の前にベドレッヂンが仰向になつて睡つて居る顔を見て、其美しさに驚嘆した。見あきるほど肥と睨めて充分に満足してから、ふわアリと空に舞ひ上り、少し飛んで行くと一人の仙女に出會つた、無論仲間の事であるから、仙人は仙女に挨拶して、

「どうです、私の住家にして居る墓地へ下りて見ませんか、それは／＼素敵に美しい人間が居ますぜ。あれの顔を見たら慥かに貴女も感心するに相違無い。どうです直に一緒に下りて見ませんか？」

と言ふと、仙女も賛成したので、彼等は連立つて忽ち公衆墓地へと降りて來て、ヌウレッヂンの建物の中へと入つた。

「あれを御覽なさい！」と仙人はベドレッヂン、ハツサンの方へ指さしながら言つた。「あなたは從前にあんな美しい顔の人間を見た事が有りますか？ 實に立派なもんでせう。」

仙女は注意深くベドレッヂンの顔を見た後、

「成程、仰しやる通り随分美しい顔ですね。けれども、私は今カイロの都から來たばかりですが、あの土地には此人間よりすつと美しい顔の人が居りますよ。大變不運な人間なんですがね。あなた御聞きになる御氣があるなら話させようか。」

と言ふと、仙人は好奇心を起して、

「これは是非何がひませう。」

と言つたので、仙女は語り始めた。

「埃及國王の大臣に、シエムセツヂン、マホメッドと云ふ人がありましてね、此人の娘が實に才色双絶、天下に比べる者も無いかと思はれる位なんです。すると、此國王が此娘の大した評判を聞き傳へ

たもんですから、或日大臣のシエムセツジンを呼んで、お前の娘を妃にしやうと思ふが承知して呉れるかと尋ねたのです。國王の御聲が、りとあれば、世間の大抵な大臣は二つ返事の大喜びで有り難く承知するのが習ひですが、此大臣は案に相違の顔容で、思召は實に有り難う御座いますが、失禮ながら御辭退致したう御座います。陛下も御承知の通り、私には一人の弟が御座いまして、父の死去つた後は私と二人同じ大臣の役目を勤めさせて頂いてゐたのですが、兄弟の間にホンの少々ばかり感情の衝突が有つたのを氣にして、不意に家出を致したのが既に彼今から二昔も前の話で、其後は何處に何うして月日を送つて居るか更に其消息が知れませんでした、ツイ四五日前に或る筋から聞き及びますれば、先頃死んだブツソアラ王國の總理大臣と云ふのが實は私の弟なんださうでして、大きに驚ろきもし、悲しみもした次第で御座います。で、弟には一人の伴がおりますさうですが、昔弟が家出を致す前に、我兄弟の間に男の子と女の子が、別々に生れたら必ず將來は夫婦にして一族の結合を更に固く親しく致さうと約束した事が御座いますから、弟が死にます際にも必ず此子供同志の結婚問題を氣にかけて、何卒私が約束を實行して呉れ、ば好いがと念じながら息を引取つた事だらうと考へますので、甚だ勝手がましい申分ではありまするが、此問題だけは御許しを願ひたう存じます、と委細の内情を國王に打ち明けたんですね。ところがあなた國王は折角の目的が外れたもんですから、失望するやら忌々しいやら大層立腹致しましてね、國王たる身が言葉を卑うして頼む事を承知しないと云ふのなら此方にも量見がある、余と云ふ者を他の人間に見換へると云ふ法があるか、相當の復讐を致すから左様心得る、余は斷じて汝の娘を余の奴隸中の最も醜い最も賤しい奴に妻はせるから其覺悟で居れと、大變な權幕で、直に大臣には退席を命ずると云ふ怒り方なんです。大臣は既に全く失望して非常に煩悶して其宅へ引取りまし

た。すると、怒りに半分心の狂つた國王は、早速其日の中に、多くの奴隸の中から顔の醜い、加之に駝背で脚の屈つた男を選び出して、これと例の大臣の美しい娘さんと夫婦にするんだ、余の目の前で式を擧げさせるんだと大力みなんです。そこで、此馬鹿々々しい、奇妙な婚禮の準備が總て大至急に調へられましてね、今頃は大抵お婿さんの駝背の奴隸は湯にでも入つて粧装をしてゐるでせうよ、王宮内の奴隸全部は手に松火を持つて、行列の始まるのを待つて居るでせうよ。私がカイロの都から出かける時には、多勢の官女達が花嫁に婚禮の衣裳を着せて、例の駝背のお婿さんを待受ける爲に、これから大廣間へ花嫁を連れて行かうとする所でした。」

仙女が語り終ると、仙人は斯う言つた。

「あなたが何う御考へで何と仰しやらうとも、此若い男より美しい人間が有らうとは信じられませんな。」

「私も、あなたと詰らない議論をするのは止ませう。」と仙女は言つた。「實は私も此若い男をカロイの美人と夫婦にしたら如何に善く似合ふだらうと思つてゐますの。そして若し我々が埃及王の不正な所業を妨げて、此若い男を奴隸の代りに置いたら、實に功德にもなるし、立派な所業だと思ひますが如何でせう？」

「それは結構な事ですとも。私はあなたが、然う云ふ名案を御考へになつた事を實に喜びます。ちやア我々は一肌ぬいで埃及王を助け、不幸な父を喜ばせ、其娘が不運の極に陥てゐると思ふのを今度は反對に幸福の絶頂に居ると思はせませうかな。では、これから直に私は此男が眼を覺さない中にカイロの都へ運んで行きますから、其後はあなた引受けて、萬事宜しく行つて下さい。」

と相談を定めて、仙人は静かに、ペドレッヂン、ハッサンの身體を持ち上げ、殆んど測り知られぬ大速度を以て空中を運びゆき、間もなくカイロに到着して、奴隷が列を正して待つて居る浴場の入口に下した。

ペドレッヂンが弗と目を覺して見ると、見知らぬ町の群集の中に自分の身が置かれてあるので、實に驚いて思はず叫び出さうとすると、仙人は軽く彼の肩を突いて、「何も言ふな」と合圖で知らせて、彼の手松火を一本渡しながら斯う言つた。

「此浴場の前に澤山居る奴隷の仲間に入つて、知らん顔をして彼等と一緒に従つてお行でなさい。すると或る宮殿の大廣間に入ります。其場所所今日婚禮の式が舉行される筈になつて居るんです。お婿さんと云ふのは汚穢しい顔をした駝背の奴だから直に解ります。それから、あなたが其大廣間に入込む時は、必ず行列の右手になつて入る事を忘れちゃ不可んよ。さうして懷中に入れて居る財布の口を開けて音楽師や舞子が傍へ來たら、氣前を見せせて隻手に充滿一握づゝの金をやるんですよ。さうして、大廣間の中へ入つたら、今度は花嫁の侍女になつて居る女どもに同じく一握づゝの金を與るんです。解りましたか、あなたの爲に好事をして上げるんだから決して何者をも恐れずに私が今教へた通りに實行しなければ不可んよ。それから後の事は、或る偉い力を有つて居る者に一任するんです。萬事其人が都合の好いやうに行つて呉れるでせうから。」

これを聽いたペドレッヂンは大いに煙に捲かれた態であつたが、自分の爲には悪い事では無いので、教へられた事を能く覺えてから、浴場の入口の方へと進み行き、先づ一人の奴隷の松火を借りて自分の松火に火を移し、彼等の仲間に入つた。さうして、間もなく浴場から出て來た駝背男が國王の御

料馬に跨がつて得意になつて徐々と行く前に立ち、行列に加はつて歩いて行つた。

婿の前へと目掛けて來た音楽師や、男女の舞子に近づいた時、ペドレッヂンは豫ての手筈の通り懐中から財布を引出し、隻手に一握づゝ取出しては洩れなく彼等に與へたが、其比べ者も無い程に堂々たる品位ある態度は非常に彼等の目を惹き、暫くは皆々恍惚としてペドレッヂンの顔を眺めるのであつた。神ならぬ身の、そんなに近い所へ肉身の甥が來て居やうとは更に知らないシエムセツヂンの邸の門に彼等の一行が到着すると、門の番をしてゐた人達は、亂雑になる事を防ぐ爲に、松火を手にして奴隷一同に對して門内に入る事を禁じたので、ペドレッヂンも、亦同様に食止られて了つた。さうすると、自由に入る事の出来る音楽師達は不承知で、そこへ踏留まつたり、若しペドレッヂンも共に入つて差支ないと云ふ許可を與へて呉れなければ、彼等一同も決して入らぬと斷言して、

「此人は奴隷ぢやないんですよ。顔色を一瞥見たら解りさうなものだ。」

と言ひながらペドレッヂンを保護するやうに眞中に取圍み、門番等のグヅ／＼言ふのには關はずドシドシ踏み、彼の手に持つてゐた松火を取つて、眞先に會した人の手に渡して、大廣間へと進んで行つた。さうして、大廣間へ入るや否や、立派に着飾つて、大臣の娘と並んで腰かけて居る駝背の花婿の右手にペドレッヂンを立たせた。

大臣の娘は天生の麗質に適當な粧を凝らして容顏花を欺くばかりではあつたが、其頭色には當惑と悲歎の心地が充分に現れてゐた。新郎新婦が結婚の式を擧げる時に着くべき席は、一段高い上座に設けられ、夥多しい宮仕の官女、其他朝野の名ある貴婦人達は各自其身分に應じた華麗な禮服を着用して、一段低い所の左右に居流れ、手々に大きな蠟燭を持つてゐた。

此貴婦人連は、今入つて来たベドレッツァン、ハッサンの容貌品位風采態度が美々しくも堂々として且つ閑雅なのを見ると共に、一齊に瞳を彼の顔に注ぎ、更に充分に更に明らかに見たいと云ふので、ぞろぞろと近寄つて来た。さうして、例の駝背男とベドレッツァンとの間に非常な段違ひの有る事を認めるや否や、群衆の中には吐やきの聲が大いに起つて、貴婦人連は高い聲を張り上げて、

「此方こそ丁度似合のお婿さんですわ！」と叫んだ。

花嫁は七度衣更をするのが此國の習慣であつたので大臣の娘も此例に依つて衣裳を着更る度毎に、其新らしい衣更の姿を見せる筈の花婿の前は知らぬ顔で素通りして、態々ベドレッツァンの前まで行つて見せた。ベドレッツァンは豫て仙人に言ひ含められて居るのだから、茲ぞとはかりに財布の中へ手を入れて、金貨を握み出しては一握づつ、花嫁の侍女の者に呉れてやり、又音楽師や舞子の集まつて居る中へバラバラと撒布したから彼等はそれを拾ひ取らうと云ふので、やつさもつさの大騒ぎを演じた。

衣更の式が終ると、音楽は確と止んで演奏者は退ぞいて行き、花嫁は儀式の衣裳を脱ぐ爲に多勢の侍女を従がへて寢室へ引込んで了つたので、後に残つたのは駝背のお婿とベドレッツァンと幾人かの附添の者ばかりとなつた。そこでベドレッツァンは、もう外に仙人から教へられた事も無し、そろ／＼歸る事に爲ようと考へて、其廣間から出て了はうとすると、例の仙人と仙女が現れて、今歸つては不可、もう一度足を返して、是非あの美しい娘の婿にならなければ不可と留めた。さうして、なほ仙女がベドレッツァンを勵まして、色々其後の行動に就いて教へて居る間に、駝背の婿は所在無さの餘り、廣間を出て其次の間へ入つたが、此様子を見てゐた仙人は、忽ち姿を恐ろしい大きな猫に變じて、駝背男の前に現はれ物凄いの聲で鳴き立てた。男は氣味を悪がつて、手を叩いて猫を逐拂はうとしたが、逃げるどころか、今

度は後脚で立上り、眼を火の様に輝やかせて猛々しく彼を睨み、前よりも一層高い聲で鳴いたと思ふと、忽ち猫の姿は變じて驢馬に化けた。奴隸の恐怖は非常なもので、ボカンと口を開いた儘言葉も出せず、正氣を失つた風で黙つて立つて居る中に、驢馬は又もや大きな水牛の姿に化けた。これを一瞥みた奴隸は既う堪へ切れず、唐突身を投げ伏せて顔を蔽ひ、震へ聲を振り絞つた。

「水牛の王様！ 私は何うしたら宜しいんで御座いますか？」

「馬鹿な奴！ 可哀さうな奴だ！」と水牛に化けた仙人は言つた。「さきさまは何うしても私の主人の、あの嬢様と婚禮する氣か？」

「ど、何う致しまして……決して是非婚禮しやうなんて、那麼大それた景見が有るのでは御座いませんから、何卒、平に、平に御勘辨下さいまして、何でも御用を仰しやり附け下さいますやうに御願ひ致します。私が出来ませぬ事ならば何なりと致しますから。」

「宜しい。それでは命令するが、今後夜の明けるまでは一步も此室から出る事はならんし、又一言も口を利いてはならんぞ。此命令に背けば命は奪られると覺悟をしろ。」

と言ひさま、仙人は急に人間の姿に變つて、奴隸を壁際へビタリと壓附け、

「い、か？ 今も言つた通り明朝までは此儘じいとしとるんだぞ。一步でも動けば命が無いぞ。」

と申渡した。

仙女の勸告に従がつて再び大廣間へ戻つたベドレッツァンは、そこから寢室へ案内され、中へ入つて少時待つて居ると、花嫁は寛やかな着物を着て、一人の老女に案内されて来た。老女は室の入口まで来たばかりで、室内の様子は覗き込まずに匆々と戻つて行つて了つた。

美しい花嫁は、例の思はしい駝背男を見る事とばかり思つて来たのに、意外にも先刻大廣間で心を惹かれた美男子が自分を待つてゐたので、大變に驚き且つ喜んだ。ベドレッヂンは品格を保つて言葉をか

けた。「どうして私が、あなたの前に許されるやうな幸運者になつたか、今こそ説明すべき時でせう。國王が今度のやうな悪い企圖をされたのは、矢張り國王自身が貴女を自由にしたいからなんです。斯う云ふ目に遭はせたら必ず降参して来るだらうと豫期へて居られるに相違無いのです。然し、幸ひに、私が貴女の實の良人たるべき運を擔ひました。あの奴隷は今頃もとの奴隷部屋へ歸された筈ですから御安心なさい。」

最初此寢室に入る時には、あんな駝背の奴隷の相手になる位なら寧ろ死んだが優だと悲しんでゐた大臣の娘も、今の言葉を聴くと共に嬉しくて「堪らず、思はず嬌然と笑つた其美しさ妖艶さ、月も花も玉も物かは！ ベドレッヂンも唯だ恍惚と魅せられて了つた。

夜明近くになつて、新郎新婦が未だ熟りと睡つて居る時に、例の仙人は再び仙女と出會つて、何事か諺合せた後、靜かに寢室に忍び入り、襦衣と股引だけになつて熟睡してゐるベドレッヂンを其ま、持上げ、驚くべき速力を以て空中を飛びゆき、シリヤ國の都ダマスカスの入口の門の外に、靜かに下した。丁度其時は諸處の寺院の役僧が曉の鐘を鳴らして、朝の勤行をしると人々に告げてゐる時であつた。

此鐘の音を合圖に、ダマスカスの見附の門は開かれて、多勢の人々が集まつて来たが、皆々門の外に一人の若い男が襦衣と股引だけで居るのを見附けてワイ／＼騒ぎ出した。ベドレッヂンも此騒々しい物音を聞いて、撥と目を覺して見ると、其身は全く見知らぬ町の入口に横になつて居た。周圍には多

勢人ばかりがしてワイ／＼言つて居るから、驚いて立上りさま、群集に向つて尋ねた。

「此處は一體何處です？ あなた方は何を大騒ぎやつてるんですか？」

群集の一人が聲を出した。

「お若い、君はダマスカスの入口に居るんぢやありませんか？ 解らないんですか？」

「ダマスカスの入口ですつて！」とベドレッヂンは叫んだ。あなたは私を調弄ふんでせう。私は昨晚

カイロの都で寝たんですもの。」

すると一人の老人が嘴を容れた。

「これ／＼若い、氣を確かに爲され！ 昨晚カイロに居たと云ふ人が何うして今朝此ダマスカスに

居れませうかい？」

「だつて確かにカイロに居たんですよ。私は昨日晝間はすつとブツツラアに居たんですがね……」

と彼が言ふと同時に、群集は一齊に哄と聲高く笑つて、其中の一人が又言つた。

「もし／＼！ 君は氣が變になつてやしないのかね？ 自分の言葉の意味が解るのかね？ 確かに君

はまだ目が覺めないんだ。さア、寢惚ないで氣を取り直し給へ！」

「私は狂人ぢやありません！ 寢惚でも居ません！」とベドレッヂンも躍起となつた。「私の言ふ事は

總て事實なんです。私は昨晚カイロで結婚したのです。私の妻になつた女は七度衣更をして、其度毎に

私の前へ来て見せました。私は、其女が或る意地の悪い人の爲に、醜い駝背の奴隷と結婚させられる所

を救つてやつたのです……それは然うと、私の服や帽子や財布は何うなつたんでせう？ 昨晚寢る時確

かに枕邊へ置いたんだが……」

とベドレッヂンは繰返し、彼の言葉は相違の無い事實を語つて居るのだと云ふ事を断言した後、市中へと志して歩き出すと、群衆は彼の後からぞろ／＼と踵いてゆき、子供等は遠慮なく「やア、やア、やア、やア、やア、やア、やア」と囁し立てた。物見高いは都の常で、此騒がしさを聞き附けた人々は、或は窓から往來の様子を窺つて見たり、或は態々門口まで出かけて見たり、暢氣屋の閑人は、ぞろ／＼と踵いて行く連中の仲間に入り、子供は事情も知らずに「狂人だアい、狂人だアい」と囁し立てた。

斯う云ふ目に遭つては誰だつて辛抱の出来るものではない、ベドレッヂンは遂に堪りかねて、野次馬連を避ける爲に或る饅頭屋の店に逃げ込んだ。さうして、饅頭屋の主人が驚きながらも、何處の何と云ふ者で何うして此店に逃げ込んだかと尋ねると、ベドレッヂンは一生懸命になつて委しく其の上を語り、其朝ダマスカスの入口に居るので驚いた事から皆々に狂人扱ひされた事まで詳らかに物語つた。

「ふうん！ いや随分不思議な身の上ですなア！」と饅頭屋の主人は言つた。然し、私の忠告を聴納れて、今後は決して誰にも今の身の上話を爲さるな！ さうして、じいつと辛抱して、神様が貴君の不運を終了にしようとお考へになる時節の来るのを待つが一番だ。其時節の来るまで私は喜んで貴君を置いて上げるし、若し貴君が承知すれば、私は伴と云ふ者を一人も持つてゐないから、貴君を私の養子と云ふ事にしても可い。私の伴といふ名義を持つた以上は、市中の何處を勝手に歩き廻つたつて、二度と再び今のやうに嘲弄される心配は有りませんよ。」

ベドレッヂンは、差當りの場合を考へて見るに、饅頭屋の忠告に従つて厄介になるより外に好い工夫は無いので喜んで其言葉に従がふ事にした。そこで、主人は彼に衣服を着せ、證人として懇意な人を頼んで一緒に公證人の役場へ行き、ベドレッヂンを養子にすると云ふ事を證明して貰つた。で、ベドレ

ツヂンは愈々饅頭屋の店に住込む事に定り其名もハッサンとだけ呼ぶ事にして、徐々饅頭の製造法から商賣の道を知り始めたのである。

ダマスカスの方に斯う云ふ事があつた間に、一方カイロに於ては、シエムセツヂンの娘が朝になつて目を覺して見ると、花婿のベドレッヂンの姿が見えない。然しこれは、多分他の睡眠を醒さないやうに静かに忍び起きて外出したのであらう、間もなく歸つて来るだらう位に彼女は考へてゐた。そこへ彼女の父は、娘の不運を悲しんで慰めてやらうと思つて歩いて来た。で、彼は新郎新婦の寢室の前に立止り、娘の名を呼びながら軽く扉を叩くと、娘は聲を聴いて其れと察し、直に床から跳起きて扉を開いて父の手に接吻し、怡々として迎へたので父は非常に驚いた。それも其答、かれは娘が嘘を涙泣然に悲しみに沈んで居る事とばかり豫期つてゐたのだから。

娘は自己の顔に現はれた喜びの色が父親に意外の感を起こさせ、或は其身が彼の醜い黒奴へ比翼連理の睦語をしたとも思はせたのぢやないかと気が附くと直に斯う言つた。

「お父さん！ 誤解を爲さないやうに御願ひしますよ。私はあの厭やな下等な黒奴と結婚したんぢやありませんから。あの黒奴は皆に馬鹿にされて、面目を失はせられて、逃さなければ叶ないやうに爲せられました。さうして皆は或る立派な上品な若い紳士を私の眞の良人にして呉れたのです。」

シエムセツヂンは、餘りの意外に疑念を抱いて、荒々しい聲で、

「お前、何を馬鹿な事を言つてるんだ？」と嗚鳴るやうに言つては見たもの、娘に彼を厭はさうな事を言はせるやうにした若い男と云ふのは一體どんな人間だか、會つて見やうと云ふんで、其寢室から出て探しに行つた。然し彼は其若い男は發

見せずして、次の部屋の壁際に逆立して苦しうに動かずに居る駝背の奴隷に衝突した。奴隷は前の晩仙人に然う言ふ形にされたまゝ、朝まで動かずに居たのである。

「こりや一體どうした事だ？」と主人は呆れて尋ねた。「誰に這麼事を爲れたんだ？」

「太陽が昇らない中は動かない事になつて居りますんです。私は一生懸命に注意致して居ります。私が昨晚此方の御邸へ伺がつてから間もなくでしたが、不意に恐ろしい大きな黒猫が現はれて、私に向つて来ましてね、見る／＼中に驢馬になつたり水牛になつたりするぢや御座いませんか。私は其怪物に厳しく言ひ渡された事を明らかに覚えて居りますんですから、もう暫らく斯うやつて居なければ叶せぬのです。何卒あなたは私には御關心無く行つしやるやうに御願ひ致します。」

と奴隷は言つたが、大臣は氣にもかけずに直に奴隷の身體を掴まへて眞直に立たせた。奴隷は早く元の身になつたのは難有いけれども若しも前夜の怪物に見つけられては大變と恟々者で、一目散に駆け出して王宮に逃げ歸り、早速拜謁を乞うて昨晚以來の冒険譚を物語ると、王は心から可笑がつて腹を抱へて笑つた。

一方、大臣のシエムセツチンは、奴隷の逆立を見たり、其不思議な物語を聞いたので、一層驚いて娘の部屋に歸つて来た。

「お前此不思議な出来事に就て、もう少し何か知つて居る事はないか？」

「否え、先刻申上げたより外には何も存じませんの……ですが此處に、私の良人になつた人が昨晚脱いで置いた服が有りますから、これでも調べて御覽になりましたら、何か解る事が有るかも知れませんわね。」

と言ひつゝ、彼女は先づベドレッツチンの頭巾を取つて父の手に渡したので、父はぐる／＼と反覆して精細に検査して、

「これはブツソアラ風だが……どうも私には大臣の冠る物としか思へないがね。」

と言ひながら、其内部の方の織物と裏地との間に何か縫込んであるのに氣が付き、直に袂を取寄せて其處の糸を切離して見ると、一冊の手帖が出て来た。それはヌウレッツチン、アライが臨終の際、遺言と共に俵の手に渡したもので、紛失をせぬやうにベドレッツチンが縫込んでおいたのである。

シエムセツチンが其手帖を取つて見ると、「我子ベドレッツチン、ハツサンに遺す」と裏書がしてある。どうも熱く見覚えのある筆蹟だ。さう／＼、若い時に家出をした弟の筆蹟に酷似して居るなと思ひかけた時、娘が服の下にあつた袋を取つて渡したので、それも亦開いて見ると、中には金貨が充満入つてゐた。ベドレッツチンは随分氣前を見せて撒布したのであるが、例の仙人仙女が彼等の仙術を利用して、一個も減らない時と同じやうにして置いたのである。其袋の中には金貨の外に何か字を書いた一枚の紙片があるので、大臣が手に取つて見ると、先づ大きく、

「一、金一千圓也 猶太人イサク所有」と書いた下に、

其猶太人の認めたと想像される次の如き文句がある。「該金額全部は、故總理大臣閣下の所有に係る運漕船入港の際、其先登の一隻に積込みある商品の先取權を得んが爲め、荷主の後継者たるベドレッツチン、ハツサン閣下に對して支拂ひたるもの也。」シエムセツチンは之を讀み下すと同時に、烈しい呻吟聲を出して、氣が遠くなつてウーンと言つたきり倒れて了つた。

が、暫くして其娘と侍女どもの介抱に依つて辛と正氣に復つたシエムセツチンは、感情の激した様子

で娘に對つて斯う言つた。

「これ、娘や。お前の婿はお前の従兄なんだぞ。私の睦じかつた弟の件なんだ。此袋の中に在る千圓の金は昔の兄弟喧嘩を思ひ出させる種だ。これは、お前に呉れた持參金に相違無い。さ、さ、神様に祈禱をするのだ。よく御禮を申して祈禱をするのだ。悉く不思議な此度の出来事も全く神の大智大能を示し給ふものだ。」

と再び弟の書いた字を見て、涙ながら幾度も其れに接吻した。

かれは又手帖を手にとつて見た。初めから終りまで委しく眼を通した。それには弟が、初めてブツラアへ到着した日が書いてある。其結婚の事も書いてあるし、子供の産れた事も書いてある。それからその事を一々シエムセツデン自身の結婚の日と、娘を生んだ日などに比べて見ると正しく同一の日なので彼は實に驚いて了つた。

此幸福な事を發見した嬉しさの餘り、かれは其手帖と、袋の中に入つてゐた證書とを手にして王宮へと駆け付け、國王に見せて前後の事情を詳らかに説明すると、國王も此奇妙な出来事の不思議な關係に全く感心して了ひ、過去の事は總て許す事にして、此度の事は必ず宮室の記録に記して後世に傳へよと命じた。

さて、シエムセツデンは其甥が何うして眼前に現はれて來ないか、其理由を知る筈も無いので、今來るか／＼と待ち構へて、來たら一つ緊りと抱き締めてやらうと思つて居る中に、時間はドン／＼経つて行つて、日が暮れて夜が明けた。何か已むを得ない用があつて一晝夜歸らなかつたらうが、今日こそは必ずと心待ちにしてゐる中に又日が暮れた。斯う云ふ風に冗に日を費やす事が三日四日と重なるも

う辛抱が出来なくなつて、彼は多勢の人を八方に出してカイロ市の内外を限なく探索させたが、何處にもドレツチンの姿は見出されなかつた。大臣は非常に當惑した。

「これまでに這麼不思議な事に出會つた事は無い。」

と呟やきながら、頭巾だの財布だの他の品々も皆一つに束ねて、一先づ藏ひ込んで置く事にした。其うちに、すん／＼月日は重なつて、大臣の娘は男の子を一人生んだ。何しろ大切な子だと云ふんで、早速適當な乳母を一人雇入れ、其外に幾人かの男女の奴隷を附添にきめた。祖父さんの大臣は此初孫にアチツブと云ふ名を命じてやつた。

アチツブが七歳の少年になつた時に、大臣は彼を學校へ入れ、始終二人の奴隷に共をさせる事になつた。お互に子供同志の事としてアチツブは、直に外の子供等と共に遊び戯れるやうになつたが、外の子供等は皆アチツブよりは身分が低いし、又學校の教師も、外の子供なら決して容赦は爲ぬやうな過失でも、アチツブが爲た時には素知らぬ顔で打捨て置くといふ風なので、皆々一同彼を敬まひ奉つたものだから、此れが非常にアチツブの害となり、彼は頗る傲慢な少年となつて一同の者を輕蔑した。外の子供等はまた何を言はれても穩和しく辛抱してゐた。稀にアチツブに對して、少しでも反抗の様子を見せる者があれば、彼は聞くに堪へぬやうな亂暴な悪口の百萬陀羅を並べるのみならず、腕力に訴へて他の少年等を打つ事も多かつたのである。

間もなく、總ての生徒はアチツブの傲慢に辛抱が出来なくなり、其事を教師に言附けると、教師は、まア／＼然うでもあらうがアチツブは何しろ大臣の子だから別物にして置かなければならぬ、厭やでもあらうが辛抱して貰いたいと言つたが、教師も、アチツブが益々増長して他を煩らはす事甚しく

なり、實に手が附けられないやうになつたのを見て、遂に生徒を集めて、アヂツプには知れないやうに斯う言つた。

「皆さん。私もアヂツプさんが實に傲慢な生徒であると云ふ事を悟りました。そこで、私は皆さんに、何うしたらアヂツプさんに恥を掻かせる事が出来るかと云ふ方法を教へますから、私の言ふ通りに試て御覽なさい。さうすれば今度からもう皆さんに迷惑をかけないやうになるでせう。」

次の日になつて、生徒が皆學校に集まつた時、彼等は教師に教へられた通りにやつた。先づ皆々ぐるりとアヂツプの周囲を取巻いて、其中の一人が言つた。

「みんなしてこれから面白い事をして遊ばうぢやないか。だけど、自分の名と、お父さんの名と、お母さんの名を言へない者は仲間に入れないんだよ。いゝかへ？」

一同は口を揃へて「あゝ、好いよ」と言つた。アヂツプも賛成の意を表した。

そこで最初口を利いた子が一人々々に對つて右の問題を尋ねると、誰一人自分の名と父母の名とを知らないやうな馬鹿は無いから、一同少しの淀みも無く答へた。

アヂツプは何う答へたかと云ふと、

「僕の名はアヂツプ。母さんは美婦人と呼ばれてるし、父さんはシエムセツチンマホメツドだ。國王陛下の大臣だ！」

とやつつけた。すると他の生徒等は一同に噓し立てるやうに、

「アヂツプさん、何を言つてるんだ？ そりやお父さんの名ぢやなくつて祖父さんの名ぢやないか？」

と言つたのでアヂツプは大いに激した。

「なにツ？ シエムセツチン大臣が僕の父さんぢやないつて云ふのか？」

「さうとも〜！」と皆々大聲で笑つた。大臣は君の祖父さんさ。まア約束だから君は仲間から省かれたらうんだよ。」

と、斯う言つてアヂツプだけは除者にし、皆々互にアヂツプを嘲り笑つて話し合ひながら向ふの方へと行つて了つた。流石傲慢なアヂツプもこれには美事に鼻先をへし折られて、餘りの口惜さに途々泣き出したのである。

すると、近い所に居て、すべて前後の事情を承知した校長が彼の傍へとやつて来て、斯う言つて誠に

「アヂツプさん。あなたはシエムセツチン大臣がお父さんではないと云ふ事を知らないんですか？ 大臣はあなたの祖父さん、即ちあなたのお母さんの美婦人のお父さんなのではありませんか？ 我々も矢張りあなたと同様に、あなたのお父さんの名を知らないのです。……これは却々あなたには面倒な事

でせう。今後あまり生徒達を馬鹿に爲ないやうになさい。」

アヂツプは非常に口惜しく感じたので、大急ぎで學校から駈けて歸宅して、嘔吐しながら母の部屋へと入込んだ。母は非常に驚いて、一體どうしたのかと尋ねたが、さう言はれると一層悲しさが強くなつて、彼は暫らく返答もせず頻りに涙を零した。

「母さん。僕のお父さんは誰だか教へて頂戴。僕は何といふ人の子なんだか……」

此質問に出會すと共に美婦人は、心の中に彼の不思議な結婚の一夜を思ひ出し、其後今まで長の年月

續いた寡婦を考へて、我子と共に涙に沈んだ。そこで母子二人が物も言はずに泣いて居る所へ大臣が入つて来た。彼は此様子を見るより非常に驚いて、理由を尋ねると、美婦人は其日アヂツプが學校で恥を掻かされた顛末を打明けた。で、大臣も亦一緒に泣いて泣かすには居られなかつた。暫く経つてから大臣は参内して國王の前に身を伏せ、甥のベドレッヂンを探す爲に諸國を旅行して来たいから何卒當分の暇を賜はり度いと願つた。

國王も、大臣の様子によつて、其情を察し、其決心の固い事を認めたので、即時に旅行の許可を與へたのみならず、各國の王侯に宛て、もし其領地内にベドレッヂンが逗留して居たら、シエムセツヂン大臣が自由に其甥を連れてカイロの都へ歸る事を許して貰ひ度いと云ふ要求を國王自身の名によつて記した旅行券を與へた。

大臣は、厚く國王を祝福して別れを告げ、其邸に歸つて總ての旅支度を整へ、それから四日の後、娘とアヂツプとを伴れてカイロの都を後に出したのである。

彼等は十九日間旅をして、廿日目に唯ある美しい草原に到着すると、川の岸を撰んで天幕を張つた。そこはシリア國中一二を争ふ愉快な都會で、曾ては首都になつてゐた事もあるダマスカスの入口から左程遠くはない所であつた。

大臣は其處に二日間逗留して三日目には又旅行を續けると云ふ事を一同の者に申渡し、其逗留して居る間に、ダマスカスの都を見物したい者は行つて来て好いと云ふ許可を與へた。で、一行中の者の殆んど總ては我も我もと出かけて行つた。——或者は豫々數々風評に聞いた都を實地に見物しやうと云ふ好奇心から、又或者はカイロから一緒に持つて来た埃及産の品物を賣つて此國の珍器な品を買はうと云

ふ量見から、夫々出かけて行つた。大臣の娘の美婦人も亦其愛兒のアヂツプに是非此有名な都を見物させて満足を得度いと思つたので、常にアヂツプを保護する役のシャバンと云ふ名の黒奴に、若主人を見物に伴れて行けと命じた。

アヂツプは立派な服装をして、太い杖を手にしたシャバンと共に出かけた。彼等がダマスカスの市中に一步踏込むや否や、輝やくばかりに美しいアヂツプの顔は多くの人々の眼を惹いた。彼に近寄つて更つとよく見やうと云ふ考へで家の中から出て来る者もあれば、窓から首を出す者もあり、往來を通行の人々は、足を留めて見るばかりでは足りないで、尙ほ其美しい顔を見物する快樂を長く續ける爲に後から一緒に蹤いて歩いた。斯う云ふ風の騒ぎだから、往來は人だかりが大變で、アヂツプ主従兩人がベドレッヂン、ハツサン店の前へ来た時には、前へも後へも動けないやうにされて了つた。

彼等主従が前に立止つて店の主人——ベドレッヂン、ハツサンを養なつた其主人は數年前に死んだので養なはれたベドレッヂンは、其店と財産を受け継ぎ、益々勉強して商賣を勵んだので、當時ダマスカスでも名代の店になつてゐた。今ベドレッヂンは、店の前に大變な群集がしたのを見て、一體何事が起つたのかと、店の奥から入口へと足を運んだ。

さうして、ベドレッヂンは一瞥アヂツプの顔を見るや否や、何故とも知らず、非常に心を動かされるやうな氣がしたので、彼は仕事を其まゝにして置いて、如何にも人の心を惹附けるやうな調子でアヂツプに話しかけた。

「もし、若旦那、餘り失禮な申分ではありませんが、今あなたの御顔を拜見したら、何だか無暗に嬉しくなつて參りました。どうぞ、汚くるしい店では御座いますが一寸御入りになつて、私の差上る物を一

つ召食つて頂きたいものです。」

と言ひながらハラ／＼と涙を流した。

其涙を見るとアチツプも感動しないわけには行かなかつた。

「此人の好き、うな男が折角親切に言つて呉れるんだから、鳥渡此店の中へ入つて饅頭を一つ食べてやらうよ。」

と言ふと、奴隷は以ての外の色をして答へた。

「堂々たる大臣の若様が、饅頭屋の店へ食べに入るなんて随分妙ですね。私がそんな事を承知すると御考へなされないやうに願ひます。」

するとベドレッヂンは其奴隷に聲をかけた。

「もし／＼御供の方。折角若旦那が私の店へ入つて下さらうと云ふ思召を、お前さんが留めたりなんか爲ちや困りますよ。それよりも御主人と一緒に私の店へ入つて下さいよ。私はね、これでめて、色の眞黒なお前さんを白くする秘密を知つて居るんですからね。」

これを聞くと奴隷のシヤバンは思はず噴飯して、それ以上躊躇はせずに、アチツプが店へ入る事を許し、其身も彼と一緒に入込んだ。

ベドレッヂンは、彼の懇願を容れられたので非常に喜んで、再び其仕事に取懸つた。

「私は今ね、クリイムの饅頭を拵へるんです。まあ何も言はずに食つて御覽なさい、そりや實に堪へられない程美味いんですから、何しろクリイム饅頭製造にかけては肩を比べる者は無いと云ふ大した評判を取つた私の母から直傳の製造法でやるんですからねえ。市内の方々から随分澤山買ひに来ますよ。」

と、好い加減に蒸焼の出来たクリイム饅頭を窯から取出して、其上に栢榴の實と砂糖を振りかけ、先づアチツプの前に差出した。アチツプは一口食べると直に、成程自慢するだけあつて非常に結構なものだと思つた。

其次に出来た饅頭はシヤバンの口へ入つた。成程こりや美味もんだと彼も同意しないわけには行かなかつた。

アチツプ等主従二人の者が饅頭を食べて居る間に、ベドレッヂンは強く心を惹かれる様子でアチツプを見た。さうして、昔埃及の都で酷たらしい別れをした一夜の妻に、もし子供が出来たとしたら丁度此アチツプ位になつてゐるのであらうと考へて、思はず目に涙を浮べた。彼は少しアチツプに尋ねてみたい事があつたのだけれど、奴隷のシヤバンが饅頭を食べて了ふと直に、主人の天幕へ歸るやうに若主人に勧めたので、アチツプはベドレッヂンの好奇心を満足させるだけの餘裕を持たなかつたのである。

シエムセツヂンは豫定の如くダマスカスの附近に三日間滞在の後、エモオス、ハナア、ハレツプなどといふ地方へと進み行き、ユウフラチスの大河を渡り、それからマアダン、ムツスウル、シンチアア、ダイアルベカアなどの町々を通り過ぎて遂にブツソラアへ到着した。

ブツソラアの王は早速シエムセツヂンの乞を容れて謁見を賜ひ、非常に懇篤に待遇して、其旅行の目的を尋ねた。

「陛下！ 私は陛下に奉仕の光榮を荷ひました故人ヌウレッヂン、アライの兄で御座いまして、弟には伴が一人ある筈で御座いますが實は其れが何うして居るか知り度いと云ふのが目的で遙々此處まで参つた次第で御座います。」

とシエムセツデンが答へると、王は肯きながら、

「む、ヌウレッツデンが死んだのは久しい以前の事ぢや。あれの件も父親が死んだ後で二ヶ月ばかり経つと不意に見えなくなつて了つたのでな、余も大きに心配して八方に人を出して捜索させたが皆目行衛不明と云ふ次第で、今日まで影も形も見せぬ。然し其母——と云ふのは余が大臣の一人娘でな、これが未だ壯健で、ヌウレッツデンの舊宅に住んで居る。」

と語つた。そこでシエムセツデンは王に對つて其未亡人を埃及に連れて行く許可を受け、早速娘と孫とを同道して弟の舊宅に行つた。やがて目ざす家に着くと、彼は其家の門に接吻し、次に懐かしい弟の名を金文字で書いてある大理石の標札に接吻してから内方へと進み、淋しい寡婦となつてゐる義理の妹に會たいと、申入れた。さうして、召使の者の口上によつて、主婦は廣い美しい庭の中央にある圓頂閣の小さな建物の内に居ると云ふ事を聞かされて其方へと歩を運んだ。

其小さな圓頂閣の建物は、主婦がもう死んだ者としてゐる件をベドレッツデン、ハツサンが爲に、墓場のつもりで建てたので、彼女は晝も夜も大部分の時を其建物の中で費す習慣になつてゐたのである。遠來の珍客シエムセツデンの一行が入つて行つた時も丁度彼女は悲しい思ひ出に囚はれて烈しい歎きの涙に沈んで頻りに太息を吐いてゐた。

シエムセツデンは初對面の挨拶も勿々に、先づ彼女の氣を慰さめるやうな言葉をかけて、彼が彼女に取つては義理の兄に當る事を打明け、確かに甥のベドレッツデン、ハツサンは生きて居るに相違無いと信する所があつて、彼を捜す爲に此遠いブツソラアまで出かけたのであると話した。寡婦はこれを聞いて非常に喜び、且つシエムセツデンと共に埃及へ行く事を承知して、早速旅の支度をするやうに召使の者

に命じた。其間にシエムセツデンは再びブツソラア國王に謁見を願つて、訣別の挨拶をすると、國王は非常に尊敬の態度を以て彼を待遇し、彼と埃及國王とへ別々に貴重な贈物を澤山に與へた。シエムセツデンは頗る面目を施こして宮殿を退出し、直に一行の者を纏めてもう一度ダマスカスの方へと旅立つたのである。

やがてダマスカスの近所へ着くと云ふと、シエムセツデンは此前と同じやうに天幕を張らせ、適當な休息を取つたり、埃及の國王への土産の品々を買求める爲に、其處に三日間逗留すると申渡した。さうして彼が、ダマスカスの重なる商人連が彼の天幕へと運んで來た美事な織物其他の品々を撰取して居る中に、アヂツブは奴隸のシヤパンに對つて、此前ダマスカスの町を見物した時非常に好く待遇して呉れた饅頭屋が何うして居るか訪ねて見たいから、是非連れて行けと頼んだ。シヤパンもアヂツブの頼みを承知して、アヂツブの母の美婦人に許可を受けた後一しよに出かけた。

彼等兩人は天幕から近い所に在る極樂門と云ふ名の見附口から市中へと入込んだ。間も無く例の饅頭屋の店に近づくとアヂツブは氣輕に聲をかけた。

「今日は！ 覚えて居ますか僕を！」

主人のベドレッツデンは此聲を聞くと共に頭を擡げて小貴公子の顔を見ると同時に、あゝ先日の人だなと認めた。さうして又此前の時と同じやうに、頗る情緒の激動を感じた。

「やアこれは〜！ いつぞやの若様ですな。さア今日も是非烏渡店に御入りになつて、御供の方と御一緒に、例の私の自慢のクリーム饅頭を召上つて下さい。」

と勤めるので、アヂツブ主従は又もや彼の店に入込んだ。

ベッドレッヂンは直に此前に優るとも劣らぬ結構なクリーム饅頭を拵らへて彼等に食べさせ、彼等が食べて了ふと、手を洗ふ爲に水を運び、手拭として雪のやうに白いナブキンを持つて来た。それから又彼は大きな陶器のコップに飲料をいっぱい入れ、それへ少しばかり氷を混ぜてアヂツプの前に出した。

「これはね、薔薇サイダアと云ふんです。若様も這麼に美味しいサイダアを御飲みになつた事は有るまいと思ひます。やはり私の自慢のものなんで御座いますよ。」

アヂツプは大喜びで其れを飲んだ。いゝ加減な頃合を計つてアヂツプの手から其コップを受取つた。ベッドレッヂンは其儘シャバンに渡した。シャバンは美味て〜堪へられないと云ふ風に、一息にグツと飲んで了つた。

やがてアヂツプ主従は饅頭屋の主人の款待を厚く感謝して別れを告げ、シエムセツチンの天幕へと歸つて行つた。アヂツプの祖母さんは（アヂツプがシエムセツチンの娘とヌウレッヂンの倅との間に出来た子である）と云ふ事は、既に互の間に打明けられてあつたのだ。可愛くて〜堪らぬと云ふ風にしてアヂツプを迎へた。行衛不明の倅の事が絶えず胸の中に在るので、アヂツプを抱き締めると云ふと、思ひ出の悲しい涙が彼女の眼から流れるのであつた。彼女はアヂツプを自分の傍に坐らせて、今見物して来た町の様子を色々訊ねた。さうしてアヂツプが、空腹を訴へると、彼女の手製のクリーム饅頭を一つ與へた。ところが其饅頭を一口食べたアヂツプが、氣の無い顔をして既う食べやうとは爲ないので、手製自慢の彼女は呆れたやうな聲を出した。

「まあ此子は……私の拵へたのが氣に入らないのかねえまア！ こんなに美味いクリーム饅頭を拵へるのは、私と、それから私が教へてやつたお前のお父さんと、これ二人つきりで、外の者は到底眞似も出来ないんだよ。」

「おばあさん！」とアヂツプは言つた。「だつて此ダマスカスの町には祖母さんよりも優と上手の饅頭屋が居るんですもの……僕たちは今日其店へ行つて、祖母さんのよりも優と美味のを食べて来たんですよ。」

すると彼女は、孫がそんなに饅頭屋のクリーム饅頭を賞め立てるのは故意に彼女を貶さんが爲めに相違ないと邪推して斯う言つた。

「私はどうしても其饅頭屋の製造した物が私のよりも上等だとは信ずる事が出来ないね。私が自分で味はつて見なければ満足が出来ないから、御苦勞ではあるが、もう一度町へ行つて其饅頭を一つ買つて来ておくれよ。」

そこでシャバンは再び町へ出かけて行き、ベッドレッヂンの店から最も好さうなクリーム饅頭を一つ求めて歸り、ヌウレッヂンの未亡人に渡した。すると彼女は早速それを細かに割つて其一片を口に入れるや否や。

「あらツ！」と彼女は叫んだ。「此饅頭を製つたのは私の倅だよ、可愛いベッドレッヂンに違ひないよ。」シエムセツチンは此言葉を聞くと非常に喜んだが、それでも若しかすると彼女が、話の行きが、り上偽りを言ふのであるかも知れないと考へたので、

「あなたは確かに此廣い世間に、あなたの息子ほど上手にクリーム饅頭を拵らへる者が無いと信じてるんですか？」と念を押すと、彼女は毅然した調子で、

「それは成程此世間には私の倅よりも上手に饅頭を製造する人はありません。ですが私が饅頭を拵らへるには一つ秘傳があるのでしてね、それを知つて居るのは私の外には私の倅ばかりなんですから、此饅頭を拵らへたのは必ず私の倅に相違ありませんですよ。」

「さうですか、宜しい。それではあんた少々辛抱して待つて下さい。早速事實を突留める事にしますから、まあ何よりも其饅頭屋を此處へ連れて来て、そして、あんたや私の娘に見せて、其男が果してあんなの息子であるか何かを鑑定して貰ふんです。然し、あんた方は其饅頭屋に見つかからないやうにして、此方からばかり見るやうに注意して何處かへ隠れてゐなければ不可んぞ。私は我々の互の發見をダマスカスで起つた事にし度くはないので、カイロへ歸る迄それを猶豫したいと思ふんですからね、今互に顔を合せては頗る妙で無い。」

斯う言つて、彼は、女達を其天幕に残し、自分は自分の天幕に歸つて直に召使の奴隷を五十人だけ呼び集めて、斯う申渡した。

「さアみんな各自に棒を一本づつ持つてシヤパンの後に蹤いて行くんだ、するとシヤパンがお前たちをダマスカスの町の中に在る、或る饅頭屋へ連れて行くから、其饅頭屋へ行つたら、店に在る道具は何でも關はず片ツ端から滅茶々に叩き壊すんだぞ。もし其店の主人が、何故そんな亂暴をするかと尋ねたら、シヤパンが饅頭を買つたのはお前の店だらう、あのクリーム饅頭は果してお前が拵らへたのか、と斯う云ふんだ。さうして、饅頭屋の主人が然うだと答へたら直様引捕へて縛つて一緒に私の前へ連れて来るんだ。然し、決して彼を打つたりしないやうに……少しも彼を害せぬやうに注意するんだよ。解つたら、直に出かけてくれ！」

大臣の命令は直ぐに實行された。五十人の一隊はシヤパンに案内されてベドレッヂンの家に行き、一言の斷りも無く片ツ端から手當り次第に皿小鉢鍋の類を叩き壊し、店中をクリームだらけ餡だらけにした。ベドレッヂンの驚きは實に非常で、聞くも哀れな聲を張り上げて、

「もし〜、皆さん、何だつてそんな亂暴をするんです？ 私が何か遺恨を受けるやうな事をしたんですか？」

と詰問すると、

「シヤパンにクリーム饅頭を買つたのはお前さんぢやないのか？」

と彼等は言つた。

「さうです。私ですよ、あの饅頭が何うかしたとでも云ふ人が有るんですか？ 私は誰よりも上等のを製してゐるんですよ。」

さうかうする中に、何しろ繁華な市中で眞晝間此騒ぎと云ふんだから、見物高いは都の常で、黒山のやうに見物の彌次馬が群集して来たが、市の警官が厳しく彼等を制して、ベドレッヂンを選び去るのに都合の好いやうにした。これは鳥渡をかしい事のやうだが、實はシエムセツヂン、マホメッドが此騒動を起す前に市の當局者を訪問して、埃及國王の名の下に彼の策略を實行する許可を得、且つ警官の特派を願つて置いたのであつた。

大臣がダマスカスの當局者を訪問して歸つて来ると、其時すでに拘引されてゐたベドレッヂンは彼の前へ引き出された。

「あゝ御前様！」とベドレッヂンは言つた。「いつ、何處で私が貴方様に御迷惑をかけましたでせうか、

何卒御示しを願ひたいもので御座います。」

「何を言ひをるかッ」と大臣は叫んだ。私の所へ饅頭を賣つたのはお前であつて、お前は其製造人に相違無いと云ふではないか？」

「いかにも仰せの通りで御座ります。然し、それだけの事が又どう云ふ罪に當りますので御座いますか？」

「あんな饅頭を私によこしたと云ふ事は正しく死罪に相當すのぢや！」

「へい……？ あんな饅頭を製造したと云ふ事が、それだけの重い罪になるんで御座いますか？」と呆れ返つて尋ねると、大臣は平然自若として答へた。

「さうとも、お前は其れを受けるより外に致し方も無いのだ。」

かういふ風にして大臣とベドレッツチンとが對面して居る間、別室には婦人達が垂幕の蔭に隠れてベドレッツチンの顔を注意深く眺めた。さうして幾年も久しく見ない顔だけれど、其人に相違無いと云ふ事を認めた。

そこで、シエムセツチンは直に其晩の中に出立と決定して、天幕取拂ひの命令を下し、急いで旅の支度をさせた。かれは又ベドレッツチンを一種の檻のやうな物の中へ閉ぢ籠め、それを駱駝の背中に載せて、愈々一同の者と共に出發した。彼等は其夜一晩と翌日の晝間とを歩き續けて、日の暮れ方に漸やく足を留めた。ベドレッツチンも、元氣を附けるのに必要な物を與へる爲に檻から出されたが、尙ほ其母と妻から遠ざけて監視された。かれは廿日間の旅程を斯う云ふ風にして扱かはれたのである。やがて彼等一行がカイロの都に到着すると、一と先づ都の入口に近い所に露營の用意をした。シエム

セツチンはベドレッツチンを呼び出し、其見て居る前で火刑柱を立てるやうに奴隷に命令を下した。ベドレッツチンは恟りとして、

「火刑柱？ そんなものを立て、何う爲さうと云ふんです？」と尋ねると、

「どうするつて知れた事、お前を縛り附けるのだ。」と大臣は冷淡に答へた。「それから、お前を此カイロの市中を悉く引廻すのだ。胡椒をかけずにクリイム饅頭を拵らへた極悪非道の饅頭屋の顔を全市民に見せてやる爲に。」

「實に、何と云ふ情け無い事でせう？」とベドレッツチンは叫んだ。「僅か一個のクリイム饅頭に胡椒をかけなかつたと云ふ、それだけの事で、獸のやうに檻に入れられ、遂々火刑にまでされるんですか！」夜が可なり更けると云ふと、大臣はベドレッツチンを再び檻の中に入れるやうに人々に命じて、其憐れな囚人に對しては斯う言つた。

「明日まで檻の中へ入るんだ。お前の命も愈々今夜ぎりだぞ！」

檻は早速ダマスカスから曳いて來た駱駝に載せられ、シエムセツチンの邸宅へと運ばれた。邸宅に着いたら檻は其まゝそつくり大廣間に下して、更に命令するまでは決して開かぬやうに申渡された。

奴隷が主人の命令通りに駱駝を曳いて先へ出かけた後、シエムセツチンは其娘や孫や義理の妹など、一緒に自分の邸宅に着いて、直に大勢の奴隷に命じて、廣間の様子を昔ベドレッツチンが埃及の國王に選ばれた駝背男と一緒に居た其當夜と同じやうに飾らせ、其時と同じ品物を置かせた。一段高い所に玉座のやうな物も出來れば、松火も夥多しく點された。其間に新夫婦の寢室とすべき部屋には、昔ベドレッツ

ヂンが残して行つた服に頭巾に手帖に、それから現金一千圓入の財布なども置かせた。さうして、娘の美婦人には先づ其寢室に入込んで、良人が舊の通りになつて現はれて来るまで暫く待ち受けるやうに命じた。斯うして置いて彼は更に二人の奴隷に云ひつけて、靜かにベッドレッヂンを檻の中から持出させ、衣類を剥取つて襦袢と股引だけにして、婚禮の飾附をした廣間の中に獨り残して置かせるやうにした。ベッドレッヂンは非常な悲しみに囚はれてはゐたけれど、何しろ随分疲労れてゐたので、すつかり熟睡して、衣類を剥取られたのは全く知らなかつた。大臣の召使の者は實に電光石火の早業で彼を獨り廣間に残して其檻を持つて姿を隠して了つた。

かれは茫然として廣間の周囲を胸はしたたが、室内の道具や飾附を見るに從がつて、昔一夜の契りを美婦人と結んだ當夜の記憶を徐々に喚起し、愈々其部屋は昔彼が埃及國王の選んだ妙な花婿を見た所に相違ないと氣が附いて愕然として驚いた。そればかりではない。彼は其部屋に續く一室の扉が開いてあつたので、そこに近づいて中を覗き込むと驚ろいた。あの思出のなつかしい當夜かれが脱ぎ捨てた衣類所持品がそつくり其まゝ、眼前に在るではないか！

其時、不意に例の美婦人は其寢床の垂幕を開いて、其頭を前の方に斜めに突出しながら、深く情の籠つた物柔らかな聲で斯う言つた。

「あなた！ 其處の入口で何を爲すつてゐらつしやるの？ あなた随分長く此部屋から出てゐらしたんでせう？ 私が今日を覺して見ると貴方の姿がそばに見えないので随分驚きましたわ！」

これを聞くとベッドレッヂンは顔色を變へて、急いで寢室に入り、彼の服だの頭巾だの千圓入の財布だのを載せてある椅子に近づいて、それらの品々を一々注意深く検査して、驚き顔に叫んだ。

「こりやどうも……實に不思議だ……私には薩張合點が行かない。」
「あなた一體どう爲すつたんですの？ 何か待ちかまへてゐらつしやるの？」

「私はね……あなたのそばを離れてから餘程長くなるんですかね？ 何卒教へて下さい。」
「あらまあ……あなたはツイ今しがた御起きになつたのではないんですか？」

「いや、そりや確かに……私が確かにあなたと一緒に居た事は覚えてゐます。それは事實ですがね。私は又ダマスカスの都で十年間生活した事も確かに記憶して居るのでね。饅頭屋の養子になつて、飛んでも無い馬鹿な目に會つて、獸のやうに檻に入れられて、駱駝の背中へ載せられたのも事實だと思ひます。一體どう云ふ風に考へたら好いのか私に教へて下さい——あなたと結婚したと思ふのは一場の幻に過ぎないのか、又十年も別れて居たと思ふのが夢なのか——」

と彼は餘りの不思議に當惑し切つて、怪訝の心地を繰返してゐる時に、朝日の光が現はれて、大臣シエムセツヂン、マホメツドは其寢室の扉を軽く叩いた。さうして室内に入るや否や、張り切つた愛情を一時に發する勢ひでベッドレッヂンを抱きしめた。

「これ、ベッドレッヂン！ 私がお前を發見してから今までお前を苦しめた事を悉皆許して呉れ！ 私は、先づお前を此處へ連れて歸つた上で、お前に幸福談を聞かせたいと思つたのだよ。悪く思つては呉れるな。」
と、それから大臣は抑々の初めに兄弟の間に約束が成立つた事、それが詰らぬ事から殆んど破談同様

に成つてゐたのだが、偶然にも仙人の干渉によつて、互に知らぬ間に思ふ盡へ嵌つた事、ペドレッヂンの残した頭巾に縫ひ込んであつた書類が弟の字であつたので其れから當りが附いた事、其後どんなに氣を遣つて彼の行衛を捜索したか知れぬと云ふ事などを順を逐うて一々物語つて、
「さあもう充分に氣を安めて呉れ。今経験する快樂を以て、過ぎ去つた總ての悲しみ苦勞を慰さめて呉れ。お前が服を着る中に、私はお前のお母さんの所へ行つて話を爲やう。……ム、お母さんも此處へ連れて來たのだよ。什麼にお前に會ひたがつてゐるかさ！ オ、それからお前たちの間に産れた子供を連れて來てやらう。お前がダマスカスで饅頭を食はせたのが然うだよ。」
と、すつかり打明けた。

ペドレッヂンが其愛する母と子を見た時の喜びばかりは、什麼言葉を持つて來ても形容する事が出来ない。小さなアチツプは、ダマスカスで父とは知らずに會つた時は、父が抱かうとすると厭やな顔をして逃げ出したが、今は反對に自分の方から飛附いて抱かれた。ペドレッヂンは彼の最も深く愛する母と子と兩人の間に立つて、心は二つに身は一つ、彼の愛情の如何ばかり強いかと云ふ充分な證據を彼等兩人の上は無茶苦茶に振りかける事は出来ないと考へた。

シエムセツチンの邸内で斯の如き歡樂が實現されつゝある間に、主人のシエムセツチンは王宮へと参内した。無論、かれの旅行が大成功であつたと云ふ其頭末を逐一國王に物語らんが爲めである。

以上の不思議な話を總理大臣から聞かされた教王ハラウン、アル、ラシツドは、非常に面白がつて、約束通り大臣の奴隷ライアンの一命を助け、はからぬ事から其最愛の妻を失なつた青年には、王宮の奥

に仕ふる美人の一人を選んで彼の妻として與へ、其上に數多の贈り物をしたと云ふ事である。

○船乗シンドバドの話

これは前にも度々話の中に出た教王ハラウン、アル、ラシツドの御代に起つた出来事である。其頃バグダッド府の片ほとりにシンドバドと云ふ名前の荷擔ぎ人足があつた。丁度日本で云へば、立ん坊の少し氣の利いたやうな者なのである。此男が或る日人に雇はれて、非常に重い荷物を擔いで、都の一端から他の一端へと出かけて行つた。折しも夏の事とて、炎熱膚を燻くが如く、流るゝ汗は瀧を

して到底一息みしなければ動けさうも無いので、唯ある大きな館に近い所で腰を下した。かれは其場所に休んで非常に愉快な気分になつた。それも其管、何う云ふ贅澤な人だか知らんが邊に薔薇水でも撒布いたものと見えて、素敵に佳い香りがして來るだけでも澤山なのに、別に又いて居るとみえて殆んど人の魂をとろかすやうな堪らない匂がする。そればかりではない、館の音曲合奏をやつて居るので、それが庭の驚其他の小鳥の聲と絡み合つて實に微妙な音楽となつて

て來た。そればかりではない、美しい御馳走の匂が涼しい風につれて鼻を撲ち、何うにも堪忍ヒンドバドは、何か其館の内々盛大な祝宴でも開かれて居るのだらうと思つた。然し、かれはへは足を運んだ事が無いので、其館には何人が住んで居るか知らなかつた。で、其立派な門つてゐた一人の僕に對つて、館の主人は何と云ふ人かと尋ねると、僕は變てこな顔をして、「何だつて？ お前さんの此バグダッドに住んでる人間ぢやないのかえ？ 普ねく世界を名を轟ろかした船乗のシンドバド様が此處の主人で事を知らないとは驚ろくね。」

と云はれてヒンドバドも合點が行つた。成程船乗のシンドバドと云へば音に響いた有名なね、噂は聞き及んでゐた。

かれは思はず天を仰いで、大きな聲で嘆息した。

「あ、天道様が怨めしいや。この主人と俺との相違はまア何と云ふこつた。鳥渡は考へていゝや。おれは毎日、疲れた足を曳きすり、一生懸命になつて働らいてさへ少しばかりの取れなくて、女房や子供に黒パンだつて充分に食べさせる事は出来ねえのだ、この主人なんや、あゝやつてベンとかシャンとか演らせながら御馳走を食べて、薔薇水の匂なんかブン、ほんとに冗談じゃない、一體全體この主人は何だ、何の因果でこんなに苦しまなきや叶ないんですか？」

と、其時一人の僕が家の中から出て来て、主人が少し話しをしたい事があると言ふから、一緒に入れと言つた。

で、恐るゝヒンドバドが連れ立つて入ると、僕はかれを大廣間に案内した。見れば其室内には立派な人が大勢居て、數へ切れもせず食べ切れもせぬ程夥多しく御馳走を置き列べたテーブルを取巻いて座つてゐた。其上座には鬚髯の白い長い奴を胸にうねらせた人柄の柔和な氣高い老紳士が席を占めて、其後方には多勢の家來どもが控へてゐた。これが即ち主人のシンドバドであつた。

ヒンドバドは此盛んな有様を見、堂々たる風采の人が多勢居るのを見ると、素り卑しい身分のかれは自然に何と無く空怖ろしいやうな氣がして、思はず知らずブルブル慄へながら一座の人々に對して低く頭を下げた。すると、主人のシンドバドはかれを其近くに招き寄せて、右の席に着かせ先づ素敵滅法飛

切と云ふ酒を飲ませた。

言ふまでも無く、シンドバドは今しがた門外でヒンドバドが大きな聲を出して天道是耶非耶と嘔鳴つたのを聞きつけたので、少し思ふ事があつて故らに内へ呼び込み、斯う云ふ待遇をしたのである。

やがて宴會が終ると、主人はヒンドバドに言葉をかけて其名と職業とを聞き、

「お前さんは今しがた私の家の門の外で、何か大きな聲で言つたやうだが、それを此處でお前さんの口から聞き度いと思ふが。」

と言ふと、ヒンドバドは實に恐縮して常感してモジ／＼しながら辛と答へた。

「旦那様、實はソノ……何しろもう馬鹿に疲勞れちやつて少し氣が變になりましたんでね。へい、随分暑氣も烈しうござんすのでね。だもんですからッヒ迂濶あんな事を口に出しちまつたんで御座いますよ。へい、全く本心ぢやアないんですから何卒眞平御免なすつて下さいまし。全く相済みませんで。」

「なアに、そんな事を咎めるんぢやないから氣に懸けないが宜しい。たゞね、お前さんは私が全く苦勞無しに今日の安樂な境遇に居ると誤解して居るやうだから、決してそんな次第ではないと云ふ事を説明しやうと思ふだけなんだ。私の苦勞なんて云ふものは到底人が考へ及ばない程に辛かつたもので、幾年も幾年も長い間、精神的にも肉體的にも實に非常な苦難を受けたものなんだ。どうだ、満堂の諸君」と主人は急に一座の人々一同に聲をかけて、「私の苦勞が如何に甚かつたかと云ふ事を委しく御話したら、慙にかけては何事でもすると云ふやうな人でも、私の爲たやうな事は見合はせる氣になるでせう。丁度今はいゝ時ですから、それでは私の冒險譚を委しく皆さんに申上げる事に致しませう。満更面白味の無い事も有りませんでせう。何しろ随分變つた事に遭遇しましたからな。」

一座の客はこれを聞いて、非常に好奇心を昂め、語れ、聞かんと待ちかまへた。

○シンドバドの最初の航海

船乗シンドバドは次の如くに語つた。私は若い時に父を亡つて巨萬の富を受け継いだが、何分齡は若し分別は附かず血氣には逸る金は有ると云ふので只管放蕩三昧に日を送る中に其財産の半分以上を費やして了つた。然し、幸ひにも世間並の道樂者のやうに「賣家と唐様で書く三代目」のやうな馬鹿な境遇に落ちない中に迷ひの夢が覺めた。さうして最も大切な青春の時代を徒らに費やし去つた事を實に残念に思つたのである。財産など、云ふものは其身の心がけ一つで再びも三度も手に入れる事は出来るけれど、過ぎ去つた月日は何としても回復す方法が無いのである。私は亡つた父が屢々かの千古の大聖人ソロモンの金言を私に聞かせた事を記憶して居る。「名は財に優れり」と云ふのだ。私は實に何かに打たれたやうに悔と氣が附いたのである。幸ひ未だ財産を全部失したわけではないのだから、私は父の踏んだ道を踏まうと云ふ決心をして、數人の商人と相談をきめ、諸共に海外通商貿易をやる事にした。

かくて針路を印度の方へと取りベルシャ山脈を遠く眺めて進んだ。初めの中は私は長い航海は馴れないものだから、船に酔つて随分困難したが、馴れるに従がつて平氣となり、其後はトンと船に苦しみと云ふ事は無くなつた。で、行く／＼彼方此方の島々に立寄り、積んで行つた商品を買つたり交換したりして進んだ。或日の事、我々は或る小さい島に近づいた。此島は世間普通の島とは異なつて殆んど海面と水平に近い位に見えてゐた。船長は水夫に命じて帆を捲かせ、若し島に上りたい人が有るなら上つて

も好いと許しを與へたので、私も上陸者の連中に加はつたのである。

何しろ久しく海の上にはばかり居たので、陸の上が珍しく船から持参した色々の飲食物を取り出して、賑やかに打語り興じて居る其時、不意に其島がふる／＼と震動を始め、非常な勢ひで我々の身體を揺つた。船に残つてゐた人々も此有様を見て大いに驚き、早くボートに乗つて歸つて來い、グツ／＼してゐると皆命を失なつて了ふぞと、大音聲に呼び立てた。今まで小さな島だとはかり思つてゐたのは、實は鯨の一種で海中の大怪物と稱せらるゝものであつたのだ。地震ならば未だしもだが怪物の背中には堪つたものではない。上陸した人々は非常の驚きで、游泳の心得の無い弱い人はボートに乗つて周章狼狽して逃げ出し、他の人々は洶然／＼と海中に飛び込み、我れ勝ちにと逃げ出した。

私は尙ほ遅れてたゞ一人其大怪物の背に残つてゐたが、不意にそれがすう／＼と水の中に沈んで了つたので、危機一髪といふ刹那に、先刻火を焚く爲めに船中から持つて來た板に取りついた。

船では、船長が躍起となつて指揮をしてボートに乗つて歸つた人々を大急ぎに本船に移し、泳いで歸つた人々を二三人救ひ上げた丁度其時追風が俄かに吹き出したので、此機會を逸しては大變と、急に帆を張らせ、海上遙かに船出して了つた。

私はもう到底本船に追附く望みは無くなつて了つたので、波に我身を任せるより外に致し方の無い場合となつた。然し、人間さう云ふ場合となつても必ずしも死ぬとはかりは定つてゐない、天祐と云ふ事もあるから、何かの拍子に助からないものでもないと思ふ方へ泳ぎつかうと試みた。夜、波に揉まれつ、陸ありと思ふ方へ泳ぎつかうと試みた。長い／＼時間を大海原の波に揉まれて悉かり氣力を失なひ、もう到底わが一命を救ふ事は出来ない

絶望して、あはや波の底に沈まうとする一刹那、幸ひにも颯と打寄せた一つの波に揺られて唯ある島に打上げられた。見れば岸は高く岩石こごしく角立ち高く聳えて攀すべき所も無い。これは困つたと思ひながら右に左に少し廻り歩いて見る中に、幸ひにも自分の手の達く所の岩に、木の根が纏はつて居るのを発見したので、そこを屈竟の足場として攀ち登る事が出来た。暫く休んで居る中に太陽は東の空から昇つた。私は何しろ前の日から久しく何も飲み食ひせず、腹が減つて腹が減つて堪らないので、身體は非常に疲れて居るが何か食べずには居れない、何か食べさへしたら氣力も大きに恢復しやう、と斯う考へたので、殆んど匍行するやうな恰好で、何か口に足る野菜か果實の類が無いかと探し廻つた。と、註文通りの食物を発見したのみならず、水晶のやうな水の湧き出て居る泉まで見出したので大變に嬉しがつて十分に腹を満たし、勇氣を出してだん／＼奥の方へと入り込み、遂に美しい野原へ出た。と、其原に幾頭かの馬が草を喰べてゐた。馬は人間と縁の深い動物であるから、私は非常に心うれしく感じ、其方へと近づいて行くと、何處ともなく人の聲が聞こえ、忽ち地の下から湧き出たやうに一人の男が現はれて私に對ひ、何者で何處から来たのかと尋ねた。で、私は簡単に其島に漂着した冒險譚を話すと、彼は右に左一しよに來たら好からうと私の手を取つて一つの洞窟へと連れ込んだ。洞窟に入つて見ると、其中には思ひがけなく數人の人が集まつてゐて、私が彼等を発見して驚いたと同じやうに、私の姿を見てひどく驚いた。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

場所へ王の馬を連れて來て交尾させる事、明日は此處を引上げて都へ歸るところであつたと云ふ事などを説明した。私は、あ、うまい工合に彼等に會つて好かつた。さも無くば折角島に上陸しながら一命覺束ないところだつたと沁々感じた。

一夜を彼等と共に島の洞窟の裡に明かすと、彼等は私を伴つて島の都に立歸り、私を王の前に連れて行つた。すると王は私を見て非常に珍しがつて、私が何者で、何う云ふ風にして此島へ來たかと云ふ事を懇ろに尋ねたから、私は身の上話を委しく語つて、先般來の冒險を逐一物語つた。王は非常に同情して、私の不幸を憐れみ、今後は當分此島に逗留せよ、萬事不自由な目は見せないから、歸國の便船でも立寄るまで緩々骨休めをしたら好からうと言つて慰さめて呉れた。で、それから私は私も暫らく逗留する事に決心して、自分の職業が商人であるところから、屢々同業者を訪問して色々の見學を爲したり、特に其都に來た外國人の身の上を問ひ、バグダッドから何か音信でも聞ける事もあらうかと心がけた。何しろ其島の都と云ふのは海岸に沿うて頗る良い港であるから、世界各國の商船は朝な夕なに出入りするし、遠い／＼バグダッドあたりの商人が立寄らないとも限らぬからである。私は又學者の印度人を數々訪問して其談話を聴く事を喜び、特に王宮には繁々參内して王の御機嫌を伺ひ、わが身に賜はつた惠みを感謝し、王の周囲にある貴族や諸役人と親しく交際して、色々な話を聞いたり聞かせたりした。

こゝに鳥渡面白い話があつたと云ふのは、其島の王の領内に屬するカツセルと云ふ小さな島があつて、何者の所業とも知れず其處から太鼓を叩くやうな音が烈しく聞こえて來るので、水夫等は其島を魔神デアルの棲家に相違無いと云つて恐れて居るとの事を傳へ聞いたので、私は是非話の種に其奇妙な島を見たいと思つて、或日其島に向つて船を出したが、途中で、二百尺から三百尺位までもあらうかと思

はれるほどの大きな魚が幾尾も泳いで居るのを見た。それは、實に恐ろしい悪魔のやうな形の魚で、今にも船の上へ飛び上りさうに見えたから、島へ行くまでに船でも沈んでは大變だと云ふんで、船頭等が不承知を唱へ、已むを得ず探検を中止した。

それから暫く経つて後、ある日港へ出かけて、船の碇泊して居る様子なんかを見て居ると、外國船が一艘入つて来て錨を投じ、荷物の陸揚を始めた。見れば疑も無く私が國を出る時乗つた船である。私は直に船長を認めて其そばへ行き、自分の商品の引渡を頼んだ。

「私はシンドバドです、シンドバドと云ふ名を記してある荷物は皆私のですから、何卒渡して下さい。」

と云ふと、船長は何しろ顔馴染が餘り深くはなかつたので、大きな聲を出して、さも呆れたと云ふ風に、

「あなたは途方も無い事を仰しやる。」と叫んだ。「シンドバドと云ふ人が仲間についた事は有つたけれど、其人は途中で不幸な目に逢つて死んで了つたのだ。それは慥かに私が此眼玉で見たのだし、又私ばかりぢやない、船に乗込んでゐた客は皆實地に見て知つてゐるんだ。それでもあなたはシンドバドだと云ふんですかい？ 幾ら人の荷物が欲しいからつて途方も無い嘘を吐くとは何したこつてごす。い、加減に巫山戯てお置きなさいよ真とに！」

「いや是れには段々仔細が有るんです。さうムキになつて怒らずに、氣を靜めて、まア私の申す事を一應委しく聞いて下さいよ。」

と私は彼を慰諭めて、例の海中の大怪物の背中に乗つて大地震のやうに揺られた以來の冒險を一々詳

らかに物語つて居るところへ、私と馴染の商人等が船中から出て来て、私を一目見るより且つ驚き且つ喜び、無事に生きて居た事を祝してくれたので、船長も初めて私の言葉の偽りでない事を悟り、急に打つて變つて嬉しげに私を抱き締め、

「全く死んだとばかり思つてゐたのに、あなたの一命が助かつたのは慥かに天の助けなんですなア：私は此喜びを到底充分に申す事は出来ません。さ、さ、それでは此處に置いてある荷物は皆あなたのですから、自由に始末を爲すつて下さい。」

と言つた。

で、私は自分の所有品の中から最も價値の有る品を選んで、島の王に献上したところが、王は頗る怪しんで、今まで非常に不幸な身の上と聞いてゐたのに何して那麼に急に珍奇な品物を手に入れたのかと尋ねたから、私は此度入港の船を發見した件を委しく物語つたところが、王は私の爲に非常に喜んで呉れて、快よく私の賜物を受け納め、其返禮として私の献上品以上の莫大な價値のある物を恵んで呉れた。

私は愈々王に別れを告げて、元の船に乗込んだ。さうして、手に入れた蘆荳、白檀、朱檀、樟腦、丁香、胡椒、生姜などの品々を數多積込み、諸々方々の島々に立寄つて尙ほも賣買交易を行なつて遂にブツソアの港に歸り着き、そこから四十五萬圓の價値ある金品を携さへてバグダッドに歸つて來たのである。

こゝまで語り來つてシンドバドは話を切り上げ、音樂師に命じて再び愉快な音曲を合奏させた。やが

て、夜が近づいた時分に、シンドバドは家人に命じて五百圓入の財布を持って来させ、それをシンドバドに渡して斯う言つた。

「これを上げるから今日は一と先づお歸り。そして、明日又おいでなさい。私の冒険譚には、もつともつと面白い事や辛苦艱難した事が有るのだから、明日は又次の語を爲やうから。」

シンドバドは忝けなく贈物を受けて歸宅の途に就いた。途中其日の饗應と五百圓の大金を受けた事を、殆んど夢のやうに考へながら歩いた。

やがて翌日になると、シンドバドは取つて置きの他所行衣裳を着てシンドバドの家に訪ねて行つた。

シンドバドは心から彼を歓迎して懇ろに彼を前の日の大廣間に案内した。間もなく招待された客は續々と集まつて来たので、早速又もや盛大な酒宴が始まり、暫らく歡聲湧くが如くであつたが、主人は丁度程の好い刻限を計つて一同の客に打ち向ひ、

「さて、今日はこれから私の二度目の航海の冒険譚をお話し致しますから、皆さん何卒暫らく耳を御貸しなすつて下さるやうに。」

と言つて、次の話を語り出した。

○シンドバドの第二の航海

私は最初の航海を終つた後は、格別不自由も無い身の上になつたから、長く當バグダッドの都に身を落ちつけて、氣樂に餘生を送らうと思つてゐたが、久しからずして私は爲す事も無く隱居じみた生活の裡に其日々を送る事が厭やになつて、再び海外貿易の壯快な商賣が爲度くなつた。で愈々志を定め

て恰好な商品を多く仕入れ、氣心を知り合つた數人の商人と諸共に、一艘の良い船を雇ひ入れ、神に我等の運命を任せて出帆した。

或日、一つの島に近づいて錨を投じて上陸して見ると、果實の實るやうな樹木は澤山に生えて居たが、人の姿は愚か野獸の姿も見えないので、全く無人島に相違無いと思はれた。稍や奥の方に進むと、美しい小川の流れた野原に出たので、一しよに上陸した連中は、或は花を折るもあり、或は果實を取るもあり、頻りに打ち興じて、私は携さへて行つた酒だの料理だのを取出して、川の岸に生えた二本の大木が丁度枝を交へて良い蔭を拵へて居る所へ草を敷いて坐り、思ふがまゝに飲んだり食つたりしたが、其中に好い氣持になつて頻りに睡氣を催して来たので、私はつひグツスリと熟睡に陥ちて了つた。どれ程長く睡つたのか知らんが、やがて目を覺して見ると、近所に一人も人の姿が見えない。おや／＼と思つて遙かに本船の方を眺めると、さア大變！ いつの間に出帆したか、船の影は消えてたゞ渺茫たる大海に萬里の波濤が連なつて居るばかり。

私の驚きと悲しみと悔恨とが如何に烈しかつたかは諸君の推察に任せるの外は無い。私は餘りの悲しさに其まゝ絶え入らうとした。思はず大きな聲で泣き叫んで胸を打ち髪を掻き捲り、地上に身を投げ出して悶えた。暫く然うやつて絶望の姿のまゝに打ち倒れてゐたが、遂に神の心のまゝに此身を委ねるより仕方が無いと諦らめて、差當り何處を目的にして何うすると云ふ的も無いので、先づ近くに生えてゐた丈の高い木に登つて四方を胸はした。其木は實に高くて、四方を見るには眼を遮断るものは無く、頗る都合が好いのであつた。第一に、未練の残る海上を遙かに見渡したが、見えるものと云へば水と空ばかり、自分の乗つて来た本船などは何處へ行つたか影も形も見えはせぬ。次に眼を轉じて内地の方を

見ると、何とも正體は知れぬが白い物が見えた。で、私は木から下りて、食料品の残りを携さへ、其白い物の方へと目ざして進んで行つた。何しろ大分に距離があるので、容易には其物の正體を判じ難ねたのである。

やがて近づいた時に、私は白い丹頂閣の建物だらうと思つた。非常に高く、随分内部も廣さうに思はれた。で、私はそれに觸つて見たが滑らかな事は到底普通の壁ではない、何處かに入口が有りさうなもんだと思つて、其周圍をグル／＼廻つて歩いたが、其らしい口も無い。又頂上まで登る事の出来るやうな足場も無い。のツべらばうの變な物である。周圍は僅かに人間の足で五十歩位の歩かなければ廻り切れないのだから餘程大きなものである。

時刻は丁度夕方で、夕陽斜めに美しく地上に光を射してゐたが、何うした次第か一天俄かに掻き曇つて、今にも燈火無くては四周の様子も見えなくならうと思はれたから、私は驚いて空を見上げると、更に驚くべし、大きな／＼素敵に大きな一羽の鳥が私の方へと飛んで來るので、此鳥が左右に廣げた凄まじい大きな翼が日光を蔽うて地上を暗くしたのだと知れた。私は前に水夫からロツクと云ふ不思議な大きな鳥の話聞いた事があるが、是れが即ちロツクと云ふ鳥に相違無いと思つた。して見れば自分が白い丹頂閣だと誤解した此のツべらばうの圓い物はロツクの卵に相違ないのである。

あんな奴にバサリと一と打ちされては、命が十あつても堪らんと、私は直にビタリと身を卵に擦り寄せると、ロツクは見る／＼中に舞ひ下つて卵の上に坐つた。は、アこれは卵を解す氣だなと私は思つた。丁度私の鼻先に鳥の足が一本下りたが、其岩丈に太い事は宛がら大木の幹のやうだ。其足を見ると忽ち私の胸の中には名案が浮んだ、と云ふのは、鳥の足に私の身體を縛り附けたなら、今度鳥が何處か

へ飛び去る時に、自分も一しよに吊下がつて此無人島を離れる事が出来やう、こんなに大きな鳥だから、私のやうな男が一人位ぶら下つても更に氣にしないだらうと考へたのである。随分命がけの藝當ではあるが、一とつ思ひ切つて實行しなければ何時此島を出られるか見當が附かない。まア何でも思ひ附いた通りに爲るに限ると、早速頭巾を解いて自分の身體をロツクの足に緊かりと結へ附けた。

其夜一夜は其まゝに過ぎて、翌朝日の出の頃になると、私の推量通りロツクは其大きな翼を伸ばし、殆んど旋風を巻き起さんばかりの勢ひで大空高く舞ひ上つたので、私は下界を見る事が出来なくなつた。暫くすると鳥は一轉して下に向ひ、矢よりも早く飛んだので私は殆んど正氣を失なつて了つた。然し、間もなく鳥は活動を中止したやうに見えたので、徐つと目を開いて見ると、ちやんと地面の上を下りてゐるのだ。私は喜んで大急ぎで頭巾を解いた。今考へて見ると實に危ない所であつた。私が自分の身を自由にすると殆んど同時に、ロツクは恐ろしい大蛇を其嘴に啣へて空高く舞ひ上つた。私がもう少しグ／＼と手間取つて居れば、今度は何處へ連れて行かれるか解らないのであつた。

とは云ふもの、今私が身を置いた場所も、決して安心の出來さうな所では無いらしい。私の居る所は山と山との峽間に當り、仰ぎ見れば四方には雲の上までも聳ゆる高い山々が連なつて、到底攀ち登る見込は無く、従がつて此谷を逃れ出る見込も無さうだ。あ、折角無人島を出て來て、やれ／＼と思ふ間もなく今度は又途方も無い谷間に落ちるとは、何たる情無い事だらうと、頻りに悲觀しながら其邊を歩き廻つてゐると、小砂利の中にキラ／＼と光る物が有る。手に取つて見ると撥方無きダイヤモンドで、中にはこれまで私が見た事も無いやうな大きな物もある。私は暫らく其ダイヤモンドを手に弄んで、偶と向ふを見ると、忽ち恐ろしい光景が目につつて、折角ダイヤモンドを發見した愉快も興味も忽

と云ふのは是れだなど気が附いた。其話によると、商人等は、大鷲が雛を育てる時を待つてゐて、一度よい時機に「ダイヤモンドの谷」の上に来て、大きな肉片を谷間に落とす。さうすると谷間には至る所ダイヤモンドが散亂して居るので、其落ちて来た肉に幾つもの刺さる。鷲は目敏く肉を見つけると、これは御馳走さまとはかりダイヤモンドの刺さつた儘に掴み取り、山の上の巢に歸つて之を雛鳥に與らうとする所を、商人等は一同大きな聲で叫んで鷲を逐ふ。不意の事として鷲は驚ろいて飛んで逃げる。そこで商人は何の手間ひまも無く肉に刺さつたダイヤモンドを只取りすると云ふのである。

今上から落ちて自分の眼を覺した肉片は、てつきり其れに相違無いと思ふと、私の胸には一つの希望が浮んで来た。

私は大急ぎに出来るだけ多く大きなダイヤモンドを拾ひ集めて、食料品を入れて来た革の袋にそれを詰込み、肉の最も大きな一片に自身を縛りつけ、ダイヤモンドを入れた革袋は緊りと帯に結び附けて、地上に身を伏せ、鷲の来るのを今か〜と待つてゐた。すると間もなくバサ〜と烈しい羽音がして數羽の鷲が舞ひ下りて、其連中の最も大きな力の有りさうな奴が私の身に縛りつけた肉片を掴んで、山の上の巢に歸り、私を下した。と、其時大勢の商人は一齊に物陰から駆け出して、わつと大聲を張り上げて脅かしたので、鷲は驚いて遠く飛んで行つて了つた。すると一人の商人は私の置かれた巢に近づいて来たが、私の姿を見ると、少時は呆氣に取られて茫然たる態であつた。さうして、漸やく氣が落ちつくと共に、私が何う云ふ人間で何處から来たかと云ふ事を尋ねもせず、突如口を尖らして喧嘩を吹つかけた。

「おい〜、冗談ぢやアないせ。人が折角手に入れたダイヤモンドを盗み取るとは太い量見た。さア何

diamond

ち突然として無くなつて了つた。それは一體何かと云へば、無数の大蛇が蠢々して居るのを發見したからである。其中には殆んど象のやうな大きな獸をも一呑に爲さうな恐ろしい大きな奴がゐた。彼等は例のロックと云ふ鳥を何よりも恐ろしい敵としてゐるので、晝はロックを避ける爲に穴の中に蟄伏んでゐて、夜になると其處ら中歩き廻るのである。

私は其日終日其谷間を彼方此方へ歩き廻つた。さうかうする中に日が暮れたので、唯ある洞穴を一つ發見したので、例の大蛇どもの襲撃を避ける爲に其中へ入込み、幸ひ入口が低くて狭いから、そこへは大きな石を一つ轉がして塞いだ。石は丁度都合の好い大きさで、辛うじて外の光線が穴の中へ射込む位のものであつた。

淋しい悲しい恐ろしい心地で悶々として思ひ煩らふ中に一夜は明けて、洞穴の外をのたうち廻つてゐた大蛇も何處かへ姿を隠して了つたので、私はふる〜慄へながら穴から出て、ダイヤモンドの散亂して居る道の上を歩いた。然し、少しも氣の緩むと云ふ事が無いので、更にダイヤモンドを拾つて見やうなんて云ふ量見は起らなかつた。

それから、先づ朝飯を食はうと思つて、路傍に腰を下し、食べ残りの物を食べて、幾らか元氣らしいものが出るやうになると、何しろ前の晩は終夜まんじりともしなかつたので、直に睡氣を催はして、自分では迂闊睡られぬと氣を付けてゐた積りであつたが、いつか知らぬ間にぐつすりとして睡込んで了つた。

と思ふ間も無く、何だか大きな音がして私のそばに落ちた物があるので、胸と驚ろいて目を覺して見ると、大きな獸の肉の片で、なほ此處彼處に幾つもの落ちてゐた。それを見ると同時に私は曾て水夫等に聞いた話を思ひ出した。「ダイヤモンドの谷」と云ふのがあつて、商人等が計略を用ひてダイヤモンドを取

う云ふ考でそんな不届な事をするんだ？」
と詰問した。私は忙でず騒がす騒やかに彼に答へた。

「そんな亂暴な事を仰しやらん方がいゝ。あなたが更つと委しく私の身の上を知つたら、恐らくそんな荒々しい事は仰しやらんでせう。心配なさるなよ。私はダイヤモンドを澤山持つてゐます。あなたの仲間の人たちの分を皆集めたよりも澤山持つて居るのですから、それを貴君と分けなければいゝでせう。」
と言つて居るところへ他の商人等も駆けつけて私を取巻き、私を見て驚ろいた様子であつたが、更に私が簡單に此度の冒險を話すと、彼等一同舌を捲いて驚ろいたのである。

商人等が天幕を張つて假の宿として居る所へ行つてから、私は革の袋を開いてダイヤモンドを彼等に見せた。彼等は其すばらしく美事なのに驚ろいて、今まで各國を渡り歩いて方々の王宮にも出入しただれど、未だこんな大きなのは見た事が無いと言つた。

商人等は各自鷲の巢を一つ宛其領分として居ると聞いたので、私は直に、私の身體が運ばれた巢を受持つた商人に對つて、革の袋の中のダイヤモンドを欲しいと思ふだけ取つて呉れと言ふと、彼は其中の最も小さいのを一個だけ取つた。私が、もつと取れと勸めると、彼は頭を振つて、

「いや、私はこれだけで充分ですよ。こんなダイヤモンドを一つ持つて居れば、もう決して二度と再び危ふい航海なんかは爲さないで、氣樂に生活する事が出来ます。」

と答へた。私は其晩彼等と共に其天幕の中に宿る事に定めて、未だ私の冒險譚を聞かなかつた人の好奇心を満足させる爲に、再び我が身の上を物語つた。

商人等は既に數日の間、毎日々々肉片を谷間に投じて、それ／＼相當のダイヤモンドを手に入れてゐ

たのであるから、翌朝は愈々歸りの旅立をする事にきめた。我々は近くに在る山又山を幾つも越えた。前にも言つた通り、其近邊は大蛇の本場とも言ふべき所で、危険此上も無かつたが、我々一同互に注意の上にも注意を加へて、辛うじて彼等の攻撃を免れる事が出来た。やがて旅路の日を重ねて、唯ある港に行き着くと、そこから直に最初の便船に乗込んで、ロオア島と云ふ所に寄つた。此島には名物の樟の大木が夥多しく繁茂してゐて、其最も大きなものになると、さうツと枝を張つた蔭に樂々と百人の人間を容れる事が出来るのである。此島には又犀と云ふ獸が澤山棲んでゐた。此犀と云ふ奴は、象よりは少々小さいが豹なぞよりは優かに大きく、其鼻の上に不思議な角が一本生えて居る、長さは約二尺ばかりで、中程が稍や彎曲つて非常に頑丈なものである。聞く所によれば、犀が象と戦かふ時は、其角を象の腹に貫いて、自分の頭の上へ象の全身を持上るさうだが、下手をやつて象の血だの脂だのが兩眼に入る

と忽ち眼は見えなくなつて地上に倒れる。そこへ彼のロツクと云ふ恐ろしい大きな鳥が飛んで来て、喧嘩の相手を兩方とも擱んで持つて行くのださうな。いや、實に恐ろしい話と云ふべきだ。私は此島に於て、自分所有のダイヤモンドを二つ三つ取出して珍奇な品々と交換し、なほ諸々方々の島々に寄つたり、大陸の港々に立寄つて遂にプツソアの港へと歸り着き、やがて此バグダッドへと歸つて來たのである。歸宅すると直に私は貧窮な人民に多くの施し物をして、私が殆んど類の無い程の苦勞をして辛うじて得た多くの財産を以て、頗る裕福に暮らしてゐたのである。

こゝでシンドバッドは第二の航海の話を終つた。さうして、又もやシンドバッドに五百圓の金を與へ、明日も亦第三の航海を話すから是非來てくれと告げて別れた。

○シンドバドの第三の航海

間も無く私は又もや平穩無事な氣樂な生活に飽きて來た。さうして又もや海外貿易の面白さを思ひ出しては、矢も盾も堪らず、前と同じやうに數人の商人と組になり、國內の品々を多く船に積んで、第三回の航海に出かけたのである。

ところが、或日凄まじい大暴風に襲はれて、それから數日間、荒れ狂ふ大海の上に行衛も知らず漂うたが、遂に船は唯ある島の港へ流れ着いた。船長は大層此島に船を寄せる事を嫌つたけれど、何しろ海上の荒れ方と云ふものが一通りではないので、已むを得ず錨を投じて、帆を巻いた。それから船長の説明する所を聞けば、其島及び其附近の島々に住んで居る人間は、身體一面獸のやうに毛の生えた野蠻人で、悉く一種の一寸法師ではあり、従がつて腕力も我々よりは弱いけれども、何しろ幾萬と云ふ夥多しい人數だからして、若し我々が誤まつて彼等の一人を殺さうものなら、残りの者は全部我々を攻撃して、遂に我々を塵殺にして丁ふと云ふのである。だから、彼等が如何な事を仕向けて來ても、決して抵抗しては不可いと云ふのだ。

我々は間も無く船長の言つた事が事實であることを認めた。身丈僅か二尺ばかりの全身に赤い長い毛が總々と生えた、猛惡な顔をした野蠻人が幾千人とも數知れず、海を泳いで本船へと近づいて來る。彼等は我々が船を着けた島とは違ふ島からやつて來たのである。

やア、來たな、これは大變！と見て居る中に、彼等は殆んど輕業師を凌ぐばかり巧みに身を扱して舷側を登り、船中に飛び込み、何だか意味の解らぬ奇聲を發して、勝手に帆を下し、錨綱を切断し船を

Handwritten mark: 2. Ma

濱邊に引いて行つて、手眞似を使つて我等一同の者を悉く上陸させ、船は彼等の出て來た島の方へと持つて行つて了つた。亂暴とも狼藉とも云ひやうの無い始末である。我々は腹が立つて、何の我々の半分にも足らぬ赤つちやけた一寸法師め、片つ端から蹴飛ばして呉れやうと思つたが、船長が一生懸命に止めて、後でひどい目に會ふから是非辛抱しろ／＼と言ふので、燃ゆるばかりの胸を擦つて、彼等の勝手な仕事を見てゐる辛さ。今思ひ出して無念で堪らぬ。

肝腎要めの船を持つて行かれては、外に仕方無いので、我々は島の奥へと進んで行つた。遙か行く手に當つて幾棟かの家が見えたから、先づそれを目的にして漸々近づいて見ると、一構の大宮殿で、驚かると、ばかりに高い建築は結構壯麗を極めて、門は立派な黒檀で作つてある。何はともあれ其宮殿の内へ入つて見やうと云ふので、我々は門を開いて宮内に一步入ると、入口は一つの大廣間で、其室内には、一方に人間の骨を堆く積み上げ、他の一方は、太い鐵の燒串を澤山置いてある。どう見ても人間の照焼でも拵へて食ふ怪物の棲家に相違無い。我々は此怖ろしい様子を見ておろ／＼慄へた。

其時、不意に荒々しく大廣間の扉を開いて現はれ出た者がある。見ると、大きな椰子の樹ほどに丈の高い一個の大怪物で、色あくまでも黒く、眼は唯だ一個あるばかりで、額の眞中に爛々たる光を放つて居る。前齒は皆長く尖つて口の外にニューウと突き出て居り、口は殆んど耳のあたり迄裂けて馬の口よりも大きく深い。上唇は長い胸の邊まで薄氣味わるく垂れ下り、耳は象のそれに酷似て肩に被さり、手の指の爪はと云へば、大きな肉食鳥の爪と同じやうに長く伸びて鉤になつて居るのだ。此恐ろしい惡魔の姿を見るや否や、我々一同忽ち氣が遠くなつて、死人の如くに倒れて了つた。

つて私の方へと歩み寄り、突如手を伸ばして私の頸筋を掴み上げ、恐ろしい掌の上にころい、と廻して仔細に検査したが、私は殆んど骨と皮ばかりと云つても可い程に瘦せて居るので、こんな奴を焼いてもゴミツはいばかりで一向うまくもないと考へたか、私を其ま、下に置いて仲間の者を悉く代り番こに一人づつ、取上げて一々検査した。其結果、不運な船長が一番肥えて脂肪氣の多い事を儲かめるや否や、丁度我々が小鳥焼でもするやうに、隻手で船長を掴み、隻手で彼の鐵の串を取るより早くタワイも無く、ぶすりと刺し通して、それから熾んに火を焚し、じゆうと云ふ氣味のわるい音をさせて丸焼にして、さも美味さうにムシヤリ〜と食べた。我々は無論、死んだ者のやうになつてゐた。悪魔は船長の全身をすつかり食べて了ふと、前のやうに入口に退ぞいて其場にごろりと横になり、百雷の一時に轟ろくやうな駭聲を出して熟睡した。

彼は朝まで其ま、睡り通した。我々に至つては到底醒るどころの騒ぎではない。さうかと云つて、逃げ度いにも入口の方に怪物が居るのだし、終夜ビク〜したりヒヤ〜したりして一夜を明かした。夜が明けると、悪魔はムクリと起き上つたから、そりやこそ大變、今度は誰か食はれる番かと心配したが幸ひにも彼は直に立つて、何處かへ出て行つた。

翌晩、我々は謀し合はせて彼の悪魔に復讐する事にきめた。夜になつて、例の怪物が宮殿に歸つて、一人の水夫を丸焼にして食べた後、忽ち大廣間の入口に倒れて例の如く大駭を始める、我々仲間の中で最も勇氣のある男九人と、それに私と、都合十人のものは各自手に手に鐵の串を取つて眞赤に焼き、合圖の號令と共に一鼻に力任せに悪魔の眼に突込んだ。悪魔いかに猛々しと雖も十本の焼串を大切な目に貫込まれては堪つたものではない。怪ろしい叫び聲を張り上げると共に、はね起きて兩手を廣げ振廻して了つた。

我々は直ちに物騒な宮殿を後にして海岸へ出た。幸ひ、其近邊に夥多しい材木があつたので、早速それを利用して、一つに三人づつ、乗れる位の筏を澤山造つた。さうして、我々は日の出の刻限まで其筏に乗る事を見合せて。と云ふものは、若し例の悪魔が日の出頃になつても海岸に現はれず、又、今なほ聞こえて居る恐ろしい叫び聲が止んだならば、必ず彼は死んだ者と見て間違はない。さうすれば我々は尙ほ暫らく其島に留まつて、便船の立寄るのを待たうと考へたからである。然し、朝日が辛と顔を出さうとする頃になると、執念深い悪魔は二人の仲間と一しよに海岸に現はれた。其二人の仲間と云ふのは大きさと云ひ怖ろしさと云ひ殆んど盲目の悪魔に等しい奴であつた。そればかりではない、其後からなほ多勢ぞろ〜やつて来る様子である。

それ、悪魔が来た、早く逃げろ、筏に乗れと云ふんで、我々は全速力で筏を漕ぎ出し、悪魔どもが波打際に来た時には、随分岸を離れたが、彼等は大きい忌々しがつて手々に大きな石を振上げ、ざぶ〜と水の中に入つて胸のあたりの深さの處まで来て、我々の筏を狙ひ打ちにした。かう云ふ人間並外れた奴の亂暴にかゝつては全く何うする事も出来ず、私と他の二人とが一しよに乗つてゐた筏を除くの外は總て打ち沈められ、人員は悉く溺れて了つた。我々は幸ひに沈められなかつたので、三人力を合せて一生懸命死物狂ひに漕いで〜漕ぎぬけたので、辛うじて悪魔の石の届かぬ所へ逃げる事が出来た。然し、沖合遙かに出たところで、どちらの方角へ志して行けばいゝのだから薩張見當が附かないので、徒ら

に波と風との弄ぶに任せるより外に致し方も無い。我々は其日終日と其晩も終夜、頗る不安な淋しい悲しい心地で漫々渺々たる大海の上に揺られ通したが、天未だ我々を捨てなかつたか、翌朝になつて又或る島の上に打ち上げられた。其島には美事な果實が枝もたわゝに實つてゐた。我々はそれを食ふやうにして食べて、漸やく元氣づく事が出来たのである。

かれこれする中に其日も暮れたので、我々は海岸近い所に打ち臥して、一晝夜波に揉まれて悉かり疲勞れてゐたので、其ま、前後も知らず熟睡して了つたが、やゝ暫くすると、怪しい物音が騒がしく聞こえたから、驚いて目を覺して音のした方を見ると、大變々々、殆んど數百年を経た大木を横にしたかと思はれる程の大蛇が鱗の音を物凄く鳴らして直ぐ近くへ來たのであつた。さうして、忽ち我々の仲間の一人を目がけて、彼が聲高く叫んで逃げ惑ふにも關はらず直ぐに嚙下んで了ひ、其大木のやうな太い胴體を幾度も地面に打つつけた。我々は、仲間の者の身體の碎ける音を聞いた。骨の折れる音を聞いた。我々は随分遠方へ逃げてゐただけれど、其怖ろしい音が明瞭と聞こえたのである。

次の日、再び其大蛇の襲撃を受けた時に、私は思はず叫んだ。

「あ、天道様も無い事か！ どうして這麼危険な目にはばかり會はされるのだらう？」

命から／＼辛との思ひで大蛇の追及を免がれて、大分遠くへ來た時に、我々は非常に丈の高い木を一本発見したので、其夜は其木の上で一夜を明かさうと決心した。さうして、果實を取つて充分に腹を拵らへてから、其木に登つた。ところが、何處まで執念深く付き纏ふ積りか、大蛇は又もやシユウ／＼と云ふ音をさせて疾風のやうに追ひかけて來て、見る／＼中にする／＼と木に登り、あなやと云ふ間に私の仲間をグツと一嚇にして、何處とも無く行つて了つた。

私は其高い木の上で、今にも大蛇に食はれるか／＼とビク／＼しながら一夜を明かして、日が出ると下りて來た。然し、太蛇に食ひ殺されるだらうと云ふ懸念は、木に登つてゐても下りてゐても同じ事なので、恐ろしさは話にもならぬ。そんなにビク／＼して苦しがつて生き存へるよりは寧ろ首でも縊るか、海へ身を投げて一思ひに自殺しやうかとも思つたが、それも餘り意氣地が無いやうに考へられるので、運は天に任せて、何事も神の心の儘に爲やうと覺悟を定めた。

そこで、出来るだけは太蛇を防ぐだけの要害を爲やうと云ふので、其近邊から木の枯枝だの荆棘などの類を澤山拾ひ集めて、多くの束に拵へ、自分の登つてゐた木の幹の周圍に圍ひ、頭の上の見當になつて居る枝にも幾らか縛り付け、やがて夜の近づいて來るのを見ると其一種の鐵條網の中へ身を潜めて恐る恐る縮こまつてゐると、果して大蛇は例の如くに現はれて、直に私を食はうとしたが、思ひも寄らぬ障害物が出來てゐるので、私に飛び付き度いと思つても飛び附く事が出来ない。それで、大蛇は丁度うまい隠れ場所を見つけた鼠を猫が狙ふやうに、無益に夜の明けるまで靜と木の下で狙つてゐたが、徐々東が白み初めると、ロックと云ふ大鳥が恐いもんだから、直に何處とも無く退散して行つた。でも私は、太陽が登るまでは其隠れ家から動く事が出来なかつた。

考へて見れば、晩まで此處に斯うやつて居れば、又身動きも自由に出來ないやうな思ひをして大蛇の危難を避けなければならぬし、さればと云つて、此處を離れて何處へ行かうと云ふ目的も無い。又何處へ行けたにしたらと云つて、いつ何時大蛇の襲撃を受けるか解らない。かう考へて來ると、益々生きているのが馬鹿らしくなつて來る。先程は死ぬなんて愚な事だと思つたが、斯う進退谷まつて見れば、矢張り自殺でもした方が優である。と又少し氣が變になりかけた私は、愈々海へ身を投げやうと決心して海岸

の方へと足を運んだ。其時、何心なく沖の方を見ると、左程遠くない所に、一艘の船の行くのが眼に留つたから、これを天の助けと、私は咽喉も裂けんばかりの大声を張り上げて助けを呼び、頭に巻き付けた頭巾の布を解つて腕一ぱいに振廻した。船中の乗組は幸ひにも私を見つけた。さうして、船長は直に一艘のボートを私の方へと漕ぎ出させた。

やがて、私が無事に本船に移されるや否や、何うして私がそんな無人島に居たか、身の上話を委しく聞き度いと云ふので、水夫や乗客の商人等が、大勢私を取り巻いた。そこで私が従来遭遇した冒険譚を委しく物語ると、皆々いづれも驚嘆の眼を瞪つたが、中にも一人の老人は、例の人を食ふ大怪物の棲む孤島の事に就てはこれまで度々傳へ聞いたとの事で、よくまあ那麽危難を免がれる事が出来たものだと非常に喜んで呉れて、それから私を船長の前へ連れて行つた。船長は、私の服がポロ／＼になつて居るのを見て非常に氣の毒がり、自分の服を一襲出して私に呉れた。私は厚く禮を述べて其船長の顔を熱々見れば、慥かに此前第二回目の航海の時に、私が島へ上陸して熟睡してゐた間に私ひとりを残して出帆を命じた船長に相違無い。船長は私に氣が附かぬらしいから、此方から切出した。

「船長！ 私をよく御覽なさい。あなたが過般島の上に獨り置き去りにしたシンドバドと云ふ男があつたでせう。」

船長は驚いた顔をして、私の顔をためつすがめつして見た後、果して私を認めた。

「や、これは！ 成る程あなただ！」と大喜びで私を抱いて、「これで辛と私は自分の過失を償ふ事が出来ます。あなたの荷物は私が始終注意に注意を加へて保存して置きましたから、恐ろしくしてゐます。御随意になすつて下さい。」

私の喜びは比へん方も無い。深く禮を述べてそれを受け取つたのである。それから我々は暫く諸島の島に立寄り、遂にサラバド島と云ふのに上陸した。此島では薬品用の丁子、肉桂と云ふやうな物を澤山仕入れた。此島から船出した時に、我々は堅横共に二十尺以上もあらうと云ふ大きな海龜を見たし、又其形殆んど靴牛をつくりでミルクまでも出すと云ふ不思議な海獸を見た。此動物の皮は殊の外厚くて堅固なので、其邊の土人等は其皮で楯を作ると云ふ事を聞いた。

間も無く、長い航海の後我々はブツソアの港に着し、そこからバグダッドへ無事に歸つて来たのである。持ち歸つた財貨はどれ程あるか、自分でも鳥渡勘定しきれぬ程夥多しいものであつた事は疑ひも無い。私は又、貧民たちに多くの施しを行なひ、自分の地所家屋なども餘程前よりは廣く構へた。

シンドバドの第三回の航海の話は、これで終つた。彼は又もやシンドバドに五百圓を與へて、次の日の宴會にも来るやうに招待したのである。

○シンドバドの第四の航海

第三回目の航海から歸つて間も無く、私は又海外貿易の巨利を得る事と、異なつた國々の珍奇な物を見る事を実行したくなつた。で又々一家の事は萬事差支の無いやうに整理して、貿易品とすべき國産を多く仕入れ、今度は例のやうにブツソアの港から出帆せず、道をベルシャの方に取つて、各州を通り過ぎ、とかくして一つの港に出たので、其處から船に乗つた。ところが大海に乗出すや否や不運にも暴風に襲はれ、船員も船客も一同力を合はせてそれを防ぐ方法を講じたけれど、恐ろしく強い天災の力に

對しては何うする事も出来ず、すべての努力は無効になり、帆はズタ／＼に裂け扯れ、船は礁に突き當

てられたので、船員乗客の大部分は溺れ死し、荷物は皆影も形も見えなくなつた。

然し、幸ひにも私は幾人かの商人や水夫と共に、手近の板子に取りつき、潮の流れのままに、一つの島に漂着した。上陸して見ると、果物もあれば清水もある。おかげで命は助かつた次第である。

濱邊に一夜を明かした其翌朝、とも角もと島の奥の方へと進んで行くと、四五軒の人家が見えたので、先づ其家を訪問しやうと決心して漸次近づいて行くと、不意に多勢の黒人がドヤ／＼と現はれて突如我

我を引捕へ我々の仲間を夫々の組に分配して彼等の棲家へと引立て、行つた。いつもながら能くも斯う災難にばかり出會す事だと、私は自分ながら呆れ返つた。

私は五人の仲間と共に、一つ所へ運ばれた。どうするかと見て居ると、黒人どもは手眞似で我等を坐

らせ、我々の見た事も無い一種の美味さうな野菜を煮たのを持出して、矢張り手眞似で其れを食べろと

言つた。私の仲間の者は何しろ非常に餓えてゐたので、其野菜を黒人どもが少しも食べないと云ふ事には全く注意をせずに、大喜びでムシャ／＼やつたが、私は何だか少し訝しいぞと睨んだから、一口も食

べなかつた。後になつて見ると、食べなかつたのが幸ひであつた。私の仲間の者は忽ち精神に異状を呈して來た。彼等は私に何事か話しかけるけれども、彼等自身何事を話したのか甚だ不得要領のやうに見えた。

我々の仲間が野菜を食べて了ふと、黒人は次に椰子の實の油で炊げた米の飯を食はせた。仲間の者はもう頭も口も馬鹿になつてゐるのだから、それを喜んで幾らでも食ひ食ふのであつた。然し、私は此時

も用心をして、たゞ餓死をせぬ用心位の程度にホンの少しばかり食へたのである。考へて見れば、黒人

どもが先に與へた野菜は即ち人の精神を狂はせる毒草で、あとで椰子の油の御飯を食へさせたのは我

我を肥やす爲めに相違ない。申すまでも無く彼等黒人は一種の人食人種で、先づ毒草を以て神経を麻痺

させて、仲間の者が其恐ろしい悲しむべき運命が近づいて居ると云ふ事を悟らぬやうにし、次に米の飯

を食はせて充分に肥えさせ脂肪づかせてからアングリと賞玩しやうと云ふ寸法なのである。

さて、斯う云ふ風にしてドシ／＼椰子の油の米の飯を食はせられたので、幾日も経たぬ中に我々仲間

の者は見違へる程に肥り、片端から黒人どもの恐ろしい口に食はり食はれた。然し、私は用心して、た

だ餓死をしない位に少しづつ、食へてゐたので、更に肥る様子は無く、且つ私の仲間の者が黒人等に食は

れる有様を實見して、烈しく悲しみ恐れた爲に、却つて日に増し瘦せて衰へて悉かり病人のやうにな

つたので、自分の身體の心地は頗る不快になつたが、これが寧ろ幸ひの種となり、黒人等は私を食ふ事

を延ばしたのである。さうして私の行動に就ては別にやかましい監視人も置かなかつたので、私は自由

に近邊へ散歩に出かけたりなどして、密かに逃げ出す機会を狙つてゐた。ある日丁度此方の好都合に

黒人等が皆遠方へ出かけて、老人がたゞ一人留守居をしてゐた時に、私はいつもの如くに散歩するやう

な風をしてすん／＼遠方へ足を早めると、老人は私の量見を悟つたと見えて、精一ぱい大きな聲を張り

上げ、手を盛んに振廻して呼び立てたが、私は、多くの黒人等が夜にならねば歸つて來ない事を知つて

つても、追ひ附く心配は無いから大丈夫だと思つたのだ。

私は日の暮れるまで走つて、鳥渡一とやすみして、かねて用意して來た辨當を食へ、幾らか元氣を附

けて又直ぐに道を急いで、それから七日間、椰子の實を食へて道中を續けた。

八日目に至つて、海岸に近い所へ行きかけたところが、五六人の白人が、其邊に澤山ある胡椒を拾つて居る様子なので、私は實に魅へつたやうな心地で、少しの躊躇も無く彼等に近づいた。

彼等も私の姿を認めて、不思議さうな顔をして此方へ近寄り、なつかしいアラビア語で、私が何者で、何處から何う云ふ風にして来たかと云ふ事を尋ねた。私はアラビア語を聞いて、殆んど雀躍せんばかりに打ち喜び、難船してから人食の野蠻人の手に捕へられた顛末を事詳らかに説き明かした。

それから私は彼等が胡椒を集め終るのを待つて一しよに船に乗せられ、彼等の本國に連れゆかれて、やがて國王の前に出された。國王は非常に徳の高い同情の深い人であつたから、私の身の上話を聞いて殊の外氣の毒に思ひ、且つ不思議な黒人の話などを驚嘆して、取敢ず一襲の服を私に呉れた。さうして、當分其地に滞在して、方々見物がたら悠くりと静養したら好からうと、情深い言葉をかけて呉れた。

其土地は非常に繁華で、産物は頗る多く、都は好い港口を前に控へて貿易が盛んであつた。私は國王の厚い待遇を受け、前に辛苦艱難した後、かういふ親切な情に出會つたので、こんなに愉快な所は外に有るまいと思つた程である。

私が此島に滞在して居る間に、最も妙に思つた事は、國王はじめ總ての國人が馬に騎るのに鞍も用ひねば拍車も用ひぬ事であつた。で、私は或日職人の所へ行つて鞍の雛形を書いて説明し、先づそれを一つ作らせて、それから私自身で天鵞絨だの革だのを以て其蔽布を拵へ、金で縁を取つて立派に仕上をした。それから次には金物屋へ行つて、こゝでも矢張り雛形を示して、轡と拍車とを作らせ、それが皆出來ると、私はそれを持つて宮中に參内し、國王に献上した。國王は珍らしがつて、早速厩舎から一頭の駿馬を曳き出させ、私に命じて、それらの馬具を適當に付けさせた後、直ぐに馬に跨がつて宮中の庭

園を彼方此方と乗り廻し、氣に入つたと云ふので非常の上機嫌で、數多の褒美を私に與へた。私は頻繁に宮中に入出して國王の機嫌を伺ひ、王の特別の寵愛を受けてゐたが、或日王は私に對つて斯う言つた。

「シンドバド、不思議な縁でお前が此國に来てから私は非常にお前を愛するやうになつた。ところで私はお前に一つ頼みがある。と云ふのは何も大して難かしい事ではない。實は私はお前に或る美人を嫁入らせやうと思ふのだ。さうしたら、お前も人情で以て、一生此國で暮らす氣になり、決して故郷へ歸り度いなど、は思はぬやうにならうと考へたのだ。お前をいつまでも私のそばに置かうとするには、先づこれが一番上策のやうだ。」

私はそれを聞いて無論國王の厚意を無にしやうとは思はぬので、何れとも王の思召さる、儘に従ひますと答へた。王は非常の喜びで、早速宮中でも一二を争ふと云ふ、身分柄の好い、頗る附の美人の而かもウンと財産を有つて居る女を私の妻として選んだ。實に牡丹餅で頬べたを叩いて御汁粉の温泉に入れるやうな有り難い仰せである。

やがて結婚式を擧げてから、私は其美人を伴つて、市中に一軒の美しい家を構へ、暫らくは仲睦じく暮らしてゐた。然し、私は決して一生其土地で暮らすと云ふ量見ではないので、好い機會さへあれば、早くそこを逃れて故郷のバグダッドへ歸らうと思つてゐたのである。故郷忘れ難しと云ふのは全く眞理だ。海外遠く出て見ると、殊に染々故郷がなつかしくなるものだ。

其頃の事であつたが、私の近所の人で日頃互に親しく交際してゐた男の女房が病氣に罹つて、醫者よ薬よと一家擧つて心配した効も無く遂に死んで了つたので、私は悔み旁々彼を慰めやうと思つて訪問す

ると、彼は悲しみに堪へず、殆んど身を悶えて居る様子であつた。最愛の妻に死別したのだから其れも尤もだと思つて、

「まあ、そんなに御歎きなされるな。何事も天命ですからね、奥さんの壽命はあれつきりなんでせうから何と悔んでも追附きません。それよりもあなたの身體を大切になさらなければ不可。神様は必ずあなたを長壽させて下さるでせうから。」

と云ふと、彼は益々烈しく悲しんで、
「どうして、あなたが幾ら神様に祈つて下さつても駄目なんです。私の命も今日限りとなりました。あなたは他國から御越しになつたので御存知は無いでせうが、私は今日、妻の死骸と一緒に埋められて了ふのですよ。これは此國の法律で、決して破る事が出来ませんのです。夫婦の關係ある者は、夫が死ねば妻も埋められ、妻が死ねば夫も埋められると云ふ事に固く定まつて居るのです。」

と、なほ委しく此國の此不思議な亂暴な法律を説明して居る折柄、かれの親戚、友人、近隣の人々が多勢葬式の手傳ひにやつて来て、先づ死んだ妻君の死骸に一等立派な晴着を着せ、生前珍重してゐた寶玉類を悉く飾り立て、まるで嫁入支度のやうにした。さうして蓋の無い棺の中に入れ、先登第一には其良人を立たせ、棺を其次にして行列を練出した。

やがて或る高い山の頂上に達すると云ふと、かねて其棺を埋める事に定めて置いた場所へ棺を下し、大きな石を取除けると云ふと、其下は深い穴になつてゐた。棺は直に其穴の中へと落された。すると、例の良人は、もう仕方が無い、これも運命と諦らめたか、親戚友人一同に抱き附いて最後の別れを述べた後、少しも躊躇する様も無く、別の棺の中に入込んだ。すると、野邊送りの人々は其棺の中へ、一瓶

の水と、七片の小さなパンとを入れて、前の棺と同じやうに落してやつた。葬式はこれで終つたわけで、穴は元の通りに大きな石で蓋をされて了つた。

いかに國の法律とは云ひながら、實に慘酷な事を爲したもんだ、と呆れ返つたり、かの近隣の友人の爲に悲しんだり、私は妙な感じを抱いて自分の家へ歸つたが、其後數週日を出ない中に、私が其恐ろしい法律を適用される主人公となつた。私の驚きは實に諸君の想像以上であつた。……私の妻は、かりそめの病氣が原因で、いくら醫藥の手を盡しても其効無く、遂に死んで了つたのである。さア大變な事になつた。

私は外國人でもあるしするから何卒此人道を無視した法律を適用して下さると、平素の寵愛を頼りにして百方國王に泣き附いたけれど、王も一旦決定して國人一般にそれを守つて居る國法を破る事は出来ないと云ふので、今度ばかりは私の願を聞き入れては呉れない。然し、葬式は特別扱かひとあつて、國王はじめ、宮中の官吏一同、及び市中の名有る人々は悉く行列に加はつたから、其盛大な事は實に稀だと稱せられた。さう云ふ風に名譽な葬式をして私の悲しみを和めやうと云ふのだが、到底どんな盛大な儀式をして貰つたつて、罪も無いのに生理にされる悲しみが減りさうな筈は無い。

愈々おさまりの一瓶の水と七片の小さなパンとを入れて貰ひ、棺の中に入つて既に死んだ氣になつて居ると、幾秒ほどかふわりと氣味のわるい雲の上に乗つたやうな心地がしたかと思ふと、忽ちドンと大きな音がして、棺がぐらぐらと揺れてから確と止まつた。穴の底に達したのだなと私は考へた。棺は頗る堅固に出来てゐるので、少しも破れず、又私の身體に負傷も無かつた。
ふと見ると、上から微かな光が射し込むので、其光りを頼りに、棺の中から脱け出して周囲を詢はす

と、僅かに地面の下の洞穴の底である。殆んど何處まで廣がつてゐるか解らない位の大きな穴で、深さは地上から彼は三百尺もあらうと思はれた。あたり近所には多くの屍骸が散亂して、實に目も當てられぬ惨状を呈して居る。

二三日の間は、例の僅かばかりのパンと水で餓を凌いでゐたが、それも悉く盡き果て、愈々餓死するより外に仕方が無いと覺悟を定めた時、忽ち何物か苦しげに息喘き切つて私のそばを歩いて行くやうな氣配がしたから、私は強ひて氣力を振作して、其方へと進んで行くと、其正體の知れぬ物は、どうやら私から逃げるやうな風で、益々息せはしく苦しがりながら走つて行くので、私も亦意地になつて大分長い時間追ひかけて行く中に、遂に私は星のやうな一點の光を認めた。はて妙だわいと思ひながら、今度は其光を目的にして行くと、光は時々見えなくなるけれども、また直に現はれる。だん／＼近づく儘に見れば、それは岩の穴から射し込む外の光線であつたのだ。其岩の穴は幸ひにも私の身體が通れる位の大ききであつた。通つて外へ出て見ると其處は海岸であつた。其時の嬉しさは言葉に盡し難い。私はいきなり身を地上に投げ伏せて神の恵みの深きを感謝せずには居られなかつた。

暫くすると、一艘の船が私の居る方へと近寄つて來た。私は直に頭巾を取つて高く振り廻し、聲の有らん限り助けを呼んだ。船の人は私を認めてボートを卸した。我々はそれから諸方の島に立寄り、茶の名産地として世に響いたセレンヂブ島にも寄り、それから十日を経てベルス島を見舞ひ、更に順風に乗る事六日にしてケラ島に上陸した。ケラ島の王は甚だ富んで強大な勢力を有つてゐる人であつた。二日一ぱい歩くだけの土地の廣さあるベルス島も此王の領内だと云ふ事だ。住民は非常に野蠻で、なほ人の肉を食ふさうだから決して油断は

出來ないのである。然し、我々は充分に用心して、思ふ通りに商賣を終つてから此島を無事に離れる事が出來た。さうして、なほ他の島々に船を寄せた後、本國の港に着き、首尾よくバグダッドへ歸つた。思へば此度の航海に、神の冥助を受けた事は幾度であつたらう。それを思ふにつけても私は何かして感謝の意を表しなければならぬと考へたので、堂宇修繕の爲に多くの淨財を寄進したり、例によつて大いに貧民を賑はした。私は又、別に友人一同を集めて盛んなる祝宴を開いた。

話が終ると、シンドバドは例によつて五百圓をヒンドバドに與へ、又次の日も話をするから、いつもと同じ時刻に來て呉れと招待した。

○シンドバドの第五の航海

私は又例の如く、氣樂な生活には直ぐに倦きて、第五回目の航海をする事になつた。今度は乗客となつて他人の船の厄介になるやうな事はせず、自から多大の費用を抛うつて自分専用の船を買込み、商品は澤山仕入れ、或る良い港へ行つて出立の準備をした。ところが何しろ自分の商品だけでは船脚が軽く仕方が無いので、なほ幾人かの商人を其商品と共に載せてやつた。

さうして順風の吹き次第に帆を上げて此港を出かけ、可なり長く航海した後、最初に船を寄せたのは一つの無人島であつた。此島には私が曾て白い圓頂閣の建築と間違へたやうな大きなロツク島の卵があつたが、丁度解らうとする時であつたので、錨の嘴が少しばかり卵の殻の外に突き出てゐた。私と一しよに此島に上陸した商人は、それを見ると珍らしがつて、迂闊觸ると大變だから決して惡戯

は爲るなと私が忠告したけれども、彼等は、強い好奇心に驅られて私の言ふ事などには耳をも傾けず、斧を揮つて卵の殻を打破り、中から雛を引出して、小さい片に切り、焼肉にしてムシャ／＼美味さうに食べ始めた。其時、遙か／＼彼方の空に當つて、二團の雲が見えたが、我々の船長はその雲を一瞥見ると忽ち其正體を悟つて大いに驚き、一對のロツク鳥が現はれたから、何はさておき大急ぎで船に歸れと嗷鳴り立てた。

はじめは雲のやうに見えてゐたロツク鳥は瞬く間に物凄く羽音をさせて近づいた。其物音は、彼等の卵が破られ、雛の姿の見えないのを知ると共に一層烈しくなり、直ぐに元來の方へと引返して行つた。其様子は誰が眼にも復讐の下心で引返したとしか見えないので、彼等が再び現れない中に早く此島を離れなければ大變だと、總ての帆を充分に張らせ、矢の如くに船を走らせた。

然し幾ら船が早いと言つてもロツク鳥の怪速力にかゝつては到底敵ふものではない。ロツクは忽ち凄まじい羽音をさせて近づいて來た。見れば雄も雌も其猛惡な爪の間に大きな岩を掴んでゐる。さア大變だ。愈々あれを落して復讐するつもりだなと、思ふ中に、一羽の奴は岩を落した。然し、幸ひにも舵取が巧みに船をもじつたので、危ふく難を免れる事が出來た。先づ好かつたと、一同喜びの顔を見合はせる間も無く、又一羽の奴の落した岩は誤またずに船體の真中に落ちた。岩が如何に大きとも、近い所から落したのなら大した損害は無いのであるが、何しろ數百尺の高さから落したのだから堪つたものではない。船は忽ちバラ／＼に破壊され、乗客も船員も岩に打ち殺されぬ者は悉く水に溺らされて了つた。私も一度は水の中に落ちたが、忽ち浮び上つた時幸ひにも一枚の板に取付き、必死となつて泳いだ。丁度風向も潮の流れも自分の爲には好都合であつて、私は遂に一つの島に流れ着き、先づ其處へ上陸した。

で、草の上に身を投げ出して暫く疲労を安めた後、内地の方へと足を進め、進むに従がつて附近の様子を見ると、まるで立派な庭の中に居るやうで、諸所に林があり、水晶のやうな美しい水の流れもあり、枝もたわ／＼に果實の實つた木もあり、天鵝絨を敷いたやうな緑の芝生もある。なほも奥の方へと進んで行くと、又一筋の小川があつて、其岸に一人の老人が坐つてゐた。見れば非常に老衰して如何にも弱々しく見えたので、私は何とか慰さめてゞもやる事にしやうと思つて近づきさま、

「今日は」

と聲をかけて丁寧挨拶したが、老人はホンの少しばかり頭を下げて挨拶に答へた。何故そんな處に獨りで居るのかと尋ねたが、老人は依然として一言をも發せず、たゞ手眞似で、背に負うて川を渡して呉れと云ふ意味を示した。私は深い仔細を知らぬが、誰か此老人を此處へ連れて來て打捨つて行つたのに相違無い、實に氣の毒な事だと思つたから、自分が疲れて居るにも關はらず老人を背負うて、やつこらさと川を越し、彼に下りるやうに命じた。さうして、下りやすいやうと思つて腰を低くして蹲居んだ。(其時の事を思ひ出すと、いつも腹立たしいやうな可笑しいやうな氣がするのだが)かれは背から下りるところか、其時まで全く弱々しい老人だとばかり思つてゐたんだのに、意外にも驚くべき敏捷を以て私の頸に其兩脚を捲き付け、肩の上に跨がるが早いか、力一ぱい私の頸を締めた。

私は殆んど、かれが私を絞殺する目的を持つてゐるのではないかと疑がつた。と同時に、餘り強く締められて人事不省に陥つたのである。やがて暫くしてから正氣に復つて見ると、怪しい老人は、其隻脚を私の肩の上から腋の下へ引かけて

力任せにグイ／＼締附け、もう一方の脚を以て厭やと云ふ程烈しく私を蹴つて、何うしても私が立上らなければならぬやうに仕向けた。さうして、果實の實つて居る木の方へと私を歩かせて、そこに立留つたら振落して酷い目に合はせてやらうと思つたけれど、何分にも其老人の脚の力と云ふものが非常に強いので何うする事も出来ない。其中に果實を充分に食べた止めるだらうとも思つたが、老人はどんな胃囊を持つて居るのか、幾ら食べても飽きる様子が無い。とう／＼終日彼方此方と私を歩かせた。夜になつて悉皆疲れた私が倒れるやうに寝ると、老人も私の寝る事だけは許したが、矢張り其手を私の頸にかけて、私の身體にビタリと附着いて横になり、決して油断はしない。そして、朝になると、没義道に私を起して、前の日のやうに肩車に乗り、人を畜生扱かひにして頻りに足で蹴り／＼果實の木の下へ歩かせる。これが毎日の仕事のやうになつた。私は残念やら口惜いやらで、何とかして老人を叩き殺して呉れやうと心かけたが、何しろ力業では到底敵はないんだから仕方が無い。たゞ泣きの涙でかれの命する通りに牛馬の如くに使はれてゐた。

ところが、或日私は例の如く老人を肩車に乗せて方々歩き廻つて居る中にカラバツシと云ふ椰子の實に似た大きな果實の殻が樹から落ちてゐるのを發見したので、それを利用して一つ酒を醸造してやらうと思ひ立つた。それで其果實の中の最も大きな奴を拾ひ取つて、其内部をきれいにし、其中に葡萄の汁を絞り入れて、或る場所にそれを藏ひ込み、其後數日経つてから、そこへ行つた序でに味はつて見たら、思ひの外に上出来で頗る美味い酒になつてゐた。そこで心ゆくまで充分に飲み、だん／＼元氣づくに伴れて浮れ出して、遂に老人と云ふ重荷を背負ひながら、歌を唱ひ出すやら踊るやら、暫くは憂を忘れて

素敵な元氣になつた。すると老人は私の愉快さうな様子を見て羨やましくなつたのか、一口飲まして見ると手眞似で示したから、私は容器ごと彼の手に渡すと、彼は先づ一口ぐりと飲つて見たが、大いに其味が氣に入つたと見えて、見る／＼中に皆飲み盡して了つた。酒は随分多量に拵らへてあつたのだから彼は忽ち酔拂つて、變な聲を出して何だか譯の解らぬ歌を謡ひ、自然私の頸部のまはりに纏附けた脚の力も漸次弛んで來たので、私は非常に嬉しく思つて、隙を狙つて老人を肩の上から力任せに投げ出した。老人はまるで死んだ者のやうにグタリとなつて、呼吸も通ふとは見えなかつたが、私は念の爲に更に大きな石を取上げて、彼を叩き殺して了つた。

斯う云ふ風にして私は厄介至極の老人を殺して厄介拂ひをしたので大いに元氣附き、海岸へ行つて見ると、丁度其時一艘の船が錨を下して、水夫等が飲料水を汲む爲に此島に上陸したところであつたから、私の嬉しさは噓ふるに物も無く、急いで彼等の方へと走り寄ると、彼等は私の姿を見て大變に驚き、此處は無人島であるのに、何うして私が此島へ來たのであるか、又私は何人であるかと尋ねたから、私は此島に流れ着いた顛末から、奇妙な老人を打殺すに至つた次第を物語ると、彼等は愈々呆れた氣色で、

「それぢや、あなたは此附近に棲むと云ふ有名な老人の海坊主に捕まへられたのですよ。でも、うまく其怪物の手を免れましたな。彼奴に捕まへられた者は従前に幾人あつたか數へ切れない位多いのですが、一度彼奴に捕まつたが最後、命を取られると相場が定つて居るんですよ。其奴を殺したのは慥かに大手柄です。あなた一人の爲ばかりぢやない、全く人助けでさア。」
と賞め立て、私を本船に連れ歸り船長に紹介した。船長は私を親切に待遇した。

我々は直に島を離れて、順風に帆を上げて走り、数日にして或る大都の港に到着した。
私は其船中で一人の商人と懇意になつたが、彼は私を伴れて上陸して、私に大きな袋を與へ、其土地
の人で椰子の實取りを商賣にしてゐる者に私の事を依頼し、私に對つて斯う言つた。
「此人達と一しよに行つて、みんなの爲る通りにやつて御覽なさい。決して此人たちと離れちや不可
んよ、命を失すやうな目に遭ひますから。」

そこで、商人の言葉に従がひ、彼等に伴はれて或る椰子樹林へ行つた。見れば、どの木も皆頗る高
くて幹は又非常に滑つこいのであるから、如何に木登りの巧者な者と雖も登つて其實を取るなどは思ひ
も寄らぬ事だ。

我々が其林に入つた時、大小幾多の猿が集まつて遊んでゐたが、我々の姿を見るや否や皆々申合はせ
たやうに驚くべき速力を以て木の頂上に逃げ上つた。すると商人等は有り合ふ小石を拾つては猿を目が
けて投げ附けるので、私も亦彼等の通りに石を投げた。猿は顔を眞赤にして、きやツきやと言つて怒つ
たが、木の頂上に石などが有らう筈は無いので、彼等は何れも椰子の實を扯つては我々目かけて雨の如
くに投げたから、商人等はソレ思ふ盡に嵌つたと云ふので大急ぎで椰子の實を拾ひ集めた。私も其通り
にして、遂に自分の大きな袋を一ぱいに膨らせた。

かう云ふ風にして集めた夥多しい椰子の實を船に積込んで出帆し、胡椒や蘆薈を多く産する島に向け
て進んだ。さうして目ざした島を二つばかり相手にして椰子の實を其島の名産と交換したり、別に又商
人等と組んで潜水夫を雇つて眞珠を取らせたりした。運の好い時には何でも都合よく行くもので、珍ら
しく大きな純粹の眞珠が幾つも私の所有になつた。

先の船は既に出帆した後なので、私は別の便船を待受けてそれに乗し、無事に故郷に歸つたのである。
私は例に依つて、持つて歸つた品物に對して莫大の利益を得たので、其十分の一を貧民に施し、暫
らく旅の疲れを休める事に決定した。

斯く語り終つたシンドバドは例の如くヒンドバドに五百圓を與へ、他の客と共に次の日も來會して、
第六回目の冒險譚を聴くやうに招待した。

○シンドバドの第六の航海

諸君は、私が五回も難船に遭ひ、數限りも無い大危難に出會ひ、大抵の人ならばもう海外貿易などは
思ひ止るか普通であるのに、又もや六回目の航海を爲やうと思ひ立つたと云ふに至つては、殆んど呆
れ返つて了ふであらう。諸君が呆れるばかりではない、斯く申す私自身すらも何うしてまアあんな無鐵
砲な考を起したものと驚いて居る位である。

第五回の航海を終つてから一年ばかり経つと云ふと、私は又々第六回目の航海を思ひ立つたのであ
る。さうして親戚親友の者共が熱心に諫めるのも耳にかけず、今度はブツラアから直に船に乗込む事
はせず、ペルシャ、印度の内地を多くの日數を費やして通過し、唯ある港に出で、その港で一艘の良
船を選んで乗込んだ。其船は長い航海を爲る事になつてゐたのである。

ところが、出帆後幾らも日が経たぬ中に、不意に方角を失なつて了ひ、何うする事も出来なくなつた。
船長は自分の守るべき場所から下りて來て、聲高く悲しげな聲を出して叫んだので、一體どうしたわけ

かと仔細を尋ねると、我々は其大洋中の最も難所として知られた所へ船を入れたのださうで、彼は如何にも悲しげに斯く答へた。

「十分に注意はしてゐたのですが、何しろ此邊は非常に船の操縦の面倒な所で、遂々本船は最も恐ろしい潮の流れに懸かりました。もう十五六分位経てば我々一同の生命は有りませぬまい。どうぞ皆さん、此恐ろしい死から脱れるやうに神様にお祈り下さい。神様が私等を救つて下さらなければ到底脱れつては無いんですから。」

と、水夫に命じて帆を下させやうとしたが、帆綱が切れて下す事が出来ない。さうかうする中に、船は急流に乗せられた勢ひ益々鋭く、矢の如くに走つて、あなやと云ふ間に唯ある島の波打際に登つ岩山の裾に衝突して、木葉微塵に碎けて了つた。然し、神の冥助か、船の碎ける少し前に、我々は出来るだけ多くの食料品や荷物を陸に投げ上げ、我々自身は命がけで船から跳び下りて、幸ひにも一命だけは取留めた。

そも、我々が上陸した山の麓には、難破船の破片が足の踏所も無い程に夥多しく散亂して、其間には人間の骨や種々の荷物などが數限りも無く落ちてゐるのを見ても、此處へ衝突して悲しい運命に出會ふ者が頗る多いと云ふ事が解るのである。すべて普通の島に於ては、陸地から海中に注ぐ川があるものだけに、此島に限つて珍しい事には、海から陸の方へと流れる一筋の川があつて、海岸にある暗い洞穴の中へと注ぐのである。さうして、其洞穴の口は頗る大きくて高いのであつた。

此島に於て最も驚くべき事は、山の石が悉くルビー、サツファイヤ、エメラルド、水晶などの寶石であつた事だ。又一種の油が絶えず岩から海へと滴たつてゐるが、これが自然と魚の腹中に入ると云ふと、

魚は忽ち龍涎香と云ふ貴重なものに變じて、今度は打寄する波に乗せられ、海岸に打上げられるのである。この樹木の大部分は又蘆菅木で、實に美事なものであつた。それから此島の特徴と云ふべきは例の急流である。船が一度此急流に近づいて或る距離の處へ來ると云ふと、風が海陸何れの方面から吹くにしても忽ち急流の中へと吸ひ込まれ、決して脱れる事が出来ず、あれよくと云ふ間に岩山の麓に衝突して粉碎して了ふのである。さうして更に其山に登るべき道と云ふものが無いから、人が假令上陸する事が出来ても何處へも行かず事が出来ないと云ふ難所であるのだ。

我々は其山の麓に、たゞ茫然として失望の儘に立ち盡すより外は無かつた。我々は先づ食物を各自平等に分配した。それを食べて了へば餓死するより外は無ないのである。早く食べて了つた者は人に先んじて死し、大切にしてくる者は一兩日又は三四日遅く死ぬだけの事、いづれにしても死ぬのを免れる事は出来ないで、日々たゞ死ぬのを待つてゐるやうなものであつた。

そこで、少しでも長く生き延びる者は先へ死んだ者を一々埋めると云ふ事になつて、順々に死に行き、私は遂に最後に残り、自分に先だつて死んだ一人の男を地下に埋めた時には、私の食料品も残り少なくなつて、もう間も無く此世の暇乞をするに違ひ無いと悟つたから、自分の近く穴を一つ掘つて、愈々死にさうになつたら其穴の中へ入らう、と斯う定めてゐた。ところが神は未だ此身を見捨てなかつたか、私は忽ち例の洞穴の中へと流れ込んで、眞暗な奥の方へと深く、續いてゐる川の事を思ひ出した。深く思を潜めて考へて見れば、此川が勢よく流れて居る所を以て見るに、必ず何處かへ捌け口があるに相違無いし、捌け口があるとすれば、打ち開いた平原へ出ないとも言はれない。人の住んで居る土地へ出ないとも言はれない。假令失敗して溺死するより外に何とも仕方が無いとしたところで、それは唯だ此

處で餓死するのが溺死に代るばかりで何れにしても損は無駄話である。やるべしと私は決定した。そこで私は直に海岸に打ち上げられた船の破片の最も大きな奴と針金を集めて、大きな筏を造り始め、板と板とは針金で丈夫に結び付け、其他出来るだけの工夫を凝らして、無細工ながら充分役に立つ物をつ造り上げた。それから又かねて陸に上げて置いた荷物の中からルビー、エメラルド、サツファイヤ、翡翠、水晶及び龍涎香などの貴重品のみを選んで筏の上に載せ、平均を失はぬ様に、左右前後にうまく振り分けて緊りと筏に結び付け、筏を二挺携さへて、筏を洞穴の入口に浮べ、運命を神の心に任せて其上に乗り、櫂で一突陸地を突いた。

筏が洞穴の中に入るや否や、忽ち周囲は黒暗々として何物も見えなくなり、川の流れば行衛も知らず私を運んだ。一度は洞穴の天井が非常に低くなつて、私の頭にすれ／＼になつた事を感じた。もう食料品はすべて無くなつたので、私は非常に空腹を覚えたけれど、何も食ふ事が出来ない。其中に、空腹のところへ櫂を使つたり氣を遣つたりしたのだから心身共に悉く疲れて、私は遂に眠つたとも附かず死んだとも附かず無感覺の状態に陥つたのである。此無感覺の状態がどれ程長く続いたのか、私は語る事が出来ないが、氣が附いてバツと眼を開いて見ると、今の今までやはり黒暗々たる洞穴の中を走つて居る事だとばかり思つてゐたのに、意外にも廣々とした平野が展開して、私の筏は何時か知らぬ間に川の岸に繋がれてあり、周囲には多勢の黒人が群がつかつてゐた。私は直に身を起して彼等に挨拶した。彼等も私に對して何か言つたけれど其言葉は少しも私には解らなかつた。だが私の嬉しさと云ふものは殆んど比べる物も無い位であつて、前には斯う云ふ場所へ流れ着くやうにと念じたのであつたが、實際着いて見ると、自分は夢を見てゐるのではないかと疑がつた位である。

とにかく何か話をしなければ事が定まらないので、私が二三の文句を並べると、彼等の中からアラビア語の解る男が一人現はれて斯う言つた。

「決して驚いては不可ん。我等は此國の者です。今日、こゝに居る連中が、つい近くにある山から流れて来る此川の水を引いて、近邊の田圃を潤はさうと云ふので、一心に仕事をしてゐたのですが、何だか川の上流から流れて来る物があるが一體何だらうと熱心に見て居ると、一つの筏の上に男の人が正體も無く打倒れて居る様子なので、早速我々の仲間の中游泳の上手が一人泳いで行つて、うまく筏を掴まへて此岸へ引張つて來たのです。それで貴君の目が覺めるまで此處へ繋いで待つてゐたわけなんです。まあどうか貴君の身の上をお話しなさい。一體何處から貴君は流れて來たんですか。」

で、私は先づ彼等に向ひ、實は非常に空腹で、其爲めに正氣を失なつて筏の上に倒れてゐた位なんだから、物を言ふ力も無いのである。何か食ふ物が有つたら食はせて貰ひ度い。其上で色々委しく物語る事にするから、と云ふと黒人等は彼等の辨當として持つて來てゐた色々の物を澤山私の前へ出して、どれでも好きな物を選択して食べると言つた。私は非常に喜んで、何を選ぶと云ふ暇も無く、味を考へる餘裕も無く、滅茶苦茶に手當り次第に詰め込んだ。さうして充分に腹を膨らしてから徐むろに口を開き、これまでの筋道を事も細かに物語ると、彼等は實に驚嘆して、一々通辯人の黒人の言葉に耳を傾けてゐたが、やがて私の話が終ると、其通辯人の口を藉りて、今の話は實に世にも稀なる不思議な話だから、是非此國の王の所へ行つて委しく物語をするが好い。王は斯う云ふ話を聞くのを非常の楽しみにして居られるから、私の爲にも何彼と便宜な事が有るだらうと言つた。

黒人等は直に馬を迎へにやり、間も無く馬が來ると私を其れに乗せ、二三人の者は道案内として前に

立つて進み、其他の者は力を併せて水中より筏を引上げ、それ／＼に荷物を持つやら筏を擔ぐやらして私の馬の後方から従いて来た。

やがて私はセレンヂブの首府に着いた。セレンヂブと云ふのは此國の名であつた。さうして黒人等に伴はれて國王の前に出ると、私は、いつも印度地方の國王に謁する時と同じ風の、王の足元に平伏して床を接吻した。王は喜ばしげに愛嬌笑ひをして私を立上らせ、玉座に近く座席を與へた。

愈々身の上話をすると、私は決して何事も包み隠さず一切を打明けて話した。先づ不幸にして急流に乗せられ、難破の憂き目に遭遇した事、絶望して岩の上に立つた事、仲間の者が一人づゝ死んで行つた事、筏で洞穴の中に入つた事、目を開くと此國の川岸に着いてゐた事に至るまで、手に取る如くに話した。遂に黒人等は筏を國王の前に持つて来て見せたり、荷物を持つて来て見せたりした。王は私の寶玉類を見て頻りに感に入り、其中でも目ぼしいのを一々手に取つて大變に賞美するので、私は再び恭しく平伏して、幸ひにして此等の寶玉が陛下の御氣に召したのなら私は喜んで獻上したいと思ふから、どうぞ收めて貰ひ度いと言ふと、王は微笑して、其方の志は忝けないが、今それを取つて了へば故郷へ歸つてから喉を困るであらう、そんなに命懸けで手に入れた物を私に呉れると云ふ志だけ受ければ貰つたも同じであると言ふと、役人を一人呼んで其人を私の接待役に任じ、私が其國に逗留中一切の費用は陛下の御手許から出ると云ふ事を申渡した。それから私の接待役に任せられた役人は、すべての私の荷物を宿へと運んで、それ／＼適宜の處置を取つて呉れた。

そこで私もセレンヂブ國王の仁慈に深く感じて、當分其國に滞在する事に定め、毎日一度は必ず王宮に參内して王の機嫌を伺ひ、其他の時間には都の内外を見物して歩くので、愉快ではあつたが決して閑

では無かつた。

そも／＼此セレンヂブ王國の都と云ふのは、此國の中央に聳り立つ高い山々の間に挟まつて廣く打ち開いた平野の一端に在つて、附近からはルビイ其他の寶石を多く産し、樹木も亦頗る珍木奇材に富んでゐるが、最も多いのは杉や椰子などの類で、これらは其生、長、頗る好く、實に驚くばかりの大木となつてゐるのである。また此國の主なる川の河口からは非常に純良な眞珠が取れるし、處々の谷々からはダイヤモンドも取れるのだ。其外には又昔々の其昔からアダムの神の罰を被つて、天國の樂園から放逐されて来た所と傳へられて居る高い山があるので、私は其頂上に登つて見た。

市外の見物もすべて終つて都に歸ると、私は國王に謁して、もう大分長く逗留して、見るべき物も大抵見盡したし、随分日數も経つた事であるから、故郷へ歸りたいと思ふ心地を述べると、國王は私の心を察して、直に歸國を許し、種々の珍らしい貴重な品々を餞別として與へ、別に一通の書面を取出して斯う言つた。

「余は此書面と、別に用意させた品々をば汝の國王に贈り度く思ふ。何分よろしく頼む。余が久しく教王ハラウン、アル、ラシッド陛下と懇親を通じたいと望んでゐた事を、よく申述べて貰ひ度い。」私は委細畏まつて國王の書面を受取つた。其書面の用紙は一種の動物の皮をなめたもので、頗る珍奇な非常に高價なものである。色は黄色である。其上に書いてある字は印度語で、斯う云う文句であつた。

出でては百象を先驅となし、入りては十萬のルビイを以て飾れる宮殿に坐し、其寶庫の裡にはダイヤモンドを鑲めたる二萬の冠を蔵する印度の國王より、遙かに教王ハラウン、アル、ラシッド陛下

に書を寄せ奉る。

こゝに我等が陛下に贈呈する所のものは固より陛下の心を慰め陛下の用に供するに足らざるべし。然りと雖も此等の物は悉く我等の最善の選擇を経たるものにして、以て聊さか我等の友情の如何に敦厚なるかを示さんとする也。獻芹の微意たゞ衷情を酌み給はん事を冀ふ。等しく國の王として蒼生に君臨する我等は宜しく兄弟の情誼なかる可らず、我等は此書面を一弟より其一兄に贈るが如き心を以て贈呈するもの也。頓首。

今、セレンヂブ國王のハラウン、アル、ラシッド王に贈らんとする品々を一見すると、第一には唯だ一個の大ルビイを削抜いて美事な酒杯に造り上げたものである。其高さは約五寸、厚さは七八分、其玉杯の中には粒の揃つた眞珠を一ばい盛つてある。第二には一枚の大きな蛇の皮である。其鱗は實に新造の金貨と同じ美しさに光り輝やき、人が此皮を敷けば四百四病を悉く避けると云ふ不思議なもの。第三は、五萬ドラクムの重きある珍らしい大蘆薈木と、大きさが櫃の實ほど有る龍腦三十粒。第四は、絶世の美人一人、これには寶玉を以て飾つた美しい衣裳を着せてあつた。

これらの物を悉く國王の手から受取つた私は、國王の特に支度を命じた良い船に乗込んで随分長い航海をして無事にブツラアの港に着き、直にバグダッドへ歸つて来た。

そこで、私は先づ何よりも第一にセレンヂブ王から依頼された用件を済まさうと考へて、例の書面と贈物とを携へてハラウン、アル、ラシッド王の宮殿に行き、事の趣旨を申入れると、直に王の前に案内された。私は先づ王の足下に身を投げ伏せて敬意を表した後、セレンヂブ王から託されて来た書面と贈物とを呈上した。

王は書面を開いてさうと目を通した後、セレンヂブ國王は果して此書面に記してある通り強大で、國力強く、他に誇るに値ひするのであるかと尋ねた。私は再び王の前に身を投げて敬意を表した後、斯う言つた。

「仰せの通り、セレンヂブ王の御書面に書いてあります事は皆事實で、決して法螺では御座いませぬ。それは私が確かに私の眼で實際を見て来たので御座いますから、堅く保證致しますで御座います。私もこれまでには諸國の王様の事に就いて多く聞いたり、又自分で實地に見た事も御座いますが、決して此セレンヂブ王よりも強大な王が多く有らうとは思はれませぬ。美と善とを盡すと云ふのは全く彼のやうな事を申すので御座いませう。王が宮殿の外へ出られる時は實に驚くばかり大きな象の上に玉座を据ゑさせて、其上に腰を下して居られ、先立として更に一頭の同じやうな大きな象の上に立派な服を着た役人が進むので御座います。御供はすべて千人位も随行すると思ひました。さうして此王の前の象に乗つて居る役人が、時々大聲を發しまして、「此大王を拜せよ、此偉大なる大王は、傳へ聞くソロモンにも亦マハラアヤにも優りて、強大なる力を有し給ふ」と斯う申しますと、今度は國王の後方に居ります他の役人が、「此強大なる國王も、遂には崩御せらるゝか？ 崩御せらるゝか崩御せらるゝか？」と繰返して申します。さうすると前に大聲を發した役人が大層大きな聲を張り上げて天にも響けとばかりに「否々、我等が王の萬歳を祈るゆゑ。我等が萬歳を祈るゆゑ」と叫鳴り立てるので御座います。随分おもしろい習慣が澤山御座います。」

ハラウン、アル、ラシッド王は私の話を非常に愉快に聞かれて、數多の賜物を下された。

シンドバドは以上の如くに語り終ると、例の如くに五百圓の金をヒンドバドに與へ、次の日は愈々最後の冒險譚をするから、是非來て呉れと招待した。

○シンドバドの第七の航海

私は第六回目の航海から歸つた後は、再び航海しやうと云ふ氣は全く無くなつて了つた。もう随分老年にも近寄つた事ではあるし、家には有り餘る程の財産が出来たし、再び命がけの冒險などはせずに樂隠居となつて晩年を楽しまうと決心した。

ところが或日王室から一人の役人が私の家へ來て、王が是非私に話しをしなければならぬ用が有るか一緒に來て呉れとの事なので、何事が出来たのかと訝かりながら私は參内して、國王の前に現はれた。すると、國王は私の敬禮を受けた後口を開いて、

「シンドバド！ 余は汝に是非頼まねばならぬ用事が出来た。それは外の事でも無い。遠方のところ甚だ御苦勞ではあるが、余の返書と贈物とを持つてセレンヂブ王の所へ行つて貰ひたい。さうして余の感謝の念と親愛の情とを宜しく傳へて貰ひたいのぢや。」

と言つた。私は實に驚いて斯う答へた。
「陛下！ 陛下の御命令はどんなことでも無論喜んで御受け致しまする筈で御座いますが、實は私も老年に近寄つた事でありまして、二度と再び從來のやうな冒險は致すまいと決心したので御座いますから、此事だけは何卒御許しを願ひ上げ度いもので御座います……」
と答へたが、王はどうしても此使命を果す者は私でなければならぬと深く思ひ込まれて居る様子だし、

實際また私程の適任者は無いのであるから、遂に私は委細拜承の旨を答へた。王は喜んで旅費として五千金を私に呉れたのである。

私はハラウン、アル、ラシッド王自筆の返書と贈物とを受取つてから僅か二三日の中に一切の旅支度を終へ、ブツソアラの港から全權公使のやうな堂々たる勢ひで船に乗込み、長い航海を経て無事にセレンヂブの都へ到着した。此度は我が國王の使者として特派されたのであるから、私は美々しい行列の出迎を受けてセレンヂブ王の宮殿に案内された。

王は私の深厚なる敬禮を受けた後、口を開いて斯う云つた。

「シンドバド！ よ、參つた喃。余は其後おみの事を幾度思ひ出したか知れぬのぢや。再び會ふ事の出來たのは何よりの喜びである。」

私は國王のいつも變らぬ懇情を感謝して、それから贈物と返書とを呈上した。

ハラウン、アル、ラシッド王の返書には斯う云ふ文句が認めてあつた。

皇祖皇宗以來地上に於ける神の代理者として特に指定せられたる神の忠僕ハラウン、アル、ラシッドより、強大世に隠れ無きセレンヂブ國王陛下に呈上す。

我等は、陛下よりの親書を多大の喜びを以て享けたり。而して此返書を我等の王宮より呈上して遙かに懇親の情を寄するものなり。冀くば此書を開き給ふ時衷心の喜びを以て之を一讀せられん事を。頓首。

贈物はどんな品々かと云へば、第一には五千圓の價值ある金糸の織物で造つた衣服一組、カイロ、スエズ、アレキサンドリヤの三個所から最上等の物として選んだ毛織物の上衣五十枚、純白雪の如き織物

百反、それから一人の勇士が弓と矢を持つて一頭のライオンを射殺さうとする有様を彫刻した瑪瑙の大鉢一個、及び昔の名ある大王が愛玩したと傳へらるゝ美麗なる裝飾用のテーブル一脚であつた。セレンヂブ王は此等の品々を受けて非常の喜びであつた。其晩私の爲に催された宮中の宴會の如何に盛大なものであつたかは茲に多く説明するを要せぬ所であらう。

次の日になると私は早速歸國したいと云ふ事を告げた。セレンヂブ王は百方口實を設けて私を長く逗留させやうと努めたが、私が何うしても承知しないので、溢々ながら歸國を許し、莫大の價値ある數々の物を引出物として賜はつた。私は直にバグダッドへ向けて出帆した。然し、其途中で思ひも寄らぬ事情が出来て、自分の希望通りに早くは歸る事が出来なくなつた。と云ふのは、セレンヂブの港から出帆後、三日目か四日目に、我々の船は猛悪なる海賊の爲に襲はれたのである。何しろ此方は軍艦ではないのだから、適當な應戦は出来ず。賊に抵抗した者は皆ムザムザと殺されて了ひ、其他の者と私だけは決して賊に抵抗しなかつたので、命だけは助かる事が出来たけれど、我々の金品衣服は悉く奪ひ取られ、唯ある島へ船が着くと直ぐに其港で奴隸に賣られて了つた。

私は富有なる商人に買はれた。其商人は私を家に連れて歸ると、随分親切に取扱かひ、奴隸として出来るだけ立派な服装をさせた。それから二三日経つて、主人は私に對ひ、

「お前は何か手に覚えのある仕事でも持つてゐるかね？」

と尋ねたので、私は元來職人ではなく、相當の商人で海外貿易に従事してゐたのであるが、今度圖らずも海賊に捕はれて、所有品を全部奪ひ取られたのであると答へると、

「それでは、お前弓を射る事が出来るか？」

と又主人は尋ねた。

「はい、弓は若い時分に好きで、可なりやつた事がありますから、今でも射る事は出来ませう。」

と答へると、主人は直に弓矢を持つて来て私に與へ、私と共に一頭の象に乗つて、町から五六里も離れた所に在る大きな森に行つた。さうして此邊が適當と思ふあたりへ象を停めて、私を下に降し、一本の大木を指して斯う言つた。

「お前は其木に登つてゐて、木の下の象を射るのだ。此森には澤山象が居るのだから必ず此木の下の象が通るに相違無い。さうして一頭でも射留めたら直ぐに私の所へ知らせに来るのだよ。」

と、食物を私に呉れて彼は歸つて行つた。

私は今にも来るか／＼と待ち構へてゐたが、其日終日は待ちほけで、日が暮れても一頭だつて通りはしなかつた。私は、或は主人が何か間違へたのではあるまいかとも思つたが、未だ食料品は有るし、どうせ来た序でだ、一晩明かして見る事に爲やうと覺悟をきめた。

すると、翌朝になつて太陽が最初の光を投げる頃、幾頭とも數へ切れぬ程に夥多しい象の群が木の下の通つたから、私は勇氣百倍して彼等目がけて幾筋かの矢を放つた。すると遂に彼等の中の一頭は地上に倒れ、其他の象は悉く驚ろいて遠く逃げて了つたので、私は直に木から下りて馳せ歸り、首尾よく一頭を倒したと主人に告げた。主人は大層喜んで色々御馳走を出して私に食べさせ、それから私と一緒に象に乗つて例の森に行き、其附近に穴を掘つて倒れた象を埋めた。これは、斯うして象の肉を腐らせて其牙を取り、それを賣らうと云ふのである。

それから二ヶ月ばかりの間私は此仕事を續けて主人を満足させてゐた。

ところが、或る朝例の如くに群を成して来る象を見張つてゐたが、いつもと全く異つた様子を認めて非常に驚ろいた。と云ふのは、彼等が例の如くに通り過ぎては行かずに、私の登つてゐる木の下へ来ると皆一齊に足を留め、足を軽々と踏み鳴らして大きな聲で叫び立てた。何しろ其邊の空地一ぱいに隙間も無く群集した大きな象が叫んだり足踏したりするのだから、地面はふる／＼と震動して、其恐ろしさは實にお話にもならぬ。彼等は私の登つてゐる木を取り巻き、偉大なる鼻を上の方へと振り向け、目を瞬らせて私をジツと睨んだ。私は思はず／＼慄へて木にしがみ附いた。すると、彼等の中の最も大きな奴が、突如其大きな鼻を木の幹に巻きつけ、烈しく二三度揺つてグイと引くと、さしもの大木が根こそぎ抜けてハタとばかりに地上に倒れ、私も木に掴まつたまま、下へ落ちた。さア今にもあの偉大な鼻でビシヤリと叩き殺されるのだと思つてゐると、案外にも其大きな象は鼻で私の身体を巻き上げて其背に載せ、他の多くの象が列を作つて居る先頭に立つて駆け出した。私はもう生きてるか死んでるか解らないやうな心地になつて運ばれたのである。

それから何でも餘程遠い所へ運ばれたのであらう。私が正氣に復つてから間もなく、象は唯ある場所に私を下して彼等は皆何處へか行つて了つた。

さて象は皆行つて了つたし、私は暫らく氣を落し附けた後、徐むろに附近の様子を見ると、私の下された所は、或る廣い丘で、驚ろいた事には此處彼處に象の骨と牙とが夥多しく散亂して居た。で、考へて見ると、此岡は象の死んだ仲間を埋葬する所らしい。即ち私に此場所を見せて、牙が欲しければ此處に澤山あるから、こゝから拾つて行く事にして、決して生きた象を殺すやうな慘酷な事はして呉れるなど云ふんで、私を此處へ案内して来たものらしい。象の行届いたやうな方を見るにつけても私は自分が

毎日象を射殺したと云ふ事を後悔した。何だか厭やな氣持になつた。そこで、其場所を確と覚えてから私は足の向を元来た町の方へと返して、一晝夜かゝつて主人の家へ歸つて来た。主人は私の姿を見ると驚ろいて叫んだ。

「お、シンドバド。お前はまア一體どうしたんだ？ 私はお前が久しく歸つて来ないもんだから、何うしたかと案じて森に行つて見ると、例の木は根こそぎ抜けてるし、お前の弓と矢は落ちてゐるしね。これは必ず象の爲に酷い目に遭はされたに相違無いと非常に心配してゐたんだよ。うむ？ 一體どうしたんだ、早く話して聞かして呉れ！」

そこで私は主人に委しく事情を語つた。主人が不思議に思つたのも無理の無い事である。

我々は其翌日一頭の象と共に跨がつて、象の牙の澤山有る丘へと出かけて行き、出来るだけ多くの牙を象の背に積んだり我々も背負つたりして歸つて来た。さうすると、主人はこれまでに全く違つた態度で私に斯う言つた。

「私の言ふ事を聞いと呉れ。實はあの森の象は毎年毎年多くの奴隷を殺したのだよ。私等が象牙を取る爲に奴隷をやれば、いつか必と殺されて了ふに定つてゐたのだ。それだのにお前ばかりは、象に頼まりながらも命は取られずに却つて多くの象牙を取る事が出来たと云ふのは眞事に不思議な事と言はなければならぬ。これは必ず神様が特別にお前を愛すると云ふばかりでなく、何か世の中の爲になる事をお前に爲せやうと云ふ御考があつたのに相違無いね。お前さんは私を充分に金持にして呉れたし、加之お前さんには神様の特別の思召があると解つたし、私はもうお前さんを奴隷としては扱はず、自由の身にして兄弟として取扱かふ積りだ。そしてお前さんを自由にすると云ふばかりでなく、何か贈物をし

たいと思ふのだが……」

此言葉に對して私は答へた。

「いや、私はもう此身が自由になつて、故郷へ歸れさへすれば其れが何よりの喜びで、其外にも報酬などは御無用に願ひたいものです。」

「さうかね……それでは、もう少し待つと丁度都合のよい風が吹いて方々から象牙を積込む船が来るから、其時お前さんを送り歸す事に爲やう。」

と主人は言つた。で、私は主人の言葉のまゝに暫く待つ事にして、それから毎日／＼例の丘へ行き、象牙を積んで歸つたので、間もなく主人の蔵は象牙を以て充滿するに至つた。

やがて方々から船が來た。主人は其中で最も良い船を選んで其れに多くの象牙を積込み、其半分は私の分として與へる事を約束し、船賃其他心附まで充分に拂つて呉れた。其外に、私は主人の好意を無にせぬ爲に、彼から贈られた其國の珍奇な品々を受けないわけには行かなかつたのである。

歸航の途中我々の船は新しい食料品を得る爲に數ヶ所の島に立寄つて、やがて印度の本州へ行つて或る港へ船を寄せた時に、私は其先きをブッソニアまで船で行き度くはない、陸を旅行したいと思つたので、其港へ上陸して私の分と定められた象牙を陸揚げした。そこで象牙を賣却すると、果して非常大金が手に入つたので、其代金で私は印度地方の珍らしい貴い品々を澤山買入れた。故郷へ持歸つて、國王はじめ其他の人々への進物とする爲めである。

それから一兩日其港で待つてゐると、丁度都合よく故郷の方へ行くと云ふ大きな隊商があつたので、自分も其仲間に入れて貰つて出立した。

遂に私はバグダッドへ歸つた。さうして、早速ハラウン、アル、ラシッド王の宮殿に参内して使命を全うした事と、歸りの冒險とを事細かに言上した。王は非常に喜んで私に多くの名譽を與へ、且つ種々の高價な品を澤山に賜ひ、厚く旅の苦勞を慰問された。

其後は私も頗る氣樂な境涯に入つた。さうして二度と再び海外貿易などは爲やうと云ふ量見を起さず、毎日のやうに親戚知友を集めて、愉快に暮らして居るのである。

こゝに至つてシンドバッドは前後一週間つゝいた長物語を終つて、シンドバッドに聲をかけた。

「どうだね、シンドバッド君。世間も廣いが私はど辛苦艱難した人間が外に有るだらうか。かう云ふ苦勞をしたのだから、今日氣樂な身分になつて日夜歡樂を盡して居るのも當然と言つて差支なからう。君はどう思ふかね？」

と言ふとシンドバッドは主人の手に接吻をして斯う言つた。

「旦那様！ 色々お話を伺がつて見ますと、成程私の苦勞なんでもは貴君の比へ物には成りませんです。あんな事位で愚痴をこぼすなんて全く意氣地の無い事で御座いました。貴君は氣樂に生活てゐらつしやるだけの價值を持つてゐらつしやるばかりでなく、當然今の有福な御身の上にお成りになるだけの事が有るのです。貴君は全く役に立つ金の使ひ方を爲さるのですもの。私は心の奥から旦那様の御健康を祈ります。」

シンドバッドは之れを聞いて愉快さうに肯づき、例の如く彼に五百圓を與へて、今後は人の荷を運んだりする職業は止めると言つた。さうしてシンドバッド一家の者として待遇するから、今後は一緒に暮らす

事に爲やうと言つた。何故かと云へば、彼はヒンドバドに、船乗のシンドバドと一生の親友になつたと云ふ良い記憶を残させたいし、彼自身も亦これを好い記念にしたいからである——と斯う語つた。

○アライ、コヂアの話

これも矢張り教王ハラウン、アル、ラシッドの御代にあつた話であるが、バグダッドの都に一人の商人があつた。此男は左して富有の身ではなかつたが又決して貧しいと云ふでもなく、父から傳へ受けた家に住み、親譲りの商賣を営み、それから得る所の利益で充分に満足して、誰の世話にもならず獨立の生活をしてゐたのである。

此男が三晩つゞけて實に妙な夢を見た。何處とも無く一人の氣高い老人が現はれて彼の前に突立ち、頗る嚴めしい顔をして何故其方はメツカへ参宮に行かないかと烈しく叱るのだ。それも一晩位なら左程氣に懸ける程の事も無かつたらうが三晩まで續くに至つて彼の商人は非常に心を惱ました。勿論かれは善良なる回々教信者として一度はメツカへ参宮しなければ濟まぬと云ふ事は充分に承知してゐたのであるが、人手も少ないのに住宅もあり、店もあり、商品も可なり有る以上、それを全然見捨て、旅に出かけると云ふ事は無理な話と言はねばならぬ。斯う云ふ事情が有つて見れば、今急いで巡禮旅行に出かけないでも良心に咎められる事は無い。神様も察して下さるであらうと考へてゐたのだ。然し、同じ夢を三晩つゞけて見て、そんなに烈しく叱られては彼たるもの大いに苦痛を感じないわけには行かない。何と無く巡禮旅行をしなければ非常な罰でも受けさうに思はれてならぬ。よつて思案の結果、直ぐに巡禮旅行を爲やうと決心した。そこで彼は非常な英斷を以て、家も店も造作も家財道具も悉く賣拂ひ、又

商品の大部分も捨賣りにして了つた。が、其外に處置をしなければならぬ事が一つあつた、と云ふのは、かれは千圓の貯金を持つてゐたので、それだけは何處か安全の場所へ残して行き度いと思つたのである。色々考へた上で彼は其千圓の金を大きな瓶の中へ入れ、其上に阿列布油を注ぎ瓶を充たし、緊かりと密封して一人の親友の所へ持つて行つた。

「君！ 僕は二三日の中に隊商の仲間になつてメツカまで参拜に行つて來やうと思ふのだがね。どうか御厄介ではあるが、僕の歸るまで此瓶を一つ何處かへ藏つて置いて呉れたまへ。」

と頼むと、親友は快く承知して、
「宜しい、大丈夫保存して置く。だが此處に僕の所の藏の鍵が有るから、君勝手に藏の中へ入つて、何處でも好きな所へ置きたまへな。大丈夫君が歸つて來ると同じ場所にチャンと在ると云ふ事に爲やうぢやないか。其方が氣もちがいゝやね。」

とまで言つて呉れた。
頼りにしてゐた隊商が愈々出立する日が來た。アライ、コヂア（これが例の商人の名である）は一頭の駱駝を買つて、先方へ行つて賣るのに適當だと思ふ品物をそれに載せ、彼自身も荷物と一緒に駱駝に乗る事にして隊商の仲間に加はつた。やがて彼は無事にメツカに到着して、毎年々々諸國の信徒を引寄せ立派な本山に参詣した。それから彼は持参した品物を賣らうと云ふ目的を以てメツカの市場へ行つて見た。

どの店の誰に賣らうかと考へながら徐々と市場の中を歩いてゐると、かれのそばを通りかゝつた二人の商人が彼の商品を見て、餘程氣に入つたと見えて、足を留めて暫く睇めてゐたが、其一人が同伴の男

に話しかけた。

「うむ、なか／＼ 價値もんだね。もし此商人が此品をカイロへ持つて行けば随分高直に賣れると云ふ事を知つたら、直ぐに彼處へ持つて行つて了ふだらう。此處では賣らないだらう。」
アライ、コチアは此言葉を聞くと心大いに動いた。かれは豫々エチプト美人の評判も聞いてゐたので、それでは寧ろカイロまで行つて此商品を買つたり、エチプト美人の有名なダンスでも見る事にしようと考えた。

そこでアライ、コチアは、カイロへ行く隊商の仲間に加はつて遂に出かける事になつた。カイロへ到着して見ると、其旅行が冗ではなかつたと云ふ事をかれは發見した。かれは二三日の中に其商品を買つて賣却して、自分が望んだよりも以上の大利益を得たのである。かれは直ぐに其金でカイロの産物を澤山買込んだ。次にはダマスカスへ行つて又一儲けしやうと考えたからである。

ところがダマスカスへ行く隊商が出發するまでには五六週間の間があると云ふので、彼はカイロ市の内外の珍らしいものを残らず見物した。ピラミッドは云ふに及ばず、わざわざナイル河を船に乗つて、其兩岸にある名高い町々をも見た。

やがてアライ、コチアは、ダマスカスの方へ行く隊商に加はつて出立した。此隊商は道をエルサレムの方へと取つたので、アライ、コチアは回々教信者がメツカに次いで最も神聖な所と認めて居るエルサレムの寺院に參詣するの機会を有した。エルサレム市は一名バイエル、アル、マツカッダスと稱せられて居る。即ち「最も神聖なる館」と云ふ意味である。

日を経てダマスカスの都に到着したアライ、コチアは甚だ愉快な所へ來たと思つた。美しい牧場や

楽しい水の流れや、目を喜ばすに足る花園などに取巻かれた此都會の有様は、かねて其地に旅をした人の話に聞いたよりも以上であると思つた。何しろ非常に心地の好い町なので、彼は長く逗留して、其附近を悉く見物し、人情風俗をすべて觀察した。然し、幾ら其地が気に入つたと言つても故郷のバグダッドを忘れる事は出来ないで、彼は遂に故郷の空を目ざして出立し、其途中アレツポに立寄つて其處に二三日滞在して、そこからユウフラチスの大河を越えた後、道をムススルの方へ取つた。

かれがムススルに到着した時に、さきにアレツポから道連れになつて大仲好になつたベルシャの商人が、是非一緒にシラズまで行けと勧めた。今持つて居るだけの商品をシラズまで持つて行つて賣れば、實に莫大な利益を見る事が出来るから、其上で故郷のバグダッドへ歸るが好いと盛んに説き立てた。莫大の利益があると聞いては大抵な都合をしても行つて見度くなるのは商人として普通の人情だから、アライ、コチアは遂にベルシャの商人と同伴してシラズまで出かけた。巡禮旅行に出かけた抑々の初めから勘定して見ると彼れは七年間旅から旅へと渡り歩いてゐたのである。それから漸やく故郷へ歸らうと云ふ決心をした次第である。

此七年の間かれが千圓の金貨と阿列布油を入れた瓶を託した故郷の友人は少しもアライ、コチアと其瓶の事を考へなかつたが、丁度アライ、コチアがバグダッドへ向ふ隊商と共にシラズを出立した頃の或る晩、此バグダッドの友人は家族と共に晚餐を認ためてゐたが、阿列布油の事に就いて偶然に一悶着が起つた。と云ふのは此友人の妻君が、久しく阿列布油で煮けた物を食はないが、何とか今工夫して阿列布油の金數羅を食ひたいと言ひ出したのが原因である。

「お前は今阿列布油の話をしたが」と彼女の良人は唇を開いた。「私は偶然にアライ、コチアが七年前

にメツカへ行く時私に預けて行つた瓶の事を思ひ出したよ。あの男は其後どうしたのか薩張私には解らない。あの時一しよに出かけた隊商は、暫くすると歸つて来たが、あの男の姿が見えないから、何うしたかと、尋ねたらエチプトへ行つたつたと云ふ返事だつた。七年も歸つて来ないところを見るとアリイ、コチアは儲かに死んだのだね、死んだに相違ないよ。だから、あの男の預けて行つた阿列布油が若し未だ悪くなつてゐなかつたら食べやうぢやないか。皿と蠟燭を貸しておくれ。私が取出して来るからね。そして好かつたら金數羅を拵へて食べる事にしよう。」

妻君は反對した。食へたいには食へ度いが他人の所有品に手を付けると云ふ事が良心を咎めたのである。

「あなた御止しなさいよ。折角人が信用して預けた物に手を付けちや氣が咎めるぢやありませんか。信用されたと云ふ事に對しても濟まないぢやありませんか。加之、随分久しく……七年も打捨てあるんですものカビが生えて汚なくなつて役に立たなくなつて居るでせうよ。かまはずにお置きなさいましな。」

と言つたが良人は承知しない。たうとう蔵の中へ入つて例の預かつた瓶を開いて見た。阿列布油は果して妻の言葉の如くカビが生えてゐた。然し、底の方は未だ好いかも知れないと考へたので、瓶を振りながら幾分か阿列布油を皿へあける拍子に金貨が出て来た。それを見ると元來慾にかけては一步も退かぬと云ふかれは、更に中をよく検査して見ると、油のあるのは上の部分ばかりで、七分通りはギッシリ金貨で詰まつてゐたから驚ろきもし喜びもした。然し、かれは直に其瓶に元の通り蓋をして、素知らぬ顔で妻の所へ歸つて斯う言つて聞かせた。

「全くお前の言つた通りだ。阿列布油はすつかりカビが生えてゐたよ。だから私は瓶を元の通りにし

て置いて来た。なに、アリイ、コチアが歸つて来て見ても、私が手を付けたと云ふ事は些ともわからぬ。」

「それ御覽なさいな。だから私の言つたやうに、瓶を開けてなんか見ないで下さるとよかつたんだのに！」

「い、ぢやないか。元の通りにしといて、アリイ、コチアが歸つても解りさへしなければ！」

と斯う言つたが彼は其發見した事を決して頭の中から掃ひ去る事は出来なかつた。さうして其晩終夜どう云ふ巧い工夫をしてあの金貨を自分の物に爲やうかと云ふ事を考へた。

夜が明けると、かれは町へ出かけて其年出来た新しい阿列布油を買つて来て、ひそかに妻にも知れないやうに蔵の中へ忍び込み、例の瓶の中から古い阿列布油と金貨とを悉く出して丁ひ、代りに新しい阿列布油を一ぱい入れて元の通り密封した。さうしてアリイ、コチアの置いた場所へチャンと置いた。かれが斯う云ふ不届極な事をしてから約一月ばかり経つてから、アリイ、コチアは懐かしい故郷のバグダッドへと歸つて来た。さうして先づ或る宿屋へ落ちついた。かれは或る人に家を貸してあるので、そこへ通知して立退いて貰ふまでは宿屋住居とさめたのである。

アリイ、コチアはバグダッドに到着した次の日、例の瓶を預けた友人を訪問した。友人は實に深い喜びの情を表はして彼を歓迎し、無事に故郷へ歸つた事を祝し、もう到底二度と生きて會ふ事は出来まいと絶望してゐたなど、語つた。

久しぶりに會つた人としての普通の挨拶を終つた後アリイ、コチアは七年前に預けた瓶を返して呉れるやうにと申出た。さうして長い間友人に迷惑をかけた事を厚く禮を述べたり詫びたりした。

友人はわざと手を振つて斯う答へた。

「君！ そんな面倒くさい事は言ひつこ無しに爲やう。君から信認された僕が君の物を預かるのは當然の話で、少しも迷惑でも厄介でも無いんだ。さア、こゝに蔵の鍵が有るから、君の随意に入つて取出して来たまへ。瓶は君が七年前に置いた通りになつて居るだらう。誰も觸りはしないんだから。」
でアライ、コチアは友人の蔵の中へ入つて瓶を取り出して来た。鍵を商人に返して再び丁寧に禮を述べた後かれの宿へと歸つて行つた。然し、瓶の蓋を除つて阿列布油の中へ手を突込んで見ると、少しも金貨らしい物が手に當らず、たゞ油がヌル／＼するばかりなので、かれは胸のドキンとする程驚ろいた。然し、これは自分が周章で、もつとすうつと下の方にあるのを、比較的上の方にあるやうに間違へたのかも知れないと思ひ返して、今度は旅行用の鍋釜の中へと油をすつかり掛けて見たが、千個の金貨が一個だつて出て来はしない。かれは餘りの事に暫しは茫然として身動きもせず突立つた。やがて彼は獨り叫んだ。

「私が親友と信じて預けたあの男の所業だらうか？ あの男がこんな酷い事を爲たのだらうか？」
それからアライ、コチアは早速友人の家へ引返して行つた。

「君！ 私が又やつて来たつて決して心配する事は無いから、餘り気にし給ふなよ。然し是非君に訊いて置かなければ叶ない事が有るんだ。成る程君の言つた通り、私の瓶はチャンと元置いた場所に置いてあつたし。それだから私も安心して君に禮を言つて宿へ歸つたんだがね。愈々あけて見たら君、中は阿列布油ばかりなんだ！ 實はね、あの中へ僕は後日の爲と思つて金貨を千圓入れて置いたんだよ。それが一枚も見えないから全く一時は驚ろいちまつたのさ。然し何だらう？ 多分君が商賣上の入費

に使つたんだらう？ さうなら其れで好いのさ。どうせ金つてもものは天下の融通物なんだから、君が使つたなら使つたで、今度また君の手元の都合の好い時に返して呉れ、ば好いんだからね。たゞ僕は眞正の事を知り度いんだ。君から返して貰ふのは決して急がなくても好いんだから……さうだらう？ 君が一時の用に使つたんだらう？」

と釋やかに申入れた。友人はアライ、コチアが斯う言つて来るだらうと云ふ事は覺悟してゐたので、待つてゐましたと云ふやうな顔つきをして嚴しく答へた。

「とんでもない事を言つて来ちや困るよアライ、コチア君！ 七年前に君が僕の所へあの瓶を預けに來た時だつて僕は少しも手を附けなかつたせ。君に僕は蔵の鍵を渡したぢやないか？ そして君は自分でチャンと置いて出たんぢやないか？ 今日もさうだ、君は自分で取出して來たのだらう？ そして元の所にチャンと元の通りに密封されてあつたんだらう？ さうして、安心して君の宿へ持つて歸つた癖にさ。今になつて、やれ千圓の金貨を入れて置いたの、やれ預かつた僕が使つたのだらうのと、よくも君はそんな失敬な事が言へるね。君はあの瓶の中に千圓入つてゐるなんて事を話した事は無いぢやないか。假令僕が如何に金を欲しいと思つたつて、金貨なんて入つて居さうも無い君の瓶なんか開いて見るものか。ねそんな文句は御門違ひだ！ 外へ持つて行つて呉れたまへ！ それに……かうどうも店頭に人群集りがしちや、外聞が悪くて閉口だ。歸り玉へ君は！」

と、顔を眞赤にして嗚咽した。其爲めに益々彌次馬は殖え、向三軒兩隣の商人等は、一體どうしたわけで争論が起つたか聞き訊してアライ、コチアと其友人とを仲直りさせやうと思つて集まつて來た。さうしてアライ、コチアの訴ふる所を委しく聞いた後で、彼等は愨張りの友人に向つて、どう云ふ返辭

をする積りであるかと尋ねた。

友人は依然として剛情を張つた。かれは其瓶に決して手を觸れなかつたと断言した。さうして、其瓶の中には阿列布油が入れてあるばかりだとアライ、コヂアが言つた以上、阿列布油より外に何物も入つて居る筈が無いと断言した。さうして、アライ、コヂアが彼に加へた侮辱雜言に對して皆證人になつて貰ひ度いと仲裁者に要求した。

はじめは穩やかに内輪の話として済ます考であつたが、友人が斯くまで言ひ募るのでアライ、コヂアも腹に据ゑかね、對手の男の腕を引捉へて、

「君は侮辱されたとか何とか言つて口惜がるけども、それは皆君が自ら招いた事ぢやないか。然し、君がそれほど堅く主張して何うあつても事實を打ち明けないと云ふ以上は既う仕方が無い。残念ながらこれを法廷へ持出して、それでも未だ君が今と同じやうに断言し得るか何うか拜見する事に爲やうよ。」友人は此宣言を受けないわけには行かなかつた。彼等回教徒の習慣として、かういふ一方の申出は斥ける事が出来ないであつた。

アライ、コヂアは遂に其友人を法廷へ引張つて行き、千圓の金貨を取られたと云ふ事を訴へた。裁判官は、それに關して適當な證人でもあるかと尋ねた。かれは、親友だと信じて金を預ける位であるから、そんな用心はしなかつた。證人を立てる位なら初めから其友人に金などは預けないのだと説明した。次に被告の陳述となると、被告は其近隣の商人等に言明したと同一の事を繰返し、決して瓶には手を觸れないし、又そんな大金が中に入つて居ると云ふ事は少しも知らないのだから、如何なる方面から考へても彼の關係した事では無いと断言した。さうして、裁判官が誓をしると命じると、彼は平然自若として

て殿そかに誓をした。其爲にかれは證據不充分的廉を以て放免された。

アライ、コヂアの残念な事は申すまでもない。彼は非常に口惜がつて、此儘では済まされないから此上は國王に陳情して聖断を仰ぐ事にすると言明した。

狡猾にくむべき商人がアライ、コヂアに勝つて意氣揚々として歸宅し、其幸運を喜んで居る間に、アライ、コヂアは一通の陳情書を認ためて、次の日、國王の外出されるのを待ち構へた。さうして、行幸の通路に平伏して陳情書を高く差上げてゐた。行幸の先拂ひとして進んだ役人の一人は、早速それに目を留めて取上げて呉れた。すべての陳情書を國王の眼に觸れさせると云ふのが、此國の最も善い掟であつた。

國王の習慣として、すべて陳情書は王宮へ歸つてから目を通すと云ふ事を知つてゐたアライ、コヂアは、直ぐに宮城へ參内して人民控所に入り、左右の沙汰の下るのを待つた。暫くすると、先刻陳情書を受取つて呉れた役人が奥の方から出て来て、次の日の何時に來いと國王の命令があつたと云ふ事を取次ぎ、其時刻を間違へずに參内して、委細を申上るやうにと言ひ渡した。

其晩の事、國王は總理大臣のギアアと侍從長のメスルウアとを伴れて、わざと庶民の姿に身を變して市中を歩き廻つた。國王が時々かう云ふ風に變装して民情を視察する事は有名なものであつた。國王が或る町を忍びやかに通つた時、偶と物騒がしい人聲が耳に入つたので、つと足どりを緩めて、其聲を便りにして行くと、唯ある門内の小さな庭に十人ばかりの子供が集まつて何かやつて遊んで居るのであつた。月は丁度中天に高く輝やいて、戶外遊戯をするには持つて來いの晩であつた。

國王は子供がどんな遊戯をするのか暫らく見て行かうと考へて、傍の石の上に腰をかけ、様子を覗が

つてゐると、十人ばかりの子供の中の一、番頭立つた子が、

「みんなで裁判ごっこして遊ぼうや！」

と言ひ出した。アライ、コチアと其友人との事件は早くもバグダッドの市中に悉く知れ渡つてゐたので、敏捷い子供たちの耳を免れる事は出来なかつたものらしい。

子供等は皆々裁判ごっこに賛成して、各自それ／＼の役を勤める事になつた。此遊戯を發起した子供は自ら裁判官となり、嚴然と威儀を正して正面に控へた。すると、裁判所の役人に扮した一人の子供が、アライ、コチアと其友人に擬せられた二人の少年を率ゐて其前に立つた。

すると小裁判官は小アライ、コチアに向つて、どう云ふ事件によつて彼が其友人を法廷に訴へたかと尋ねた。小アライ、コチアは恭やしく一禮して、委しく事實の通りを陳べ立て、終りに、何卒裁判官閣下の權威を以て明快な裁判を下し、千圓と云ふ大金を失なはぬやうに取計らつて呉れと願つた。次に小裁判官はアライ、コチアの友人に扮した少年に向つて、何故に直ぐに千圓の金を返してやらぬかと詰問した。小被告は巧みに實際の被告の通りに辯解の口上を述べて、終りに誓までもして見せた。

すると小裁判官は鹿爪らしく、

「そんなに早く誓をせんでも宜しい。本官は被告が誓をする前に其瓶を見度いと思ふ。アライ、コチア！ 其方は其瓶を持つて来て居るか？」

と尋ねた。

「いゝえ、持つて来て居りません。」

「左様か。それでは直ぐに持つて来るが宜しい。本官が少し検査する必要がある。」

と言つた。

小アライ、コチアは直ぐに小裁判官の前を退ぎて鳥渡わきへ行つたが、又急いで元の席へと歸つて来た。さうして例の瓶を持つて来た風をして一つの器を前に置き、これが七年前に友人に預けに行き、今度再び手に入れた瓶に相違無いと斷言した。小裁判官は次に小被告に振向いて、正しくそれに相違無いかと尋ねた。さうして、被告が然うであると答ふるや否や、直ぐに其瓶の蓋を除れと命じた。小アライ、コチアは直ぐに蓋を除る眞似をした。裁判官は其中を覗き込んで、

「うむ。なか／＼上等の阿列布油だな。では一つ調べて見やうか。」

と言つて鳥渡指尖で酌つて舐めるやうな風をした。

「これは上等だ！」と叫んで、それから少し考へて「だが本官思ふに、阿列布油と云ふものはそんなに長く保ちはせんだらうし、いつまでも味が變らずには居るまい。宜しい。それ、控所に待たしてある阿列布油屋を呼入れろ！ 本官は彼等の意見を聞き取るのが最も好いと考へる。」

と言ふ言葉に従がつて、二人の少年が阿列布油の商人に扮して小裁判官の前に現はれ、丁寧に一禮した。

「あ、御苦勞だ。お前たちは阿列布油を賣る商人だな？ では一つ尋ねる事が有る。一體阿列布油と云ふものは何年位保つものか？」

「左様で御座います。」と二人の少年は唇を開いた。「本職の我々が精々注意を致しましても三年以上は保ちません。三年を越えますと色も味も變つて了ひまして、役には立ちませんで御座います。」

「なるほど！ それでは其處にある瓶の中の阿列布油を調べて貰ひ度い。そして、其阿列布油は瓶の

中に入られてから何年位経つたものか説明して貰ひ度い。」

と小裁判官はしたり顔に命じた。

二少年はためつすがめつして瓶の中を見る風をして、徐むろに舐めて見る眞似をした。さうして二人とも、其油は新しくして上等のものであると云ふ事を明言した。

「お前たちは間違つてゐやせんか？」と小裁判官は言つた。「アライ、コチアは七年前に其油を瓶の中へ入れたのだと申して居るぞ。」

「いゝえ、もう確かだ御座います。」と商人たちは答へた。「此阿列布油は儘かに今年新しく出来たもので御座います。私どもばかりでは御座いません。此バグダッドの市中で阿列布油を賣る商人は必ず皆私どもと同じ鑑定を致す御座います。」

アライ、コチアの友人に扮した少年は、今の二人の子供の證言に反對して、飽くまでも彼は其瓶に手を觸れなかつたと剛情を張つたが、もう小裁判官は耳を貸さうともしない。

「黙れ！」と突如嗷鳴りつけた。證據はもう今の商人の言葉で澤山だ。本官も其阿列布油が新しい物だと云ふ事は知つて居る。其方は正しくアライ、コチアの金貨一千圓を詐欺取財したのに相違ない。ぐづぐづ言ふな！」と睨みつけて、其時まで何の役も勤めなかつた少年等に振向き「おい、此奴を監獄へ打ち込んで了へ！」

と申渡した。これで裁判ゴツこは終つたので、子供たちは一同拍手喝采して、裁判振の美事なのを喜び、被告に扮した少年をわきの方へと連れて行つた。

皎々たる月の光の下に此遊戯が美事に演ぜられたのを見て、國王がどんなに其裁判官に扮した少年の

才智に感嘆したか、それは殆んど言葉を以て形容の出来ぬ位であつた。王はやを腰かけてゐた石から立上つて、彼と同じやうにして先刻からすべての様子を仔細に見てゐた總理大臣のギアアアに聲をかけ、何う思ふかと尋ねた。

「陛下！ 實に驚ろきまして御座いますな。あんな子供でありながら今のやり方の美事さは殆んど賞める言葉にも困る位で御座いますな。」

と言ふと、王は斯う言つた。

「汝はもう一つ知らねばならぬ事がある。既に聞いたか何うか知らぬが、今の遊戯と少しも違はぬ裁判が明日余の前で行なはれる事になつて居るのぢや。今日ほんとのアライ、コチアが余の外出の際、請願書を出したのぢや。大臣、そらは何う思ふ？ 明日余が今の小さな裁判官以上の好い宣告を與へ得ると思ふかの？」

「恐れ入りますが、果して其事件が今の遊戯の事件と同じで御座いましたなら、實際あれ以上の宣告は無からうと存じます。」

「此家をよく覚えておくがよい。さうして明日、今の小さな裁判官を余の前へ連れて来て呉れ。一つあの子供に余の前で愉快な裁判をやらさうと思ふのぢや。それから、此アライ、コチアの裁判を扱かつて、其瓶を保管した男を放免した裁判官にも、明日參内するやうに命じて呉れ。後學の爲に見せて、あの子供から一種の教訓を得させてやらう。原告のアライ、コチアには必ず其阿列布油の入つた瓶を持つて来るやうに然う言つての。阿列布油の商人も二人ばかり呼び寄せて置くのぢや。解つたかの？」

「はい、畏まりまして御座います。」

と大臣は答へた。國王は、なほも何か面白い事は無いかと市中を歩き廻つたが、外に是れと云つて變つた事も無かつた。

其翌日、大臣は前の晩見覚えして置いた家に行つて、主人に面會し度いと申入れると、主人は丁度海外へ出かけて不在中だと云ふので、主人の妻が顔に厚い覆面布をかけて出て來た。大臣は、早速ながらと前口上を言つて、彼女の家に子供が有るかと思つて尋ねると、三人有ると答へた。では鳥渡此處へ呼んで貰ひ度いと言ふと、三人の少年は不思議さうな顔をして出て來た。

「あゝ、みんな元氣の好い子だね」と大臣は聲をかけた。「昨夜裁判ごつこの時に裁判官になつたのは誰かね？」

と言ふと、長男が自分であると答へたが、一體どう云ふ事情で質問されたか解らないので、如何にも子供らしく顔を赧くした。

「さうかね。お前さん私と一緒に王様の所へ行つてお呉れよ。王様がね、お前さんに會ひ度いと仰しやるのだ。」

と言つて直ぐに伴つて出やうとすると、母親は何とは無しに恐れて、一體どうしたわけだ王様がこんな子供にお會ひになるのかと尋ねた。總理大臣は彼女を勵まして、決して悪い用では無いのだから心配は爲るな、一時間ばかり経てば無事に歸すから、其上でよく本人から話を聴くがよいと言つた。

「まあ……左様で御座いますか。ですが、王様にお目にかゝると云ふのに此なりちや餘り失禮ですから、今服を着更へさせませう。少しばかりお待ちになつて下さいまし。」

そこで其少年が服を着更へて現はれると、大臣は大急ぎで彼を連れて王宮へ歸り、直に國王の前に出た。

た。

王は其少年が非常に氣おくれの様子をして居るのを見ると、かれを勵ます爲に、やさしく斯う言つた。

「これ、もつと此方へおいで！ 昨夜お前の家の前で、アライ、コヂアと其友だちの裁判ごつこをした時、裁判官になつたのはお前だと云ふ事だね。さうなのか、余は昨夜お前の裁判をそばで見えて、大變に面白くも思つたし、又感心もしたのだよ。あれはお前だつたか？」

少年は少し勇氣を得て、丁寧に、然うで御座いますと答へた。

「さうか。よい子ぢや！ さ、もつと此方へおいで、余がわきへ來るんだ。今お前にね、眞正のアライ、コヂアと其友だちを見てやるからね。」

と言つて王は、少年の手を取り、そばに引寄せて、玉座の上に立たせた。さうして、アライ、コヂアと其友人と呼び入れるやうに命じた。

間もなく原告被告兩人は國王の前に現はれて平伏し、其額を敷物に埋めて最敬禮をした。國王は徐むるに唇を開いた。

「其方等兩人、思ふ所を眞直に此子供の前に申述べよ。今日は此子供が余の代理として裁判をするのぢや。すべて余と同様に心得て申せ！」

少年は元より伶俐な子であつたから、忽ち國王の考を察して、もはや少しも惡びれた様子も無く、嚴然として玉座の片端の上に立つた。

アライ、コヂアと其友人とは、前に裁判所で陳述した通りに委しく話して、慾張り男は例によつて誓を爲やうと申出た。其時、少年は唇を開いた。

「誓をするのは早過ぎる。我々は先づ其阿列布油を入れた瓶を検査しなければなるまい。」
此言葉を聞くや否や、アライ、コチアは直に其瓶を持つて来て國王の玉座の前に置き、其蓋を除つた。國王は瓶の中を透すやうに見てから、試みに指を入れて少しばかり油を舐め、少年にも少しばかり舐めさせた後、かねて控へさせて置いた阿列布油の商人二人を呼び込んだ。彼等は命令通り阿列布油を検査して、これは正しく今年新たに出来たものであると報告した。さうして、少年が、アライ、コチアは七年前に其油を入れたと明言して居るが、商人等の鑑定に間違は無いかと念を押すと、商人等は口を揃へて、前の晩遊戯の時に、阿列布油の商人に扮した子供等の言つた通りの事を述べた。
悪漢は坐ても立つても居られないやうな気がした。さうして、阿列布油の商人二人の證言の爲に、自分の立場が滅茶々に破れた事が解つても、未だ何とか都合の好い辯解を試みやうとしたが、少年は早くも國王に聲をかけた。

「陛下！ もはや少しも疑がふ所は御座いませぬ。刑の宣告は何卒陛下の御口から仰しやつて下さいまし。遊戯の時には私が宣告致しましたけれど、今の場合は私では不可なのです。」

國王は少年の言葉に従がつて宣告を下した。さうして、悪漢を死刑に處せよと命じた。かれが刑に處せらるゝ前に、逐一其罪惡を白狀して、千圓の金貨の所在を打明けるやうに詰問された事は勿論である。其金貨は直ぐに、アライ、コチアの手に戻つた。

公平無私なる國王は、丁度列席の裁判官、即ち彼の悪漢を無罪と認めて放免した裁判官の前に呼び出し、烈しく其失策を責め、此少年に見習うて、今後しつかりしなければならぬぞと訓誡した。その後で、國王は少年を緊かり抱き締めて其額の上に幾度もく接吻をして、當座の褒美として金貨百枚入の

革財布を興へ、宮中の役人を附けて其母の許へと歸してやつた。當時バグダッドの市中は此少年の評判で大變だつたさうである。

○寵姫と公爵

昔バグダッドの都にアルブツサン、エブン、テエハアと云ふ金満家で好男子の藥種商があつた。かれは實に人の模範とするに足るの人物で、男が好くて金持ちであるばかりでなく、温厚篤實厚情の人間であつたので、市中の總ての人々から敬愛され、人々はかれと會つて話をするのを何よりの樂しみとも誇りともしてゐた、かれが德のある君子であると云ふ事は國王も能く承知されて、随分敬意を拂つて居られたのである。さて、毎日のやうに彼の家は貴顯紳士に訪問されて、殆んど彼等の集會所のやうに思はれる程であつたが、其中に一人特別主人の氣に入つた若い貴族があつて、主人は其人と非常な親友になつた。其若い貴族と云ふのはベルシヤの古い國王の子孫に當り、アブウルハツサン、アライ、エブン、ベカア公爵と云つて、日本の法性寺の入道も三舎を避けねばならぬ位の長々しい名を持つてゐた。

或る日此若い公爵がエブン、テエハアの家を訪問して四方山の話をしながら打興じて居るところへ、斑毛の驪馬に乗つた一人の貴婦人が、十人の女奴隸を供に連れてやつて來た。彼女は四寸ばかりの幅のある薔薇色の帯をしめてゐた。其帯には非常に大きなダイヤモンドや眞珠が飾りに附いてゐた。御供に立つて徒歩きをしてゐる十人の女も何れ劣らぬ美人ではあるが、主人が遙かに彼等を凌ぐ美人であると云ふ事は、覆面布を除らなくても充分に想像された。

貴婦人はエブン、テエハアの所へ何か買ひに來たのであつた。エブン、テエハアは懇懇な態度を以て

彼女を迎へて、先づ腰を下すやうにと勧めた。其間にベルシャの若い公爵は、生來の丁寧な態度を示す好機會を逸し度くはないと思つたので、心やすだてにエブン、テエハアの家の金網の座蒲團を持出して、貴婦人にすゝめ、彼女が躊躇無く腰を下すやうに思つて、かれは直ぐに身を退き、丁寧に一つ頭を下げて、貴婦人の踏んで居る敷物に接吻をして、それから、長椅子の下手の方に立つて控へた。貴婦人はかね／＼主人のエブン、テエハアとは遠慮の無い間柄であつたので、他家の男子には決して顔を見せぬ此國の婦人の習慣に頓着せず、覆面布をかき上げた其顔の美しさ、到底沈魚落雁閉月羞花位の形容詞では間に合はない、ベルシャの若い公爵は心の奥の方まで染々と「あゝ美人だな」と思つた。貴婦人の方でも、若い公爵の氣高い顔に瞳を据ゑないわけには行かなかつた。さうして、謙遜な態度をして、

「あなた。どうぞ御掛け下さいまし。」
と言つた。公爵は軽く一禮して、長椅子の一端に腰を下した。
公爵はもうすつかり其貴婦人に心を取られて了つたので、失禮とは思ひながら絶えず彼女の顔を眺め、自然に普通ならず激動した表情を示した。すると、貴婦人は敏くも公爵の胸の内を酌み取り、それに對して答へるやうな目容をした。それから彼女はすつと立上つてエブン、テエハアの傍へゆき、小さな聲で其用向を述べた後、あの若い男の方は何處の何と云ふ人だと尋ねると、
「アプウルハツサン、アライ、エブン、ベカアと申されます。元はベルシャの王族でしたが、今は公爵になつて居られるのです。」
とエブン、テエハアは答へた。

「ほんとですか？」と婦人は聞き返した。
「ほんとに彼の方の御先祖はベルシャの國王なんですか？」
「左様で御座います。慥かにベルシャの國王が先祖なんです。ベルシャが我國に征服されて以來、ベルシャ王の一族は皆我國の貴族となつて、我國王に好、仕へて居られるのです。」
「私御願ひがありますね。あの若い公爵と昵近になれるやうにして下さいな。いつか都合の好い時を考へて、此女を使者にして御宅へ遣しますから」と彼女は奴隸の一人を指さして「さうして、其時は貴君きつと公爵と御一緒にいらして下さい。」
斯う言ひ終つて貴婦人はエブン、テエハアに別れの挨拶をした。さうして、公爵の方へは一種特別の情味溢る、ばかりの眼容を見せて、驪馬に跨がつて歸つて行つた。
公爵は貴婦人の姿が見えなくなるまで遠く何時までも見送つてゐた。姿が見えなくなつても未だ茫然として同じ方角を見送つてゐた。餘り度外れの見惚れ方をしてゐるのでエブン、テエハアは可笑くなつて、公爵の肩を軽く叩き、そんなに茫然した顔をして美人の行衛を見送つてゐるもんだから、先刻から通行の人が幾人も／＼かれの顔を見て行つたと調諷つて、面白さうにアハア笑つた。
公爵はキマリのわるいのを通り越して、堪らなさうに太い嘆息をついた。
「あゝあゝ。どうぞ御主人、御願ひですから、今あなたと話をしに行つた貴婦人は、何處の何と云ふ人だか教へて下さい。私の心は全くあの婦人に奪はれて了ひました。」
「どうも公爵は大變な御執心ですな。あれこそは有名なシエムセルニハアさんですよ。あなたも御聞き及びせう、國王の寵愛第一と稱せらるゝ女官です」

「さうでせうね。あの人は實に正午の太陽よりも美しいのですもの。」
「さうです。珍しい美人です。だから國王も、あの人を愛すると云ふよりは寧ろ崇拜して居られるな
んで評判がある位です。何しろ、あの人に對する國王の御心遣ひと云ふものは大變なもので、私どもの
所へも特に宮中から御命令がありまして、シエムセルニハアの入用だと云ふ物は價を問はず勞を惜ま
ず調へて呉れと云ふ騒ぎですよ。」

これを聞いて公爵は獨り言のやうに言つた。

「あゝ……シエムセルニハア！ さう云ふ身分の人であれば私が何と考へても駄目だらう。然し、私
は假令先方から何とも思はれなくつても、自分があの人を愛する心は禁めやうにも禁める事が出来な
い。」

ベルシヤの公爵がシエムセルニハアに思ひ焦れて斯う云ふ風に煩悶して居る間に、シエムセルニハア
は王宮へ歸つて、どう云ふ風にして公爵と會見しやう、どうしたら自由に話し得るだらうと考へた。そ
して多くの時を移さずに、先刻エブン、テエハアを訪問した時に指定した女奴隷を呼び寄せて委細の旨
を含め、直にエブン、テエハアの所へ行つて、かれと公爵とを一緒に伴れて来るやうにと命じた。

使の者がエブン、テエハアの家へ行つて見ると、幸ひにも公爵は未だ歸らずに主人と話をしてゐたの
で、彼女は直ぐに斯う言つた。

「私どもの主人シエムセルニハアは、これから直ぐに御兩人の方に王宮へ入らして下さるやうにと
申しました。主人はお目にかゝる支度を致してお待ち受けして居りますんですから、どうぞ御猶豫なく
御出かけ下さいますやうに。」

エブン、テエハアと公爵は、國王の寵愛最も深いシエムセルニハアを訪問して什麼危難を被むるかも
知れないなど、云ふ事は少しも考へずに、使の女に伴はれて王宮へ行つた。彼等は直に一つの大きな
美しい部屋に案内された。

ベルシヤの若い公爵は、ぐるりを胸はして、世にも這麼美しい大廣間があるかと思つた。敷物と云
ひ、坐蒲團と云ひ、長椅子と云ひ、家具と云ひ、裝飾品と云ひ、建築の様子と云ひ、實に善盡し美盡し
て居ると言ふより外は無い。間も無くして、一人の可愛らしい顔つきの黒奴が山海の珍味を載せた食卓
を運んで来た。更に一人の奴隷は、うまい酒を運んで来た。二人の客が食事を終ると、今度は水晶のや
うに美しい水を七八分に盛つた純金の大きな碗が運ばれた。客に手を洗はせる爲めである。次には矢張
り純金の壺が来た、其中には伽羅木が惜氣も無く焚かれてある。これは客の髪や衣服に香を籠めさせる
爲めだ。香水は無論来た。しかもダイヤモンドやルビイを鑲めた立派な器の中へ入つて来た。此香水を
頭や顔に振りかけるのが贅澤な人たちの習慣なのである。

彼等が全身佳い匂ひでぶん／＼しながら辛と腰を下さうとすると、彼等を案内した女奴隷は「此方
へ」と言つて彼等を妙な建築の廣間に案内した。それは天井が圓頂閣になつてゐる部屋であつた。廣
い／＼部屋の中に、百本ばかりの大理石の柱が、朝日に輝やく大木柱の如くに光つて立つてゐる。其柱
の底の方には悉く鳥や獸の彫刻物が金色を放つて飾りつけてある。敷物の地は金襴で、そこへ赤と白と
の薔薇の花の模様を形よく置いてある。天井にはアラビヤ風の繪が描いてある。其繪が又最も見る人の
目を喜ばせるやうに出来てゐる。エブン、テエハアと若い公爵は感心して周圍を胸はした。
其時、奥の方からシエムセルニハアの最も信頼して居る女が十人の黒奴の女を従がへて現はれた。さ

うして、其十人の奴隷は一脚の純銀製の玉座様の物を總が、りで重さうに運んで来て、二人の客の前の少し離れた所に置いた。黒奴の女が退ぞいて行くと、今度は二十人の美しい婦人が、一様の服装をして二列になつて、各自手にした樂器を鳴らしながら歌を唱つてやつて来て、玉座の兩側に別れて立つた。すると其後から十人の黒い美人と同じく十人の白い美人が矢張り盛装して二列になつて進み、暫く途中で足を止めた。其様子がシエムセルニハアの出現を待てるもの、如くに見えた。最後にシエムセルニハアが出て来た。さうして多勢の女どもの真中に立つた。

シエムセルニハアが他の者に優れて目に附くのは、無論其比類無き容色の故もあるが、一つは其一風變つたマントルを着用して居るからである。マントルは美事な空色の毛織物に金糸で縫をしたもので、肩へ緊かりと掛けてあつた。マントルの下に着た衣裳の如何に善美を盡したものであるかは多く説明を要せぬであらう。

シエムセルニハアの身に附けたダイヤモンド、ルビー、眞珠などの類は、決して数が多くはなかつたけれど、持主の趣味に合ふやうに飾られてあつたし、何れも世に稀なる逸品ばかりであつたから、價格を積つたら大したものであらう。シエムセルニハアは徐むろに前の方へと進んだ——丁度太陽が簇がる雲を破つて其軌道を進むが如くに進んだ。さうして彼女の爲に設けられた純銀の玉座の上に腰を下して、軽く頭を前に下げて二人の客に挨拶したが、其需ひを持った美しい眼は、若い公爵の顔に注がれた。彼女は公爵の顔を見れば見る程そこに表はれた色によつて、公爵が彼女を愛して居る證據を認めて、彼女は世界一の幸福な女だと思つた。

やをら彼女は公爵の顔から眼を離して、樂器を持つて入つて来た二十人の美人連の方へと顔を向け、

もつと近くへ来るやうに命じた。そこで、椅子は黒奴の手によつて前へと運ばれ、シエムセルニハアを中心として、二人の客の前に半圓を描いて、婦人連の席が出来上つた。

シエムセルニハアは、一人の婦人に歌へと暗號をした。其婦人は命令に従がひ、稍々暫らく琵琶を弾じてから、朗らかな美しい聲を張り上げて歌つた。歌の意味は、戀人同志互に限りも無く相愛する時は、假令其身は二つに別れてゐても心は一つに溶けて了ふ。さうして、何かの事情で間を擱かれ、互の願が妨げられる時は、たゞ泣きの涙で味氣ない遺瀨ない心を獨り悲しむばかりである、たゞ涙の目で語り合ふばかりである……と云ふやうなものであつた。

歌が終わると、シエムセルニハアはベルシヤの公爵に顔を向けて、其眼容や手振で以て今の歌は彼女と公爵との間に丁度適合するものだと言ふ事を語り、次に唇を開いた。

「公爵！ あなたが私を愛して下さると云ふ事は私よく承知して居ります。そして、あなたの愛は何れ程強いかは存じませんが、私があなたを愛する強さも決して劣りはしないと信じて居ります。然し、いくら私共が互に堅く相愛して居るからと言つて、圓滿な嬉しい關係が結ばれるものと早合點してはなりません。随分邪魔もありませう、苦勞もありませう、悲しみもありませう。」

公爵は喜びに激するやうな聲で答へた。
「いや、假令どんな障害が起らうとも、私は此戀を續ける勇氣と覺悟とを持つて居ります。若し、あなたが少しでも私の覺悟を御疑がひになるとすれば、失禮ながらあなたは私と云ふ男を見損つた事になりませう。障害が何です、苦痛が何です、悲哀が何です？ 假令どんな事が起つたつて、私があなたを愛すると云ふ此赤心を止める事が出来るものですか。さうですとも、決して出来ませんです。」

公爵は餘り情に激して、我れ知らずハラハラと涙を落した。それを見ると、シエムセルニハアも泣かないわけには行かなかつた。

其時エブン、テエハアは初めて唇を開く機会を捉へた。

「どうしたもんです？ そんなに泣いてばかり居たつて仕方が無いぢやありませんか。何う云ふ事情でそんなに悲しんでゐらつしやるのか私には合點が行きません。然し、私どもは先刻から随分長い時間御邪魔をしたやうですから、もう歸らなきや叶せんでせう。」

と言ふと、シエムセルニハアは如何にも怨めしげに、

「まあ！ 何と云ふ残酷な事を仰しやるんでせう！ あなたは私の泣くわけを能く御存知の筈ではありませんか？ あなたは私の不幸な境遇に少とも同情して下さらないんですか？」

と言つたが、直ぐに又エブン、テエハアが彼如事を言つたのは、たゞ友情から案じて忠告して呉れたに過ぎないと思ひ返したので、決してかれの言葉を悪くは取らなかつた。さうして彼女は其一番信用して居る召使に何か暗號をすると、其女は直ぐに部屋から出て行つて、間もなく、小さい純銀のテエブルの上に美しい果實を盛つた籠を載せて現はれた。さうして其テエブルを主人と公爵との間に置いた。シエムセルニハアは其果實の中から最も好さうなのを二つ三つ選んで公爵の方へ差出し、どうぞ彼女の爲めと思つて食べて呉れと言ふと、公爵は大喜びでそれを受けて、彼女の手の觸つた所からムシヤク食つた。さうして、返禮に今度は公爵自身籠の中から選んでシエムセルニハアに差出した。彼女も亦非常の喜びで、公爵の手の觸つた所から食べ始めた。シエムセルニハアは又エブン、テエハアにも言葉をかけて、彼等と一緒に食べるやうに勧めた。エブン、テエハアは既に長い時間を王宮の中に過した事が

懸念で、もう一刻も早く自分の家へ歸り度いと思つてゐたので、辛と義理で一つだけ食べた。果實のテエブルが傍へ掛けられると、女中たちは大きな銀の盆に大きな金の器を載せて、其中へ水を一ぱい入れて持つて來た。主客三人は其水の中へ一緒に手を突込んで奇麗に洗つた。

それが終ると、三人の女中が手に金の盆を持ち、其盆の上に芳醇無比の葡萄酒を入れた水晶のコップを載せて來て、主客三人の前に置いた。するとシエムセルニハアは先づ其前に置かれたコップを取上げ、小高く宙に捧げたまゝ、或る情の籠つた歌を好い聲で唱つた。樂器を手にした婦人連の一人は琵琶を弾じて彼女に合はせた。歌が終ると、シエムセルニハアは酒をぐツと飲み干して、他のコップを取上げ、それを公爵に渡した。さうして、今自分は公爵に對する戀を祝して飲んだのだから、公爵も彼女の爲に、彼女に對する戀を祝して飲んで呉れと願つた。公爵はもう一嬉しさに有頂天となつた様子で、それを飲む前に彼女と同じく宙に捧げて、やはり情の籠つた歌を唱つた。透かさず、婦人連の一人は樂器を取上げてそれに合はせた。最後にシエムセルニハアは、残つたコップを取上げてエブン、テエハアにすゝめた。かれは歌なんか唱ふどころの騒ぎではない、たゞ彼女の親切を謝したばかりである。シエムセルニハアは未だ別れやうと云ふ氣にはならぬ。彼女は今度樂器を持つて居る婦人連の一人の手から琵琶を取上げ、自分で弾きながら熱心に唱つた。どうも情熱の昂まり方が並外れで、傍で見ると、殆んど彼女は氣が違つたのではないかと思ふ位であつた。公爵は又公爵で、いつか知ら其席から立上つて、まるで魔法にかゝつた人のやうになつて、彼女の顔ばかり睨めてゐた。氣を揉むのはエブン、テエハアだけである。

琵琶の音益々冴えて情愈々激して來た其時、周章だしくシエムセルニハアの最も信用する女中が小走

りに其部屋へ入つて来て、主人に告げた。

「大變で御座います。侍従長のメスルウア様が二人の方を御連れになりまして、お玄關へおいでになりました。何でも陛下の御用で入らしたとの事で御座います。」

これを聞くや否やベルシヤの公爵と、エブン、テエハアは忽ち顔色を變へ、ふる／＼慄へ出した。シエムセルニハアも琵琶を捨て、思はず立上つたが、二人の客が非常に恐怖の色を表はして居るのを見ると、言葉をかけて更に心配は無用だと慰さめ、次に注進に來た女に向つて、今直ぐに此二人の客を何處かへ隠すから、其間メスルウアと其隨行員に何かうまく話を持ちかけて、急に奥へは入つて來ないやうに留めて呉れと命じた。女中は畏まつて直ぐ又部屋を出て行つた。

シエムセルニハアは二人の客を他の室へと隠してから、悠然たる態度で銀の玉座の上に腰を下し、國王の使者をこゝへ通せと命じた。侍従長メスルウア及び二人の侍従武官は二十人の黒奴を従がへて其場に現はれた。黒奴等は皆一様の美しい兵服を着用し、腰には幅四寸ばかりの金の帯を締め、いづれも劍を吊してゐた。彼等一同の者は、シエムセルニハアの姿を見るや否や、恭やしく敬禮した。

すると、シエムセルニハアは徐ろに玉座を下りて、先登に進んだ侍従長メスルウアのそばへと近寄り、如何なる用件を帯びて來たのであるかと尋ねた。

「國王陛下の勅命！ 陛下は、陛下の最愛なるシエムセルニハアを見ずしては獨り居の淋しさに堪へぬ。よつて今夜シエムセルニハアを訪問したいとの所望で、茲に侍従長メスルウアを送らるのである。」

侍従長が此言葉を終ると、シエムセルニハアは忽ち其身を床の上に平伏して、勅命謹んで拜承の意を示した。さうして、起き上ると斯う言つた。

「陛下に申上げて下さい。陛下の寵を忝なうする奴隷シエムセルニハアは、陛下に對し奉る充分の尊敬を以て勅命を拜します。御待受け致しまする。」

彼女は直に、最も信用する女中を呼んで、今陛下がおいでになるから、御待受けの準備をするやうにと命令した。さうして、國王の使者三人が退出すると、氣を揉みながら、二人の客の居る所へ急いで行つた。

たゞ一分時たりとも早く宅へ歸らう／＼と心がけてゐたエブン、テエハアは、敢なき別れを悲しむ二人の戀人を慰諭める役廻りにならなければならなかつた。其時、又もや例の忠實な女中は周章で駈けて來た。

「大變で御座いますよ、大變で御座いますよ。もう少しも御猶豫は出來ませんですよ。陛下の御先供が餘程近い所へ參りましたよ。陛下の御見えになるのも間が御座いませぬ。」

と叫び立てられて、シエムセルニハアも大きな聲を出した。

「大急ぎで、大急ぎで御客様を裏の廊下へ御案内お爲！ ほら、あの一方に庭が見えて一方にチグリス河の見える廊下さ！ そして、日が悉かり暮れたら、例の祕密の門から出してお上げ。さうすれば無事に御歸りになれるからね！」

と言ひながら彼女は緊かりとベルシヤの公爵を抱き締めて接吻をした。さうして、大急ぎで國王を迎へる爲に玄關の方へ行つた。戀人同志は、もう何一言話し合ふ暇が無かつたのである。

シエムセルニハアが玄關へ出て行く間に、例の忠實な女中は二人の客を指定された廊下へ案内して、此處にさへ居れば決して何も恐るゝ事はいらぬ。丁度よい刻限に又彼女が来るからと言ひ聞かせて、あつとをビシヤリと閉めた。

女中が行つて了ふと、何も心配する事は要らぬと言ひ聞かされたけれど何と無く気が揉めて不安でなないから、公爵とエブン、テエハアは、其廊下のやうな狭室のやうな所をぐるりと検査して非常に恐怖を感じた。と云ふものは、萬一此場所へ國王なり其家來なりが入つてきたとしたら、何處へも逃げる道が無いからである。

びくり／＼としながら尙ほも右左前後を胸はす途端に、庭に面した方の格子を透して、不意に燈火の光が見えたので、光は何處から来るかと思つて、彼等兩人は其格子に近づいて覗いた。と、それは無数の白蠟の松火の光だと云ふ事が解つた。丁度其時、國王が到着されたので、第一に百人ばかりの奴隷が手に手に松火を振り翳して、道を白日よりも明るく照らしてゐる。其次にも亦百人ばかりの若い奴隷が武装して多くの女官を護衛して居る。國王は最後に現はれた。侍従長と侍従職幹事との間に挟まつて現はれた。

シエムセルニハアは廿人の侍女を従がへて玄關の入口に待つてゐた。其廿人の侍女は何れも盛装を凝らし、耳には耳環、首には頸環、いづれもダイヤモンドの大きなので飾つて、手に手に樂器を携へ、愉快な曲を奏した。シエムセルニハアは、愈々國王の姿の現はれたのを見るや否や、忽ち地上に身を平伏して深く敬意を表した。

國王は美しいシエムセルニハアの顔を見るや否やホク／＼と笑みかたむけて、

「お立ち、お立ち、シエムセルニハア。」と優しく言つた。「さ、もつと此方へお寄り。余は自ら何故に長くお前と會はなんだかと考へて、自分で自分を腹立たしく思うて居るのぢや。」

と彼女の手を取つて、色々情深い様子を示しつ、前へと進み、設けの席としてあつた純銀の玉座の上に腰かけた。シエムセルニハアは徐かに王の手を離れて直ぐ王の前の席に着いた。廿人の侍女は彼等兩人をぐるりと圍んで、圓を描いて着席し、松火を持つた若い奴隷等は、遠く離れて立つた。

國王は周圍を胸はしなながら、其行列の者が運んで來た松火の外に、庭一面に美しくイルミネエシヨンの出來て居るのを見て非常に満足の體であつたが、やがて眼が例の圓頂閣の廣間へ移ると、そこは悉かり閉ぢられて、他の各室の陽氣に反して頗る陰氣に沈んで見えたので妙に思つた。それで、どうして彼の廣間だけを其儘にしてあるのかと尋ねた。すると、王の言葉が未だ終らぬ中に、其廣間の窓が一齊にパツと開いて、内部も外側も美しい燈火の光で目も彩りに照り映えたのである。

「シエムセルニハア！」と國王は感嘆の聲を高く上げた。「あ、實に、お前は夜を晝のやうにする力を有つて居るよ。」

話かはつて、庭の横手の奥にある廊下に入れられたベルシャの公爵とエブン、テエハアは何うしたかと云ふと、エブン、テエハアは其廊下の格子の隙間から、國王着御の光景、イルミネエシヨンの美しさを見て、すっかり感心して了つた。

「あゝ立派なものだ。私はもう好い加減の年齢になつて居るので、これまでは随分色々な催しも見たが、今夜のやうな美しいのを見た事は無い。實にどうも恐れ入つたものだ。」

公爵の方は、エブン、テエハアが感心したやうな物に對しては少しも興味を有たなかつた。かれはシ

エムセルニハアの事より外には何も考へず、又何も目には入らなかつたのだ。

國王の方では此時樂器を携へた婦人の一人に命じて、其琵琶を弾かせ、歌を唱はせた。歌は甚だ情の籠つた優しいもので、何と無く物の哀れを思はせるやうなものであつた。それを聞くと、シエムセルニハアは、其歌の意味が彼女の愛する公爵アリイ、エブン、ベカアに當て適るやうに思ひ、戀しい人が目の前に居ないと云ふ事を傍なくも思つた。嘈々たる琵琶の音が益々冴え、歌の聲に愈々情が昂まるに伴れ、彼女はだん／＼堪らなく胸を掻き捲られるやうな氣がして、遂に氣が遠くなり、國王の前に在る事も打忘れてバタリと後方へ倒れて了つた。満座の人々は何うした事かと呆氣に取られた。其ひまに四五人の侍女は彼女の身體を圓頂閣の廣間へと運び入れた。

廊下の格子から遙かに此様子を見たエブン、テエカアは驚ろいて公爵の方へ振向くと、姿が見えない。オヤと思つて、更に氣を沈靜けてよく見ると、さア大變、公爵は床へ倒れて殆んど死んだ者のやうになつて居るのだ。エブン、テエカアは實に膽を潰して、一生懸命に公爵の呼吸を吸回させやうと焦つたが駄目だ。困つたな、困つたなと氣をヤキモキ揉んで居る所へ、不意に扉を開けて、シエムセルニハアの忠實な女中が呼吸せき切つて入つて來て、

「早くお出なさいまし、早くお出なさいまし！ 秘密の門から出して上げますから、今大變な騒ぎが始まつて、大混雜なんで御座います！」と叫んだ。

「出たいにも出られないんです！」とエブン、テエカアは泣き聲を出した。「此處へ來て御覽なさい。ベルシヤの公爵も倒れちまつたんです。」

女中は公爵の倒れて居るのを一瞥見るが早い直ぐに水を取りに行つた。さうして時を移さず引返して來た。

彼等二人が公爵の頭やら顔やら滅茶々に水を注いで、手を振つたり頸を振つたり胸を壓したりすると、漸やくかれは正氣に復つた。

「公爵！」とエブン、テエカアは言つた。「公爵！ 我々はもう少しでもグズ／＼して居ると命が無いのですよ。だから、氣を確かに、心丈夫に頼みますよ。我々はお互の命を助けなければならぬんですからね。」

と勵ましたが、何しろ公爵はもう弱り切つてゐて、獨りでは立上る事も出来ないのだ。で、エブン、テエカアと女中とは、公爵の左右から手を貸して助け起した。

彼等は女中に案内されて、テグリヌの大河に面する秘密の鐵の門から出た。さうして大河へつゞく小さな堀割の岸へ出た。岸に立留つた女中が二三度手を拍つと、何處に隠れてゐたか一艘の小舟が水上に現はれ、する／＼と流れるやうに彼等の方へと近寄つて來た。小舟には船頭が一人乗つてゐた。公爵と其親友は虎の腮を逃れた心地で、其小舟に乗るが早いか遠く漕出させた。女中は王宮へ歸つた。

遂に彼等は小舟を捨て、非常に困難しながら辛うじてエブン、テエカアの宅へ歸つた。ベルシヤの公爵は未だ元氣を回復せず、弱り切つて居るので、エブン、テエカアは家人に命じて、公爵の爲に一室を用意させ、そこへ彼を休ませた。さうして、稍や氣が沈靜いたところで、彼は家族一同の者に對つて、其日王宮に起つた出來事を委しく話し聞かせ、大なる危難から救つて呉れた神に對つて深く感謝した。別室に休ませて貰つてゐたベルシヤの公爵は、夜も大分更けて行きさうなのに氣が附いたので、主人

に別れを告げて歸らうと言ひ出したが、此忠實な親友は公爵の氣力がなほ頗る弱いのを認めて、其夜は遂に同家に一泊させ、翌日になつてから、かれを宅まで送り届けて、なほ何呉れと勵ましたり慰めたりした。さうして、家人が皆退出して、公爵の室に二人きりになると、公爵と其戀人との間には決して情を烈しくするやうな事があつてはならぬ、それに就いては自分は斯々云々の意見を持つて居ると云ふ事を説いて、情を限り無く恣まにすれば、終りには必ず公爵も亦シエムセルニハアも大なる不幸を見なければなるまい、と言つて聞かせた。然し、戀には盲目となるのが人間一般の習ひである。公爵は寂しげに笑つて、

「ありがたう。然し、其忠告を君が仰しやれば何でも無い事のやうだが、それに従はうとするのは私に取つて非常に難かしい事ですね。」

と言つた。エブン、テエハアは、折角の忠告も公爵に對して何の効力も與へなかつたと見た時に、別れの挨拶をして、困つたもんだと考へ、自分の宅へ歸つた。

エブン、テエハアが公爵家から歸つた時と殆んど同時に、シエムセルニハアの忠實な女中——前の晩彼等を逃がして呉れた其女中が訪ねて來た。見れば非常に怏いだ顔をして居るので、エブン、テエハアは決して嬉しい知らせを持つて來たのではあるまいと推察した。が、右に左彼女の主人シエムセルニハアは其後どんな様子であるかと尋ねてみた。

「何卒あなたの方から先へ御聞かせ下さいまし。」と彼女は言つた。「昨晚公爵があんな風になつてお歸りになりましたので、私は心配の爲續けを致して居りますんですの。」

そこで、エブン、テエハアは彼女が知り度いと思ふ事を一切話して聞かせた。彼女は禮を述べて斯う

言つた。

「公爵がそんなに御苦しみになつて、そして今も矢張り惱んでおらつしやるとしますと、私どもの主人も同様に御座いますわ。昨晚、私があなたの方を御見送り致してから廣間へ歸つて見ますと、主人は未だ正氣に回らないで居りましたの。……左様で御座いますね、ほんとに確かな氣に回りましたのは彼れ此れ夜中近くで御座いましたでせうよ……。陛下は太變御心配でして、或る御酒を御取寄せ遊ばして私どもの主人に力を附ける爲めに飲ませて下さいまして、それから御歸りになりましたので御座いますよ。陛下が御歸りになつて了ひますと、主人は直ぐに私を近くへ呼び寄せまして、熱心に根掘り葉掘りしてあなたの方御二人の事を聞きますから、御客様は御二人とも無事に秘密の門から御出になつて、もう餘程時間が経つたと申しますと、大分頭が軽くなつたやうな様子で御座いました。公爵が氣絶を遊ばした事に就ては私は何も話さないやうに注意致して居りました。又主人に同じ様な風に成られたら厄介で御座いますからね。ところが、私の用心も何にも成りませんでした。主人は直ぐに、斯う遠く公爵を思ふと云ふやうな顔容を致しまして「公爵！ 私があなたの本心を知る事が出来たら、私はあなたの御考へ通りにするばかりです。あなたは今度二度目にお會ひ申す時まで、晝も夜も嘸ぞ泣いてばかりおらつしやるでせうねえ」と哀れつばい聲で申しまして、途々二度目の氣絶を致しましたんですの。やがて正氣づいてから、私が色々に慰めますと、「あ、あ、もう何も言つてお呉れでない。お前が何を言つて呉れても役に立ちはない。私たちの悲しみは墓に入らない中は決して無くならないんだからね」なんて申しますんですもの、實に手の付けやうも御座いませぬの。それで、今朝になりまして、直ぐに私を呼びまして、あなたの所へ何がつてベルシャの公爵の事を御聞き申して來るやうにと命けましたので

御座います。」

「ベルシヤの公爵に就ては今私が申上げた通りです。ですから、御歸りになつたら御主人にね、公爵は其戀人に劣らず苦しんで待ち焦れて居りますから、早く何かの知らせを御送り下さい、と斯う申上げて下さい。」

と、エブン、テエハアは答へた。

翌日の朝、シエムセルニハアの最も信用する女中は又もやエブン、テエハアの宅を訪問して斯う言つた。

「昨日はどうも有り難う御座いました。主人からも宜しく御禮を申上げて呉れとの事で御座いました。そして、甚だ御迷惑でゐらつしやいませうが、此手紙をあなたから公爵へ差上げて頂だき度いと申しました。」

と、シエムセルニハアの手紙を出した。彼等の戀に對して多大の同情を寄せて居るエブン、テエハアは直ぐに其手紙を持つて、公爵の家へ出かけて行つた。公爵はそれを受取ると、もう嬉しくてくぐぐ堪らない。彼は其封筒の上に幾度も幾度も接吻して、それから封を開いて讀み下した。

シエムセルニハアからベルシヤの公爵へ送つた手紙

ふしつげながらあとさきも分きかぬる走り書きして戀しき君の御許にまゐらせ候。過ぐる日、日ごろの思ひかなひ候ひて親しくお目にかゝり、なつかしき御言葉を承はり、身も世も其まゝにと思ひ候ひしも、うたてき人のさまたげにより、はかなき御別れ致し申候ひてより此かた、他にはれと申してよすがも御座なく候まゝ、まことに物足らぬ心地せられ候へども、さてしもあるべき事ならねば、まこと

あなた様と親しく御目にかゝり御話致し居り候心構にて、文してまゐらせ候しだいに御座候。よろづ御察しを給はりたく願上げまゐらせ候。

忍耐はすべての悪と禍とを救ふ由世には傳へられ居り候へど、私に取りては、忍耐致せば致すほど悲しむと苦しむとを増すのみに御座候。假令あなたの御姿御顔は私の胸の記憶に、しかと深く刻まれたりとは申せ、私の眼は絶えずあなたの實體を拜し参らせん事を切に望み居り候。若し斯かる様にて久しく御目に懸かれず候はゞ、私の眼は遂に光りを失なひ、盲ひたる人の其れと同じやうに淺猿しき悲しきものと相成申すべく候。失禮ながら、あなたも私と同じ思ひに惱み居給ふならんと存じ上げ候が如何や？ さなり、君の御眼のやさしき光は、慥かに同じ心を語り候。もし私ども御互ひの同じ願ひが何ものかに妨げられて離れ離れとなるやうの事なくば、いかに君の爲に幸福なるべき、いかに私の爲に幸福なるべき。あゝ憎むべき呪ふべき障害！ もし其様なものが萬一私どもの間を隔つる事もあらば、そが君の御胸を苦しむるより遙かに烈しく私を悩ますべきは疑も無き事に御座候。さなり、生きながら柩にこもれるが如くにも候はむ。

君よ、私は心中さまでにもあらぬ事を情深げに聞こえ上ぐる者には候はず。まこと如何なる言葉を

用ひ如何なる文字をしるし候とも、此私の胸の中は萬が一をもあらはず能はざる事を深く御察し下され度願上げまゐらせ候。
私の眼は絶えず君の御姿と御文とのみを待ち侘びつゝ、常に涙のかわくひまも無く、心は獨り君のみを戀ひ、君を思ふ毎に、遺瀨なき心地致され申候。斯くていつまでもお目にかゝらぬ間は私は悲しみ悩み憂ひ寂しみの爲に此小さき胸を掻きむしらるゝばかりにて候。

若し私があなたから深く愛せられつゝある事を確かめ得ず候はゞ、必ずや身は此世に亡き者と相成り候ひしならんも、幸ひにして此嬉しき思ひは纔かに私の絶望を救ひ、露の命を取り留め申候。げに嬉しきは君の情なるかな。
語り給へ！ 君はいつも〜永久に私を愛し、假令いかなる事のありとも決して〜相離るゝ事無きを語り給へ。かしこ。
序でながら、私は深くエブン、テエハア氏に感謝致し候、私ども兩人は同氏に御世話になる事多く候へばに候。

ベルシヤの公爵は此手紙を一度讀んだゞけでは満足しなかつた。かれは餘り急いで目を通したと思つたので、二度目には緩りと讀みなほした。さうして、或時は深く溜息を吐き、或時は涙を流し、會心の文句に突當る度に嬉しくて堪らぬと云ふ風に聲を上げた。間もなく、公爵は三度目の讀みなほしを始め、其時エブン、テエハアは注意して、返辭を書いたら好からうと言つた。公爵も成る程さうだと思つたが、其時エブン、ペンを取る前に、戀人の手紙をエブン、テエハアの手に渡して、返辭を書く間其手紙を廣げて持つてゐてくれ、それを見ながら書けば一層よい返辭が出来るからと頼んだ。
やがて公爵は書き始めた。然し、情が迫つて來ると耐へ性もなく涙が溢れ出て、紙の上にボタ〜落ちるので、幾度も〜ペンを留めなければならなかつた。一泣き泣いてから又ペンを動かすのである。遂にかれは返辭を書き終つて、それをエブン、テエハアの手に渡した。
ベルシヤの公爵からシエムセルニハアへ送つた手紙――

復啓 おんみの手紙を受取たる時最も深き悲哀に囚はれ居たる小生は、おんみの手紙を元るに及びて言ふ可らざる喜悅の情の迸るを禁じ得ざりしにて候。實に貴書中の親實熱誠なる文言は、憐れなる小生の魂を閉ぢ籠めたる暗黒界に多くの光明を投げ入れて小生を救ひ、おんみが小生を愛する爲めに如何に悩みつゝあるかを示し、又おんみが能く小生の苦衷をも推察し居らるゝ事を語り候。まこと小生は彼の惨酷なる別れを致し候てより以來一瞬時も心安まる時とは有らざりしかど、今おんみの情深き手紙を得て辛うじて幾分かの安易を感じたる次第に御座候。小生は實に、貴書を受取候其刹那まで悲しき沈黙を續け來りしが、それを受取ると同時に唇を開く勇氣を生じ候。
まことに小生如き者に對して懸け給ふ御身の情の濃やかなる嬉しさは、われ如何なる感謝の辭を以て之に應ずべきかを辨する能はず、小生は貴書を受取るや否や、それを御身の厚情の證據と見なし、幾度か熱烈なる接吻を興へ、然る後繰返し〜通讀して、染々我が身の幸福なるを思ひ候。
御身は、小生が常に御身を愛するの情に變り無きを誓へと申され候が、御身は小生が斯くまでに熱烈なる而して完全なる愛情を御身に捧げつゝあるを危ぶみ給ふか？
誓つて言ふ、余は御身を愛すと。御身が小生の心の奥に點じ給ひし情火は、天下の何物よりも小生の光榮とし且つ幸福とする所にて、小生の一生を通じて斷じて變る事無き確信致候。
他に申上度事は山々あれど、茲に管々しくは書きつらねず、書中妮々の情を文字に屬するは、寧ろ親しき面晤の一言に若かず。小生は切に近く御身と相會するを希望し、御身が之を許可し給ふべきを信する者にて候。然らざれば死あるのみ。情激して意悉さず、御判讀を願上候。頓首。

エブン、テエハアは読み終つて公爵に返した。公爵は其れを封じて再びエブン、テエハアに渡し、何卒此手紙を直ぐにシエムセルニハアの所へ届けて呉れと頼んだ。

エブン、テエハアは公爵の返書をシエムセルニハアの信頼する女中に渡してから宅へ歸り、かれが不幸にして關係するやうになつた戀愛事件に就いて熱心に考へた。「あのシエムセルニハアと云ふ人が世間並の地位に在る婦人なら、おれも全力を盡して公爵と其戀人を幸福な身の上に爲るやうに骨を折るのだけれど、何分どうも國王の寵愛第一と云ふ婦人だから實に厄介だ。若し此事が國王に知れれば、先づ第一にシエムセルニハアは酷い目に會ふに定つて居るし、次には公爵の命が危ない。さうして俺までが其御相伴をしなけりや叶んのだから堪らない。どうしても俺は此危険な命がけの位置から脱するやうに工夫しなけりや不可。」かれは其日終日かう云ふ思案に耽つてゐる。さうして、翌日の朝、かれは公爵を訪問して、前には無益に言ひ争つた事を再び説いた。即ち、公爵は是非シエムセルニハアに傾き切つて居る心に打克つやうな覺悟をしたが好い。戀にばかり夢中になつて居るのは、自ら死地に急ぐと同じで、極めて愚な事であると思ふ。此戀愛關係は、一方の關係者——即ち國王が此上も無い有力な地位に在るだけに、一層危険の度が甚だしい。と云ふやうな事を口を酸くして説き立てた。

公爵は親友の此忠告を如何にも忍ぶに堪へないやうな様子で聽いた。然し、親友の言はうと思つた事だけは充分腹藏無く言はせてから、徐むろに斯う答へた。

「御忠告は有り難く承りました。然し、エブン、テエハア君！ シエムセルニハアがあんなに強く私を愛して居るのに、私が先方を愛する事を止められると御考へになりますか？ 先方の決心は、私を愛する爲めならば命も惜くないと言ふんです。それに對して私が何うして引込めませう？ いや、断じ

て中止する事なんかは出来ません。假令不幸にして私の身の上に如何なる禍害が振りかゝらうとも、私は最後の呼吸のつゞくまでシエムセルニハアを愛しなればなりません。」

エブン、テエハアは公爵の強情なのに驚いて、急いで別れて自分の家へ歸り、前からの記憶を喚起して、今後どう云ふ風にしたら好いかと云ふ事を重大に考へた。そこへ都合好くも、かれの親友の一人として數へられて居る寶石商が訪問して來たので、エブン、テエハアは、必ず秘密を嚴守すると云ふ誓言の下に、此日頃かれが非常に困つて居る問題を委しく説明して、何処したら好からうかと相談に及んだ。そこで彼等兩人色々と長談義の結果、エブン、テエハアは商賣上の急用が出来たとか何とか巧い口實を作つて、ブツツアの港へ旅行した方が好いと云ふ事になつた。さうすれば公爵と其戀人との爲めに累らはされる事も無いし、さうやつて居る中に何とかして全く彼れを今の厄介な境遇から救ふ事も出来るだらうと云ふのである。

次の日、エブン、テエハアが俄かに旅立つた後で、寶石商は公爵を訪問して、エブン、テエハアが已むを得ぬ急用の爲に旅行に出た事を告げて、斯う言つた。

「然し公爵閣下！ エブン、テエハアの代りに私が居りますから御心配は御無用です。閣下の爲めには名譽も生命も犠牲にする覺悟をして居りますんですから、其御考へで、萬事私に仰せ聞かれて差支は御座いませんです。私は閣下の秘密を絶対に守りませう。ですから閣下は丁度エブン、テエハアの代りに私を見つけたと思つてゐらつしやれば宜しいのです。」

これを聞いて、エブン、テエハアの不意の旅行に頗る悲觀した公爵は、やつと元氣を回復する事が出来た。

「ありがたう。さう聞いて私も損失を取返したやうな気がします。あなたが代りになつた下さるとは實にありがたい。私は、あなたの親切な御言葉を心から感謝します。」

と禮を述べた。
シエムセルニハアの方でも、例の女中が秘密の使者として公爵家に行き、公爵に會つて来た時に、急にエブン、テエハアが旅行に出た事や、其代りとして親切な寶石商が萬事兩方の間に立つて呉れる筈だと云ふ事を聞いて一々報告したので、非常に其商人の好意を嬉しがつて、買物が有ると云ふのを口實にシエムセルニハア自身其寶石商の家に訪問した。寶石商は萬事呑込顔で、非常に尊敬して彼女を迎へた。シエムセルニハアは、例の如く堂々たる様子で、然し包み切れぬ感謝の色を見せて、挨拶の言葉を述べた。

「私は、あなたがエブン、テエハアさんの代りに、公爵と私の間に立つて萬事取計らつてやらうと親切に仰しやつた言葉を聞くに直ぐに、是非自分であなただを訪問して直接に御禮の言葉を申し上げなければならぬと思つたのです。」

シエムセルニハアは尚ほ他に色々な口上を述べて寶石商に感謝の意を表し、それから王宮へ歸つて行つた。寶石商は彼女と別れるや否や直ぐに公爵家を訪問して、其日シエムセルニハアが訪ねて来た時の様子を委しく語り聞かせ、おしまひに斯う云ふ嬉しがらせを言つた。

「閣下に御満足をおさせ申さうとするには、好い機会を見て、シエムセルニハア様と直接に御自由に御話の出来るやうな工夫を致すより外に致し方も御座いませんから、私が一つ行つて見ませう……明日早速一工夫致して見ませう。閣下が王宮へ御出かけになると云ふ事は絶対に不可ん、此前の御経験で彼

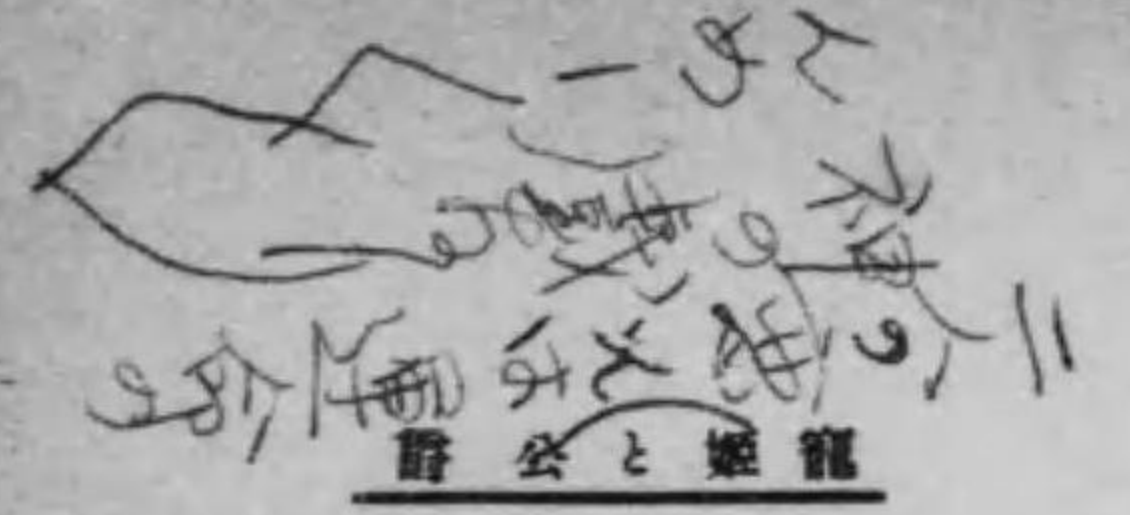
處の危険な事は既に御承知の通りですからね。私はあなたの方の會合を爲さるのにもつと適當な場所を存じて居ります。其處なら決して心配は有りませんです。はい。萬事私にお任せなすつて下さいまし。」

公爵は餘りの嬉しさに、寶石商に緊かりと抱きついた。
公爵が寶石商の親切に對して、かう云ふ謝意を表すも、寶石商も甚だ満足の體で其宅へ歸つた。すると其翌日、シエムセルニハアの女中がかれの宅を訪問した。かれは女中に對つて、前の日公爵と會見して、極近い中に戀人同志を逢はせると云ふ事を言つて喜ばせて来たと言つた。

「實はね、私の持家で今一軒あいてるのが有るんでね。其處で逢はせて上げやうと云ふ寸法でさア。なに、空家にや成つてるけど、直ぐに手入を爲りやア、誰でも入つて差支の無いやうに綺麗になりますよ。」

と言つて聞かせると、女中も嬉しさうに、
「左様で御座いますか。それでは私も何もう申上る事も御座いません。歸りまして主人に其事を申し上げませう。」

と言つて大急ぎに王宮へ引返したが、又直ぐにやつて来て、主人シエムセルニハアは大喜びで、萬事宜しく御願ひする、約束の時間には決して間違ひの無いやうに出かけるからと云ふ返事を齎らした。さうして、彼女は又財布を一つ取出して彼に渡し、これは今度の會見の時に、何か鳥渡した食事の用意をして貰ふ爲めに主人が遺したのであるから取つて呉れと言つた。寶石商はそれから直ぐに其女中を例の空家、即ち戀人を會見させる筈の家へ連れて行つた。彼女に能く覺えさせて置いて、其主人を案内する時に間諜つかないやうにと云ふ考へであつたのだ。さうして、女中が王宮へ歸ると、かれは直ぐに二三



の友人の家を訪ねて、金銀の皿小鉢や花毛氈や美しい蒲團や其他色々の家具を借り受けて来て、空家を立派に飾り立て、それが終ると今度は公爵の家を訪問した。さうして、前の日に話した計畫は愈々今夜實行するつもりで、既に準備は全く出来たから、これから徐々案内しやうと申出た。

シエムセルニハアと其身を受け容れる場所の準備が出来たと聞いた時の公爵の喜び、無論茲に述べらるまでもない。かれは直ぐに立派な上衣を着用して、供をも連れず、案内者の寶石商とたゞ二人きりで出かけた。寶石商は用心の上にも用心が大切だと云ふので、誰か知つた人に逢はないやうに、裏町を裏町をと心がけ、随分迂路までして、遂に例の家に案内した。

彼等が待ちくたびれない中にシエムセルニハアは到着した。彼女は晩の祈禱を済すと直ぐに、例の女中と、ほかに二人の召使を供に連れて、人目を忍んでやつて来たのである。戀人同志が顔と顔とを見合せた時の互の喜びがどんなであつたかは、到底形容の出来ない程であつた。彼等は互に相擁して、實に命がけの嬉しい言葉を取交した。其互の優しい可憐しい態度には、傍に居てゐた寶石商も、女中も、他の二人の召使も皆思はず泣かされた位であつた。然し、寶石商は此戀人二人の爲めに食事の用意をしなければならぬので、氣を取り直して涙を止め、かれ自身に持ち運んで来た御馳走を用意の食卓に載せて出した。戀人等は寶石商の取計らひを非常に喜んだが、會つた嬉しさで胸が充満で、碌々御馳走は咽喉を通らないのだ。直ぐに食事を終つて又兩人見飽かぬ顔を見合はせた。やがてシエムセルニハアは寶石商を顧みて、琵琶が無いだらうかと尋ねた。もし琵琶が無ければ何でもよい、樂器でありさへすれば好いから一つ持つて来ては呉れまいかと頼んだ。寶石商は如才の無い男で、彼女を樂しませるだけの用意はチャンとしてゐたのだから、早速琵琶を持出した。シエムセルニハアは直ぐにそれを取上げて自ら

弾き語りをはじめた。彼等兩人に取つて、此瞬間は極樂に居ると同じであらう。

かう云ふ風にシエムセルニハアが公爵を恍惚とさせて、其歌の文句に彼女の情を表はしつゝ、あつた時に、非常に騒がしい物音が聞こえた。さうして、寶石商が連れて来て居つた奴隷が、非常に恐怖の色を見せて駆け込んで来て、何者か知らんが多勢の者が今無理に門を開いて此家へ入つて来やうとして居ると告げた。寶石商は驚いた。かれは自身直接に其事の真相を知らうと思つて、シエムセルニハアと其戀人を残したまゝ、門の方へと出かけて行つた。かれが玄關から庭へ一步踏み出して見ると、月も無い暗い夜にも關はらず、槍と劔の光がキラ／＼と見えて、成程可なり多人数の者が押寄せて来たやうである。眞直にかれの方へと近づいて来るから、寶石商は殺されちや大變だと思つて壁にビタリと蝙蝠のやうに身を寄せて敵手を避けた。幸ひにも彼等はいかれば見つけないで、十人ばかりの者は彼のそばを通り過ぎて奥へと踏み込んで行つた。さア大變な事になつた。

寶石商はもうベルシャの公爵とシエムセルニハアに對して何等の助力を與へる事が出来ないと思つて、運の悪いのを悲しみながら、自分の命を救はんが爲めに、幸ひに近所に知人の家があつたので其家へ逃げ込んだ。かれは此思ひがけない暴動が國王の命令によつて行なはれたものと云ふ事を疑はなかつた。國王は慥かに今夜の集會を聞いて、あの兵士を派遣したのに相違無いと信じた。

それからの騒ぎと云ふものは甚かつた。何しろ近所の事でもあるので、破壊でも始まつたやうな物騒がしさが手に取るやうに聞こえる。其騒ぎは夜中まで續いた。やがて悉かり静かになつた頃、寶石商は、其逃げ込んだ家の主人から刀を一本借り受けて護身用とし、戀人の會見した家へ歸つて来た。さうしてビタ／＼しながら忍び足で庭へ忍び込むと、其處に一人の男がゐて、

「誰だ？そこへ入つて来たのは！」

と嗷鳴つた。聲を聞けば寶石商自身の奴隷であつた。

「オ、お前か。今まで何うしてゐたんだ？能くまアあの兵隊に捕まらずにゐたね。」

「あ、旦那様！」とかれは答へた。「私はあの騒ぎを聞くと直ぐに飛び出して、庭の隅に隠れちまひましたんです。だけど彼奴等は兵隊ぢや御座いませんでしたよ。泥棒なんですよ。へい、何でも、つい二三日前に此近所の家へ入つたと云ふ奴と同じ連中に違ひ御座いません。」

寶石商は、其奴隷の言葉は確からしいと思つた。で、家の内方へ入つて、二人の戀人を受取つた部屋を検査して見ると、かれが友人から借り受けて来て立派に飾りつけた家具食器の類はきれいに取られて了つて何一つ残つて居ない。此落実たる光景を見たかれは、實に遺瀾の無いやうな顔をして叫んだ。

「ほんとに困つたなア！泥棒に入られて、拜借の品物は皆取られて了ひましたと話をしたら友人は何と言ふだらう。おれは何と詫言つたら好いだらう。到底無くなつた品物を元の通りにして返すなんて事は出来ないし……加之、シエムセルニハアさんとベルシャの公爵は一體どうしたらう？」

主人思ひの奴隷は頻りに主人を慰めやうと努めた。

「なアに旦那様、二人の御客様は無事に御逃げになつたに相違御座いませんよ。あなたは、國王が決して今夜の會合を御存知無いと云ふ事を確かめておゐるんでせう。ですから大丈夫ですよ。旦那様の御友達品物が無くなつたのは是りや致し方が御座いませんよ。何しろ泥棒なんつてものは天災と同じ事で、何時やつて来るか解りませんが、誰だつて防ぐ事は出来ませんものね。なアに貴君、元通りにして上げなくつたつて、盗まれた品に相當するだけの價值ものを御返しになれば其れで宜しいぢや御座いませんか。」

寶石商も、成る程そんなもんだなと考へた。さうして、夜の明けるのを待つ間に、奴隷に命じて、表通りに面した扉の破されたのを修繕させ、それが終つてから連れ立つて、歸宅した。

夜が明けるや否や、寶石商の家へ多勢の強盜が押入つたと云ふ評判が市中一般に知れ渡つた。強盜は二十人ばかり隊を組んで来たと言ふ者もあれば、いや何でも三十人以上は居たさうだと云ふ者もあり大變な評判になつた。寶石商の友人や近所の人々は多勢見舞ひに来てかれの不幸を慰めた。かれは一々應接して人々の厚意を謝した。さうして、見舞の人の中で、誰一人としてシエムセルニハアと公爵の噂をする人の無いのを見て、彼等二人の事を知られなかつたのはセメテもの幸ひであると思つた。

其日も正午に近い頃、寶石商の使つて居る一人の奴隷が主人の所へ来て、これまで見た事も無い男の人が一人門の所へ来て、主人に會つて直接に話したいと言つて居る由を報告した。寶石商は一面識も無い人を座敷に通すのが厭やなので、立上つて門の所まで出かけて行つた。成る程これまで見も知らぬ男が立つてゐた。

「御主人、あなたは私を御存知ではないでせうが、私は能くあなたを御知り申して居ります。」と其男が口を切つた。「私は今日或る重要な事件に就いて貴君と祕密にお話をし度いと思つて参上しましたので。」

「それでは奥へ御通り下さいと云ふと、客は遮つた。

「いや、何しろ祕密の話ですから、此家の外にあなたの持家が有るなら、そこへ行つた方が好いかと思ひますがね……いや、寧ろ斯うして戴きませう。まことに御苦勞様ではありますが私と一緒に御出か

け下さらんか。秘密の話をすることに持つて来いと云ふ場所へ御案内を致しますから。」
乗りかけた船だ。とに角其話と云ふのを聞かない中は気が済まないと思つた寶石商は、其人の導く儘に從がつて行くと、其人はチグリス河の方へと彼を連れて行つた。やがて彼等は小さな船に乗つて、暫くは河の上を進んだ。さうして、上陸してから厭やに長い町を歩いた。寶石商は曾てそんな所へ行つた事が無いので、變な所へ連れて行く男だなど怪しみく從いて行つた。案内の男は方々の裏通りを歩き廻つてから、やつと或る門の前で足を留め、わけ無く開いて中へ入つた。さうして寶石商を先に歩かせ、彼は門を閉ち、頑丈な鐵のポルトを下して了つた。

やがて寶石商は一つの部屋に案内された。其部屋の中には十人の男が集まつてゐた。何れも寶石商の見た事も無い人ばかりだ。

あまり紳士らしい顔容もして居ない十人の男は、大して歓迎もせず寶石商を受けて、先づそこへ腰を下せと言つた。寶石商は思ひの外に遠い遠い所へ歩かせられて、息をセイ／＼切らしてゐたし、今又妙な男たちの中へ入つて非常に氣障れがしたので、到底立つては居れなかつたのである。

十人の男は彼等の大將——即ち寶石商を誘ひ出した男——を待つて一緒に食事を爲やうとしてゐたのだ。大將が服を着更へて出て来ると直ぐに食事に取つかつた。寶石商も一緒に食事するやうに勧められた。彼等一同が手を洗ふと、寶石商も亦一緒に洗はなければ叶なかつた。やがて食事が終ると、彼等の大將と見えた男は、寶石商に向つて、彼等を知つて居るか尋ねた。寶石商は、無論一面識も無いと答へて、第一こんな家へ来た事が無いのだと答へた。すると、向ふの男が言つた。
「昨晚の事件を話して御覽なさい、何事もすべて隠さすにね。」

かう聞かれて、寶石商は非常に驚きながら問ひ返した。

「ぢや、あなた方はもう充分に御存知なんですか？」

「其通り！ 私等は昨晚あなたの家にゐた好男子と別嬪の口から大抵聞いたんです。然し私等は更にあなたの口から直接に委しく聞き度いと思ふんです。」

わかつた、わかつた。此連中が昨晚の強盗だと云ふ事は説明までも無いと寶石商は氣が附いた。

「私はその若い男の人と美人の身の上に就いて大變心配して居るんですが……あの人たちは何う云ふ事に成りましたでせうか？」

「あの二人の事は心配御無用さ。マメデ居ますよ。」

寶石商はベルシヤの公爵とシエムセルニハアが無事であると云ふ事を聞くと、非常に喜ばしく思ひ且つ勇氣さへも出て来た。で、泥棒どもに向つて一層深く話を突込んで見やうと考へたので、わざと敬意を表するやうな口吻で斯う言つた。

「私は正直に申します……私はこれまでにあなた方と御知合になる名譽を持ちませんでした。何しろ諸君の御商賣が御商賣ですから。然し、私は、あなた方のやうな人たちが却つて義理が堅くて、一旦頼むと言はれたら他人の秘密などは死んでも洩らさぬと云ふ俠氣を持つておゐるの事を充分に推察して居りますし、加之、あなた方の勇氣と熱心は到底世間の者には眞似も出来ない事で、大冒險をやるには最も適した御人であると云ふ事を信じて居りますから、一つ諸君を男と見込んで、諸君が昨晚私の家で發見されたと云ふ二人の人と私の關係を悉かり打明けて了ひませう。どうぞ其積りで御聞き下さい。」
やがて徐むろに語り出した寶石商の話を聞くと、強盜連中眼を瞠り口を開いて驚いた。彼等は直ぐに

ベルシヤの公爵とシエムセルニハアの前へ行つて、一人々々其足元に平伏して最敬礼を行なひ、若し前から彼等兩人の高い身分を知つてゐたら、決して失禮な事を爲るのでは無かつた。其會合してゐた家の中へも踏み込むのでは無かつたと辯疏をして散々に詫言つた。それから彼等は寶石商に振向いて、彼等の盗んだ品物の大部分は昨晚の中に賣り飛ばして了つたので、其れを返して上げられないのは實に心から遺憾に思ふが何とも致し方が無いのだから何卒辛抱してくれ、幸ひ少しばかり残つて居る品は今直ぐに返すからと言つた。寶石商の喜びは非常であつた。思ひも寄らぬ儲け物をしたやうな氣になつた。強盜等は、なほ手元に残して置いた寶石商の品物を返した後、彼等三人を一緒にして四五人の者が送りに出た。其途中で、寶石商はシエムセルニハアの一番信用して居る女中と其他二名の侍女の姿が見えないので、妙に思つて、シエムセルニハアのそばへ近づいて、彼等三人の女中は何うしたのかと尋ねると、彼女は一切知らぬと答へた。たゞ寶石商の空家で琵琶を弾いて浮かれて居る中に、不意に泥棒に掠はれて、川を渡されて、何だか遠い所へ運ばれたと記憶して居るばかりで、其他の事は何も知らぬと言ふのだ。

さうかうする中に川の岸へ出たので、強盜等は三人の客を小舟に乗せた。間もなく、上陸すべき場所に到着して、三人の客が上陸を終り、丁度強盜等が小舟へ一擧ぐれて方向を變へた其時、騎馬巡査の馬の蹄が聞こえて来た。強盜等は一生懸命に漕ぎ出した。公爵、シエムセルニハア、寶石商の一行の前には忽ち騎馬巡査の一隊が現はれて、行手を塞いだ。さうして彼等三人は一體何者であるか、何故にこんな遅く、斯う云ふ邊僻な場所を通行するのかと詰問した。寶石商は一行を代表して答へた。

「我々は決しい怪しい者ではありません、我々は皆此市中では人に尊敬される身分の者なんです。我々を今小舟に乗せて来て、それ彼處へ漕いで行く連中は皆泥棒で、昨晚我々三人の集まつてゐた家へ押入り、色々の品を奪ひ取つたあげく我々を彼奴等の棲家へ掠つて行つたのです。さうして、又色々話し合ひの結果我々を放してくれる事になつて、加之、彼奴等が盗んで行つた品の一部分も返して呉れたのです。」

と言ひながら、二三枚の皿を出して見せた。

然し、騎馬巡査の隊長とも見える男は此返事のみでは満足せず、すつと彼等の方へ近寄つて来て、じいツと睨めてから斯う言つた。

「正直に言はんけりや不可！一體其婦人は何者か、アーン？」

此詰問は非常に三人を困らせた。彼等は誰も急には返事が出来なかつた。然し、隊長は愈々烈しく迫るし、いつまでも隠し切れるわけにはゆかぬと思つたので、遂にシエムセルニハア自身、隊長を少し離れた所へ連れて行つて、私は斯々の身分の者であると説明した。それを聞かぬや否や隊長は大層驚ろいた風で、急いで馬から下りて、深く敬意を表し、直ぐに部下の者に向つて、ボートを二艘持つて来いと命じた。

やがてボートが来ると、隊長は其一艘にはシエムセルニハア一人を入れ、他の一艘に公爵と寶石商を入れ、部下の者を二人づゝ、各のボートに乗り込ませて、何處でも今乗込んだ人の行き度いと云ふ所へやれと命じた。

二艘のボートは別々の方向に動き出した。

公爵は成べく巡查等に迷惑をかけまい、手数をかけまいと云ふ考へから、距離の近い自分の家に寶石商を上陸させやうと思つたので、町の名を言つて目ざす家を教へた。ところが、巡查等は其教へられた方向へと漕いで行く途中、急に王宮の前へ舟を着けたので、公爵と寶石商は膽を潰して了つた。これは必と王宮の衛兵に引渡されるのに相違無い。さうして、翌朝國王の前へ引出されるのに違ひ無いと思つて既に半分死んだやうな心地になつた。

然し、巡查の考へは然うではなかつた。彼等は前以て隊長から命令を受けてゐたので、先づ公爵と寶石商とを上陸させて衛兵詰所へ連れて行き、事情を話した。すると衛兵の一士官は直ぐに二人の兵士に命じて彼等を護衛させ、道中無事に公爵の家まで送らせた。つまり陸上を行かせた方が好いと云ふ考へなのであつた。

やがて公爵の家へ着くと、二人とも餘り疲勞れて身體を動かすのが大儀になつてゐた。公爵は又、疲勞の外に、其戀人と兩人が非常に辛い目に會つた事を考へ、今後再び相見ると云ふ機會は全く無くなつたやうに思つて、うゝんと卒倒した。さア、公爵家の召使どもの大部分は公爵の介抱に群集る、其残り連中は寶石商のそばへ行つて、彼等の主人の身の上に向う云ふ變事が起つたのか委しく説明して呉れと迫る。いやもう大變な騒ぎとなつた。

寶石商は召使の人々に向つて、それは、非常な事件が起つたのであるけれど、今は説明すべき時では無い、先づそれよりも御主人を早く正氣に回さなければ不可と忠告した。間もなく公爵は呼吸を吹き返した。さうして、今まで非常に熱心に事件の真相を聴きたがつて、寶石商に迫つてゐた奉公人等は、主人が正氣に回つたと見ると、失禮にならないやうに遠い所へ退ぞいて了つた。正氣に回つたと言つても公爵は格別の弱り方なので、寶石商は一夜をそこに明かして、翌朝自分の宅へ歸つて行つた。

何しろえらい目に會つて來たので、寶石商は疲勞と恐怖に悉く囚はれ、それから二日間と云ふものは何處へも出ずに閉ぢ籠り、種々の親友の外はすべて來訪の客を謝絶した。

三日目になつて、かれは何時までも家の中にはかり居ては却つて氣が怏いで不可かも知れない、少しは外へ出て新しい空氣でも呼吸しなければ、身體に力が出ないと考へたので、暫く郊外を散歩したり美しい町を見たりして歸つた。ところが其歸りの途中で、かれは一人の婦人が何か自分に合圖のやうな手容をして居るのを見つけた。

ハテナと思つて熟く見ると、どう成つたかと彼が心配してゐた、シエムセルニハアに最も信用されて居る婦人であつた。オヤと思つて直ぐに聲を懸けやうとしたが、待てよ、こんな往來で随分人通りもある所で迂濶聲は懸けられない。若し、ひよつとした工合で、彼がシエムセルニハアと關係の有る事でも推量された日には取返しが付かない。もつと人目の無い所へ行かねばならぬ。斯う考へたので、彼は、其女中に向つて、他の人には知れないやうに暗號をして見せて、それから徐ろに歩き出して、或る寺院の門を入つた。そこなら餘り人が來ないと云ふ事を彼は知つてゐたのである。彼に續いて、例の女中もわざと少し遅れて入つて來た。

彼等兩人は、強盜の災難に遭つて離れゝになつた後、かうして互に無事の顔を見合はせた事を非常に喜んだ。寶石商は早速女中に向つて、彼女と他の二人の侍女は何うして強盜の手から逃れたか、三四日シエムセルニハアと會はないが、其後の様子は何うであるかと尋ねると、彼女は委しく語り出した。「全く大變で御座いましたわね。私は、あの晩、強盜が入つたのを見ると、的切陛下の衛兵だとばか

り思つたんで御座いますよ。何しろ此方はあゝいふ秘密を行つて居るんで御座いますからね。これは必ず主人の一件を陛下の御耳に入れた者があつて、陛下は非常の御立腹で、私ども主人は無論の事、公爵も其他の者もみんな殺して了はうと云ふ御考へに相違無い、と斯う存じましたからね、女のくせに少し亂暴でしたけれど、何しろ命がけと云ふ場合なものですから直ぐにあの御宅の廂へ上りましたんで。丁度強盗の連中がドヤ／＼と集會の部屋へ押込みました時に、二人の侍女の人も好い都合に私の後を追つて廂へ上つて参りました。さアそれから一生懸命です、三人で手を引き合ふやら腰を押すやら致しましてね、廂から廂へと軒傳ひに漸次参りまして、遂々或る親切な人たちの住んでる家へ着きましたんで。その人たちは大變氣の毒がつて我々三人をよく慰はつて呉れましたのでね、其晩は遂々其處へ御厄介になつて了ひました。そして、翌る朝、其處の人たちに熱く御禮を申しまして、前の晩押込の連中に顔を見られなかつたのを幸ひにして、それでも少しは微懼々々しながら王宮へ歸りました。唯だ何處へ行つてたんだ位の叱言で大した文句も言はれませんでした。然し、主人の姿が見えないのでみんな大騒ぎなんです。陛下に知れちやア大變ですから態と主人は居るやうな風に見せて居る其苦勞つたら大抵ぢやありませんわね。私は其日終日殆んど壽命も縮む程の思ひをして心配しながら待つておりましたが、それでも主人は歸つて来ませんから、到底忍耐が出来なくなつて、夜になると、例の廂傳ひの御仲間の二人を連れて、此前に貴君と公爵とを密そりと出してお上りました例の秘密の門から出ましたの。主人を探さうと決心を致しましたのです。御承知の通りあの門を出ますと直ぐにチグリス河へ續く堀割が御座います。いづれ主人が歸ると致しますと、表から歸る氣遣ひは御座いませぬ、必ず此裏の堀からボオトで来るに相違無いと思つて、岸を彼方此方とぶら／＼しながら待つて居りました

の。さうすると、あれは……もう夜中に近い頃で御座いましたね、向ふから一艘のボオトがやつて参りました。透すやうにして見ますと、男の人が二人で漕いで、女が一人舟の中に倒れて居りますんですね。オヤと思ふ中にボオトはすう／＼と岸へ着いて、男の人は二人が、りで其倒れてゐた女を立てせやうとしましたから、私は直に、あゝ主人だなと悟りました。で、私は直にボオトのそばへ参りまして、主人の上陸するのを助けてやりました。私が手を貸さなければ倒れて了ひますんですもの。主人は王宮へ入ると直ぐに私に叫びやきまして、千圓入の財布を持つて来て、供をして来た巡査にやつて呉れと申しますから、私は同行の二人の侍女に主人の介抱をするやうに頼んで、二人の巡査には鳥渡待つて居るやうにと言つて、直ぐに千圓入の財布を取つて来て巡査にやり、秘密の門を閉ぢて了ひました。それから主人を部屋に連れ込みまして、直ぐに服を脱がせて寢床に入れましたが、間もなく主人は大變に氣分が悪くなつて大層苦しみますと、其晩終夜私たちは今にも主人が死ぬか／＼と絶望した位で御座いました。でも翌日になりますと、幸福と大分に氣分も回復しました様子で、物を言ふ元氣も出て参りましたから、私は主人が何うしてあの盗人の手から逃れる事が出来たかと尋ねました。あの押込の連中が強盗だつたと云ふ事は、其前の日の内に解りました。市中では大した評判だつたさうぢや御座いせんか？ それでね、主人は斯う言つて説明致しましたの「ではお前に委しく言つて聞かせるが、私は最初、あの強盗等が手に刀を持つて入つて来た時には、眞實にもう命は無いものと覺悟をしたんだよ。だけど死ぬと云ふ事は那麽に恐ろしくも殘念でもなかつた、公爵と一緒に死ぬのなら命は惜しく無いと思つたのだよ。ところが盗賊等は私等を殺さうとはせず、其中の二人の者が親分らしい男の命令によつて私等を逃げないやうに監視してね、外の者はみんな家中の家財道具を掠つてね、もう別に目星い物も無いと見る

と、私等を一緒に引張つて出かけたの。仕方が無いから其連中の言ふが儘に賊の棲家へ行くとな、又新しい心配な事が一つ出来たの。奴等がぐるツと私たち二人を取巻いてね、じろく、私の顔や服なんかを見て、大抵私の身分を察したらしいんだね。判然とした事は解らなくつても大方見當が附いたらしいんでね。で、私に對つて、それでも割に丁寧な言葉で、あなたは何う云ふ身分の何と仰しやる方ですかつて尋ねたの。私の身分なんか迂闊言つた日には、什麼大變な事が起るか知れないと思つたから、私は黙つて居ると、今度は公爵に對つて同じ事を尋ねたがね、公爵は又私よりも一層冷淡な風で、テンデ相手に成さらずに、たゞ用があつて寶石商の家を訪問したのだと仰しやつただけさ。さうすると、賊の親分らしい男が、私はあの寶石商を知つてゐます、都合に依つては明朝此處へ連れて來るかも知れませんが、然し、寶石商の來る迄何も尋ねないと思つたら大違ひですよ。是非あなたの方の身分と姓名とを知る必要があります、いや、知らずには置きませんと、それやア執拗ね何度も尋ねたけれど、私たちは二人とも何も言はなかつたんだよ。すると、急に責め立て、も駄目だと思つたか諦らめた風で、私たちが別別の部屋に幽閉て了つたのさ。ほんとに其時の残念さつたら有りやしない。だけど是非公爵と一つの部屋に入れて呉れなんぞ言はうもんなら、直ぐに私たちの關係が知れちまふしね。そりやア辛い思ひをし辛抱したんだよ。翌朝になるとね、前の晩賊の親分が言つた通り寶石商の主人を連れて來たの。すると寶石商は、私たちの考とは全く反對に、却つて私たちの爲めだと思つて悉かり私たちの身分も名前も正直に打明けたんだとさ。するとね、賊は大變に氣の毒がつて、直ぐに私の前へ來てベコ／＼御辭儀をしてね、色んな辯解をしちやア謝まるのさ。きつと別の部屋に幽閉た公爵の前へ行つても同じ様に御詫びしたらうと思ふよ。賊でも存外に禮儀を心得てるもんだわね。それからね、急に私たちを無事に送り

歸さなければ濟まないよと云ふ事になつて、賊は公爵と寶石商と私と、此三人をチグリス河の岸へ案内して、そこからボートに乗せて、河を渡して呉れたの。ところが私たちが上陸するや否や、今度は騎馬巡查の一隊に取捕まつてね、時刻が時刻だし風態が風態なもんだから、色々不審を打たれて實に困つたんだよ。で、仕方が無いからね、私は其巡查の隊長を鳥渡わきへ呼んで、私の名を打明けてね、實は昨夜よんどころ無い用があつて或る家を訪問して話をして居ると、そこへ不意に泥棒が亂入して來て、私たち迄も其棲家へ引張つて行かれたんだと話したらばね、隊長は驚いて、俄かに馬から下りて私に敬禮をするやら、ボートを二艘持つて來させるやら、非常に丁寧にして呉れて、私はじめ、二人の同伴者も何の事無しに許して呉れたんだよ。隊長はね、平生無暗には逢へない私と直接に會つて口を利いて、親切な取扱をする事が出來たのを非常に喜んでゐたらしいのさ。あ、きつと然うなんだよ。さうして一艘のボートに私と、それから二人の巡查を乗せたんでね、其巡查は無事に私を此處まで連れて來たの。だけど、公爵と寶石商は何う云ふ事になつたか、私にはまるで見當が附かないんだから心配で爲様が無いんだよ。あの河の岸で別れた後、公爵と寶石商にも別に何も禍は罹るまいとは思ふけれどね……そして私、公爵もきつと私と同じ様に、私の事はかり案じてゐらつしやると思ふの。あの寶石商には私たちが二人は非常に迷惑をかけたし、殊に色んな品物を賊に取られて困つておゐでだらうから、それは私が償上げて上げなければ濟まない。お前御苦勞だけれど、あの千圓入の財布を二つだけ持つて寶石商の家を訪ねてお呉れよ。そして、公爵は其後どんなにしてゐらつしやるか、其御様子も聞いて來ておくれよ。出してね、仰しやいましたんでね。實は、早く伺がふ筈でしたけれど色々又取込が有りまして、辛と今日出かけましたんですよ。ところが貴君は御不在と云ふ事でしたから、寧ろ公爵を御訪ねしやうかとも考

へてぶら／＼歩いてみましたの。よく／＼でなければ公爵家訪問は考へ物ですからね。ほんとに好いところで御目に懸りましたわ。主人から預かつて参りました二千圓は、烏渡懇意な友達に預けて来ましたから、貴君此處でお待ちになつておらして下さい、直ぐ取つて来ますから。」

と言つて、女中は大急ぎで駈け出して行つたが、又直ぐに歸つて来て、千圓入の財布を二つ彼れの手に渡し、これで以て品物の損失を償つて呉れと言つた。

「これちやアどうも餘計過ぎますよ。」と寶石商は言つた。「然し、思ひやりの深い、太ッ腹な、御親切な貴婦人から、其賤い僕に下されたものとして、決して遠慮せず頂戴する事に致しませう。どうぞ、御主人に仰しやつて下さい、私は御主人の御親切は決して永久忘れは致しませんと。」

斯う言つてから、彼は、シエムセルニハアの用の有る時には、何時でも彼女と會見しやうと云ふ事を確と約束した。

寶石商は大喜びで歸宅した。さうして、至る所の友人を満足させたばかりでなく、誰もあの晩、かれの空家にシエムセルニハアと公爵とが會合したと云ふ事實を知つた者は無いらしいので、大いに安心した。全く、かれの考へた通り、盜賊どもは能く秘密を守つて呉れたらしい。それも其筈である、下手に喋れば彼等の身の上が危ふくなるのだから。

其翌晩、寶石商は公爵家を訪問した。

すると、公爵家の奉公人等は、寶石商が主人と會見する前に、此數日間には實に主人の身も心も餘程調子が狂つて居るので、極めて僅かの食事をさせるのも大變な骨折である。時には、全く一口も口に入れない事があるので皆々閉口して居る、何とか工夫は有るまいかと相談した。そこで、寶石商は、公爵に

會ふや否や、ウンと忠告をして、遂に幾分かの食物を持つて来いと、召使の者に命令しなければならぬやうに説き伏せたのである。

公爵は、寶石商に「ヤイ／＼と喧しく言はれるので、已むを得ず、これまでよりは餘程多く食べたあとで、召使の者に、少し内密の話があるのだから、次室へ下がれと命令した。さうして、愈々寶石商と唯だ二人差向ひになると、彼は口を開いた。

「先日の晩は、色々澤山に奪られて、嘘を御迷惑でしたらう。私は、是非あなたに辨償して上げなければ濟まないと思つてゐるんです。……然し、其前に何がひ度いのは、シエムセルニハアですね。我々と別れてから何うしたでせう？もし幸ひに何か消息を御存知なら何卒教へて下さい！」

こゝで寶石商はシエムセルニハアの女中から聞いた通り、シエムセルニハアが無事に王宮へ歸つた事、歸つてからの煩悶、及び公爵の事を心配して慰問の使者を送つた事など、落も無く話した。

これを聞くと公爵は俄かに元氣づいて、不意に椅子から立上つた。まるで今までの病氣が偽のやうな勢ひになつた。さうして、大きな聲で奉公人等呼び立てながら、自分も衣服室へ出かけて行つて、立派な家具や皿小鉢などを幾包か造らせ、それを寶石商の宅へ持つて行くと命じた。寶石商は此親切な申出を聞くと、氣の遠くなるほどに喜んで、御厚意は有り難いけれども、既にシエムセルニハアから多過ぎる程の金を貰つて居る事でもあるし、先づ／＼贈り物は戴いたも同じ事にして見合せとして置いて貰はうと言つたが、公爵は承知しない。寶石商はたゞ感謝の辭を述ぶるの外は無かつた。それから直に寶石商は歸らうとしたが、公爵は強ひてかれを留めて、其夜の大部分を打解けた話に過ごした。愈々別れると云ふ時になると公爵は斯う言つた。

「どうぞ、シエムセルニハアに何か言つておやりになる序でがありましたら、私は假令死んでもシエムセルニハアを愛する、墓の中へ入つても愛すると云ふ事を言つてやつて下さい。どうぞ御忘れの無いやうにね。」

寶石商は歸宅の後、或は其晩の中にでもシエムセルニハアの所から使の者が来るかも知れないと心待ちにしてゐた。果して例の女中は夜遅くやつて来た、然し、眼には涙溢れて、容易ならぬ顔色をしてゐる。寶石商は驚いた。又何か變つた事が起つたのか、一體どうしたんだと、言葉せはしく尋ねた。彼女は、もう萬事駄目になつた、主人のシエムセルニハアをはじめ、公爵も、寶石商も、彼女自身も、一命は覺束無いと答へた。寶石商の胸はドキンとした。

「私が貴君と寺院で御別れしてから王宮へ歸ると丁度聞かされたんで御座いますかね。悲しい事になりましたよ。先夜あなたの空家で公爵と主人を會はせて下さいました時に、私の外に侍女が二人参つて居りましたでせう。あの中の一人が或る失策を致しましたのでね、主人が大層叱言を申したんです。すると、侍女の方でも丁度腹の蟲の居所でも悪るかつたと見えて、ひどく怒りましてね、何處かへ駆け出したと申すのですが、そりやアもう侍従長のメルウアさんの所へ行つて、腹立まされに主人の秘密を悉かり打明けたのに相違御座いませぬのですよ。侍従長は直ぐに其女を保護したんですもの。今日私が外へ出て参る時でした、陛下の所から近衛兵が廿人参りましてね、主人を引立て、行きました。私は貴君より外に相談する所も御座いませぬし、貴君に御目にかつて御話をしたら又何か好い考へも浮ぶかも知れないと存じまして御邪魔に出ました次第なのです。」

寶石商は此悲痛極まる報告に接した瞬間には、恰も落雷に感電した人のやうに、身動きもせず直立した。餘りの事に、悲しいの恐ろしいのと云ふ表情をする餘裕も無かつたのである。然し、かれは又直ぐに、今は一分時間もグヅ／＼しては居れぬ危急の場合であると氣が附いたので、大急ぎで公爵家へ駆けつけた。さうして、藏すにも藏し切れない難かしい苦しい苦しい表情をして言つた。

「公爵閣下！ 閣下は先づ充分に勇氣と忍耐を以て武装なさらなければ不可！ さうして最も恐ろしい言葉を受取る御覺悟を爲すつて下さい。」

公爵は答へた。

「簡単に言つて下さい！」と氣遣はしげに「何事ですか、早く言つて下さい！」

そこで、寶石商は、出来るだけ簡単に、且つ成るべく情を激せしめぬやうに注意して、例の女中から聞いた事一切を語り、

「閣下！ あなたの御身の上に破滅が來ると云ふ事は最初から御覺悟でしたせう、到底避ける事は出来ませんのです。だから、これから直ぐに何處かへ逃げるお準備を爲さいまし、一分時間でもグヅグヅしては居れませんよ。殊に閣下は、何人よりも國王の怒りに觸れてはならぬ方です。」

と言つた。

これを聴くや否や素より氣絶しやすい公爵は、悲哀と恐怖の烈しさに忽ち人事不省になりかけたが、「勇氣と忍耐を以て武装せよ」と言はれた言葉を思ひ出して、辛と氣絶だけは取留めた。さうして、此場合どうしたら好からうかと寶石商の忠告を求めた。寶石商だつて別に名案が有るわけでもない。ただ逃げるより外に爲様が無いと思つて居るばかりだ。それで、彼は公爵に對つて、直ぐに丈夫な馬に乗つて、夜の明けぬ中に切めてアンバアと云ふ所までは落ち延びねばなるまいと言つた。

「ですから、閣下は必要と御考への随行員や馬を御選びなすつて下さい。それから、私も御一緒に逃げる積りですから何卒其お積りでゐらして下さい。」
 公爵も其一法あるのみだと思つたので、直ぐに火の附くやうな命令を下して、出来るだけ不自由の無いやうに旅支度をさせた。さうして金銀寶玉の類を澤山持つて、寶石商と共にバグダッドから高飛びした。

逃げた。彼等は其晩終夜少しも休まずに逃げた。然し、夜明け近くになると、馬は無論の事に乗つた人々も、随分長い道程を飛んで大分疲れたし、食事も爲なければ叶ぬので、一休みする事にきめた。ところが、悪い時には悪い事が續きたがるもので、彼等が馬から下りると殆んど同時に、山賊の一隊に取囲まれた。馬に乗つて逃げ度いにも、山賊等は手に手に抜刀を振りかざして隙間も無く切りかけるのだから、到底馬に乗る餘裕が無い。已むを得ず一行の人々は皆同じく刀を抜いて勇ましく賊を防いだ。然し、賊は多勢だのに此方は小勢だし、賊は人殺しを殆んど商賣のやうにして居る猛悪な奴ばかりだのに、味方は貴族だの商人だの家扶だの給仕だのと云ふ連中だから、到底敵對の出来る筈が無い。見る／＼中に公爵の召使はすべて重傷を負うて倒れて了つたので、公爵と寶石商は既う賊の爲すが儘に任せるより外は無いと云ふ悲境に陥つた。然し、賊は決して彼等兩人を殺さうとは思つてゐないので、先づ馬と荷物とを悉く奪ひ、倒れて居る者の懐中物を掠め、公爵と寶石商の着てゐた服まで脱がせて殆んどシャツ一枚の裸にして了つた。

やがて山賊が意氣揚々として引上げて行つて了ふと、公爵は悄然として寶石商と顔を合はせた。
 「此さまは何うです？　こんな事なら寧ろバグダッドに居て、深よく死んだが優だつたかも知れない。」

公爵

「いや、さうちや御座いませぬよ公爵！　これは皆神様の思召ですよ。苦勞に苦勞を續けさせて神様が御試しになるんですから、我々は決して愚痴をこぼしてはなりません。」

「私はもう早く死んで了ひたい。シエムセルニハアが居ないと云ふのに、這麼事をして居た所で何の役にも立たない。あれが死んだと云ふのに、後に残つて私が生き延びなけりや叶んと云ふのは實に無意味な事だ。」

と公爵が駄々を捏るのを、寶石商は色々に慰藉めたり勵ましたりして、辛と一緒に歩き出した。すると、そんなに遠くも行かない中に一つの寺院があつて、幸ひに其門が開いてゐたので、彼等は中へ入つた。

太陽が顔を出し初めた頃、一人の男が其寺院へ参詣に来て、いざ歸らうとする時に、片隅に小さくなつて居る公爵と寶石商の姿を見つけて其そばへやつて来た。さうして、彼等に挨拶して、

「あなた方は此土地の御人ではありませんね？」
 と聲をかけた。

「さうです。我々は昨晩バグダッドから来る途中で多勢の山賊に襲撃されました、御覽の通りの見じめな風にされて了つたんです。往來を歩けば見つとも無くて爲様がありませんから、此寺院の中へ入つて一休みしながら今後の處置を考へて居る所ですが、差當り誰に頼つて救つて貰はうと云ふのも無くて、實に閉口して居ります。我々は此町に知人を持ちませんのでね。」

「それは／＼どうも御氣の毒な事です。もし私と一緒においでになる御考へなら私の家へ御連れ申し

て、私の力で出来るだけの事は致しませう。」

「どうも恐れ入ります。然し、こんな、殆んど裸同様の姿で實に失禮ですね。」

と言ひながら遂に二人は其人の家に厄介になる事になつた。

やがて先方の家に到着すると、其人は彼等二人の爲に、上等の衣類を一組づゝ出して着せたり、喉ぞ腹が空つて居たらうと云ふので、色々御馳走の支度をしたり、又、外に人が居ては遠慮があると不可と氣を利かして、自分は別室に行き、食事の品々は召使の者に運ばせたりした。で、彼等二人は深く主人の好意を感謝して食卓に對つたが、胸に一ぱい心配があるので頗る食は進まず、殊に公爵はホンの申譯に食べた位のものであつた。主人は日中に幾度か客の部屋へ見舞に來た。然し、夜になると、客の睡眠不足を察して、早くお寝みと言つて引上げた。ところが、主人は床へ入ると間もなく寶石商の氣魂しい聲に呼び立てられて客の部屋へ行つて見た。ペルシャの公爵が重なる苦勞と恐怖との爲に死にかゝつてゐたのである。非常に困難の様子をしながら急しく呼吸しつゝあつたのである。主人がそばへ行くと、公爵は蚊の啼くやうな聲を出した。

「もう駄目です。到底駄目です。然し、御主人、私は貴君が私の最後の言葉の證人になつて下さる事を喜びます。今となつて唯だ一つ残念に思ふのは、懐かしい母の腕に抱かれて死な、い事です。母は天地にも換へ難い程私を愛しました。私も常に母を愛しました。どうぞ母に、私が母に抱かれたいと云ふ事はばかり氣にかけてゐたと、御知らせ下さい。さうして、公爵家の當主たる私の名に依つて、私の屍體をバグダッドへ運ぶやうに、母に頼んで下さい。」

かう言つてから公爵は其家の主人の親切を厚く感謝して、たうとう死んで了つた。

公爵の死んだ翌日、丁度、人数の多い隊商がバグダッドへ行くと云ふので、寶石商は其仲間に入れて貰つて、無事にバグダッドへ到着した。かれは先づ自分の家へ寄つて服装を變へ、家族の者が色々事情を尋ねるのは打捨て、急いで公爵家を訪問し、驚ろく人々を制して、公爵の母に面談の用があると申入れた。やがて彼は一つの廣間に案内された。そこには公爵の母が四五人の侍女を左右にして彼を待つてゐた。寶石商の顔色には、悪い報告を持つて來たと云ふ事が顯然と讀まれた。

「大奥様！」と、かれは言つた。「神様はあなたを御恵みなさいませ。あなたの御身の上には神様の恵みの露が満遍無く振りかゝります。」

と切り出した。が、公爵の母は此言葉を聴くと同時に、事の様子を察した。かれが二の句を次ぐに先だつて、

「あゝ、あなたは仲の死んだ報告を持つて來て下さつたんですね！」

と言ふが早いか、わつとばかりに泣き伏して、聲高く嘔り上げた。侍女の者も皆同時に泣き出した。公爵の母は一しきり思ふさま泣いてから涙を收めた。いつまで泣いても居れぬ。今は大切な後始末をすべき時だと氣が附いたからである。さうして、寶石商に對つて、公爵の死ぬ前後の事を一々、どんな小さな事でも委細隠さずに話して呉れ、又、公爵が愈々最後の呼吸をする時に、何か特別に遺言と云つたやうなものを言ひはしなかつたかと尋ねた。寶石商は一々委しく答へた後で、遺言とも云ふべきものは、公爵が母に傳言して呉れと頼んだ二ヶ條で、其一是、母の手に抱かれずに遠く離れて死ぬのが實に残念であると云ふ事、其一是、屍體をバグダッドへ引取つて貰ひ度、公爵の名に依つて引取つて貰ひ度い事、此二ヶ條であると答へた。

そこで翌朝早く、公爵の母は、すべての侍女と、男の召使の大部分を供に連れて、件の屍體を受取る爲めに旅立ちしたのである。

寶石商は、公爵の母の旅立を見送つてから歸宅の途に就いた。道々、あんな美しい情を持つた愛すべき公爵が、春の花にも喩ふべき年齢で死んだと云ふ事を考へて、悲しい寂しい心地で歩いた。偶と、倦れた頭を上げて見ると、眼の前に一人の婦人が立つてゐた。外ならぬシエムセルニハアの最も信用して居る女中であつた。其顔を見ると彼は又新たな涙を誘はれて、外の人には氣の附かぬやうに暗號をすると共に自分の宅の方へと歩き出した。彼女は少し離れて後から従がつた。

家の奥へ入つて兩人對坐すると、先づ寶石商から唇を開いて、ベルシャの公爵の死んだ事を承知かと尋ねた。

「えッ？ マア……」と女中は驚いて溜息を吐いた。「あの御立派な御美しい公爵は御薨去になりましたか？ 御一人あとに残る事が御嫌なんですねえ。」

「ぢや、シエムセルニハア様も？」
と寶石商が思はず目を圓くすると、

「はい、遂々おかくれになりました。」と女中は涙をハラ／＼と落した。「御覽なさいまし、私が喪服を着て居りますのも、主人の爲めなんで御座います。死ぬ時の様子が随分變つて居りました。私は此前あなたに御目にかゝりました時に、國王の近衛兵が来て、主人を引立て、行つたと云ふ事は申し上げましたね。陛下は無論主人と公爵の關係を聽かされてゐらしたんです。それでは什麼にか烈しく御立腹だつたらうと貴君は御考へになりませうがね、然うぢや御座いませんでしたの。其事に對しては、陛下は幾

らか御自分を御責めになつたのですつて、私どもの主人を餘り自由にさせて置いたのが悪いと申すのでね。それだもんですから、陛下は至極おちついた御顔容で、國王らしい寛大な御様子で、手前どもの主人に斯う仰しやいましたんですつて「シエムセルニハアお前は平日余が如何にお前を深く愛して居るか云ふ事を思はなければ叶ないよ。余の愛情に就ては從來に數限りも無い程の證據を見せて居るではないか。余は決してお前に對する愛情は變へない、益々深く愛してやるばかりだ。これ、シエムセルニハア、お前は知つて居るか何うか、お前には敵があるよ、敵だからしてお前の爲めにならない悪口を色々に言ひ觸らして居る。然し、余は何事も聞かされても決して氣に懸けはせぬ、決して軽く信じてはせぬ。然し、随分不愉快は不愉快なのぢや。だから、這麼煩さい事を悉かり掃ひ去る爲めに、今夜は例の如く余を招いて、面白い話でもして聞かせて呉れ」つてね。此話は丁度私が貴君の御宅へ上つてゐた時にあつたのでしてね、私は王宮へ歸りましてから、其場に居合せたと云ふ人から委しく聞きました事なので。其晩、陛下は御機嫌なほとして、私どもの主人の居ります所へ入らつしやいました。賑やかな奏樂の裡に主人の部屋へ御通りになりますと直ぐに晚餐の用意が出来ました。陛下は益々好い御機嫌で、主人の手をお取りになつて、長椅子の上へ列んで腰かけさせやうと爲すつたんですが、主人は腰を下さうとする途端に、仰反つて倒れて了つたんです。然し、主人が氣の弱い女だと云ふ事は陛下も御存知ですから、あゝこれは餘り心配して氣が遠くなつたのだ、可哀さうに位な御考へであらつしやいりましたし、丁度その場に居合せました私ども、矢張り然うとばかり思ひましたのに、幾ら介抱しても呼吸を吹き返しませんでせう……主人は遂々其まゝに成つちまつたんで御座いますよ。陛下は非常の御歎きで、主人の顔の上にポタ／＼涙を御こぼしになり、すべての鳴物を御停止になりました、其部屋か

ら御出になりました。私は其晩御通夜を致しまして、次の朝は主人の屍體に湯灌を致しまして死装束を着せました。私はね、主人のからだを私の涙で熱く洗ひましたんですよ。陛下は、立派な御墓へ、主人を葬つて下さいましたの。あなたの御話を承れば、公爵の屍體もバグダッドへ迎へ取られると云ふ事で御座いますから、私は何とかして是非公爵も御一緒に主人の墓へ入れて頂だけるやうに精一ぱい盡力するつもりで居りますの。」

寶石商は、女中の決心を聴くと驚ろいた。

「無論あなたも何でせう？ 陛下がそれを御許しになるとは思つてゐないんでせう？」

「成る程、あなたは到底出来ない相談と御考へなんですね。だけど、決して那様に困難な事ではあるまいと思ひます。陛下が、私どもの主人に使はれてゐた奴隷は悉く解放なさいまして、夫々に恩給まで下さつたと云ふ事を申し上げたら、貴君も御考へが變りますでせうよ。陛下はね、主人の墓に注意して、日夜供物なんかを怠らないやうにと云ふ御考へで、私を其番人に爲さいますよ。御墓の出費から私の生活費まで月々幾らと定めて入るやうに下さいましたんですよ。さう云ふ御慈悲深い陛下で、殊に公爵との關係は滿更御存知無いのはありませんし、既う主人の死んだ後ですから、一つ墓へ二人の屍體を入れる事位は格別の御咎めも有るまいと存じますよ。」

寶石商はもう何も言はなかつた。
ベルシヤの公爵の遺骸がバグダッドから八九里ばかりの所へ來たと云ふ事が市中に知れ渡ると、平素公爵と親しく交はつてゐた人、及び其恩顧を受けてゐた連中は擧つて出迎へに行つた。さうして、盛んな行列を造つてバグダッドの入口まで歸つて來ると、其處の見附にはシエムセルニハアの墓となつた

婦人が待受けてゐて、公爵の母に挨拶の後、バグダッド市民全體の希望であるから、何卒公爵の屍體をシエムセルニハアの墓へ一緒に葬る事を許して呉れと頼んだ。公爵の母は無論喜んで之を承知した。
斯くて、公爵の遺骸はシエムセルニハアの墓に入る事になり、バグダッド全市の有らゆる階級の人が葬式に集まつたのである。

○ヌウレッツンと美しいベルシヤ人

これも矢張り教王ハラウン、アル、ラシッドの時代にあつた話であるが、ブツソラアの王にジネビと云ふ人があつた。ジネビ王は其領内の政治を行ふには唯だ一人の大臣と云ふのでは不足だと考へて、二人の大臣を置いた。此兩大臣の名はカ、ンにサウイであつた。

カ、ンと云ふ人は眞事に善良寛大温厚の長者で、何か事件があつて人と談判する時でも、丁寧に熱心に全力を盡すと云ふ風であつたから、宮中府中市中に到る所に評判が好く、常に人の賞め言葉の目的物になつてゐた。

サウイは全くカ、ンとは反對の人物で、陰險な意地悪だ。かれは誰に對しても大臣と云ふ身分を鼻にかけて傲慢不遜である、金はウンと持つて居る癖に非常の吝嗇家で、命を支へるより外には鑑一文も費すまいと云ふ遣り口だ。かう云ふ風だから誰だつて賞める好奇が有らう筈は無い。何處へ行つて誰に聞いて見ても此男の悪口を言はぬ者は無い。殊に此男が最も人民に憎まれるのは、善良温厚なカ、ンと仲が悪いと云ふ事であつた。
或る日、ジネビ王は政治上の相談を終つた後、二人の大臣と共に、其頃盛んに賣買されてゐた女奴隷

の事に就いて話してゐた。それらの女奴隷は、回教徒の家に於ては、殆んど法律を以て定められた妻と同じ地位に置かれるのが例であつたのだ。で、一人の大臣は、女奴隷と云ふものは優れた美しさを持つて居ればよい、美人でさへあれば其他の點は何も問ふ必要は無いと言つた。すると、もう一人の大臣は、いや然うではない、女奴隷に要求する第一の條件は愛嬌に富んで居る事だ、加之相當の教育もあり理解力もあり才智も無くては叶ぬ。さうして、若し出来る事なら多藝の女であり度いと言つた。國王は全く此後の意見に同感であつた。で、其意見を吐いた大臣カ、ンに對して、今述べたやうな總ての條件を具へた美人を一人買ふやうに命じた。

サウイは王がカ、ンにばかり名譽を與へたのを見て、聊さか妬げざるを得ない。

「陛下！ 陛下の御所望になるやうな完全無缺の女奴隷を發見するのは極めて困難な事で御座いますな。そんな女は殆んど御座いますまい。假りに有つたとしたところで、安くても一萬圓は取られませうと思ひます。」

とケチを附けたが、王は微笑して答へた。

「サウイ、お前は一萬圓を大金と心得て居るらしいの？ 成る程お前には大金かも知れぬ。然し、余に取つては何でも無い事ぢや。」

と、早速金庫の役人に命じて、取敢す一萬金をカ、ンの邸へ送らせた。

カ、ンは其邸へ歸ると、女奴隷の周旋を専門にする商人を悉く呼び集めて、所望の條件を委しく語り、此等の條件に適合するやうな奴隷が見つかり次第、直ぐに知らせて呉れるやうに言ひ渡した。商人等に取つては何よりの儲け口ではあり、殊に日頃尊敬して居る大臣の命令だから、一同の者は充分に承

知して、條件に適する女の有り次第直ぐに通知する事を約束した。さうして、一日と経たぬ中に、商人等は各自に一人づゝ女奴隷を伴れて來て、カ、ンに見せたが、彼は何れにも何か缺點を發見して、これでは未だ満足出来ないと答へた。

なか／＼今度の註文は面倒だと見て、それから二三日の間は商人等も一向通知に來なかつたが、或る朝、カ、ンが馬に乗つて例の如く王宮へ出かけやうとする所へ、一人の商人が忙だしく駆け込んで來た。さうして、カ、ンが馬に乗つて居るのを見ると、熱心の餘り其鎧を捕へて引留め、實は昨晩遅く一人のベルシャの奴隷商人が町へ着いた、此男の賣らうと云ふ奴隷が見逃しの出來ない女である、其美しい事は從來商賣柄幾百千人とも數知れぬ美人を見かけた彼れでさへ驚ろいた位であると話した。

「それに」と彼は附け加へた。「其商人の申しますには、其奴隷は人に優れた才藝を持つて居りますさうです。如何です、閣下！ 一度御覽になりませんか？」

カ、ンは此知らせを聞くと、國王を喜ばせる機會の來た事を喜んで、それでは此々の時刻に王宮から歸つて來るから、それまでに其奴隷を伴れて來る用意をして、きめた時刻に間違ひ無く邸へ來いと命じた。

商人は約束通りの時刻に奴隷を伴れてカ、ンの邸へ來た。カ、ンは其女を一瞥見ると、かれの豫期したよりも以上の美しさであつたので、直ぐに「ベルシャ美人」と云ふ譯名を附けた。カ、ンは彼自身が既に學識に富み才智溢るゝ人間であつたから、二言三言其女と話をすると直ぐに、もう此れ以上の奴隷は無いと考へた。そこで彼は商人に對つて、ベルシャの商人は幾らの金を要求して居るか尋ねた。

「精々お安く願つて一萬圓だと申して居ります。此女の教育ばかりでも充分それ位の價値は有るんだ

と申すので御座います。何しろ音楽に優れてゐて、どんな樂器だつて奏れない物は一つも御座いませんさうですし、歌は唱ひますな、ダンスは得意ですし、讀み書きは實に達者なものと申します。大抵な本は讀み盡したと云ふんで御座いますから大したものには相違御座んせんです。へい、私も、こんなに素晴らしいのは未だ聞いた事が御座いませんですよ。」

大臣カ、ンは直ぐに一萬圓を支拂つた。さうして其奴隷を當分彼の邸に置いて、此國の習慣などを漸次に覚えさせる事にした。先づ妻を呼んで、今後は此婦人を王宮の人として取扱はなければ叶ぬと言ひ聞かせ、妻の部屋次の間をベルシヤ美人の部屋とした。彼は又出来るだけの美しい服をベルシヤ美人に着せた。馬士にも衣裳と云ふ比喩もある位で、彼女は益々天性の美を發揮して、實に光り輝やくばかりの婦人となつた。

大臣の子息にヌウレッヂンと云ふ若い人があつた。此國は親子兄弟の關係でも男女間の區別は頗る嚴重な制規があるのだが、ヌウレッヂンは特別に母の許可を得て、いつも食事は母の部屋で一緒にする習慣になつてゐた。かれは今度來たベルシヤ美人を一瞥見ると此女は國王の寵姫とする爲めに父が買つたと云ふ事は萬々承知してゐながら、屬魂打ち込んで了ひ、出来るだけ長く王の所へはやらぬやうに工夫しやうと決心した。

ベルシヤ美人の方でも、ヌウレッヂンの若々しい貴公子姿を憎からず思つて、胸の中には私かに「大臣は私を國王の御相手に爲やうと考へてるんだわ……まア名譽と云へば名譽であらうけれど、これが若し此家の御息の相手になるのであつたら、什麼に嬉しいだらう」など、考へたりした。ヌウレッヂンは、ベルシヤ美人と會つて話をする機會を造り過ぎる程に造つた。さうして、出来るだ

け長く顔を合はせてゐる工夫をした。遂には母が見かねて、

「ヌウレッヂン！ お前は人様の所へ御邪魔にばかり行つて、仕方が無いね。自分の勉強と云ふ事を御考へなさい。名譽のある御父様の跡が繼げるやうに一生涯命に成らなければ不可んよ！」

と言ふと、澁々自分の部屋へ戻るのであつた。

ところが或る日、ヌウレッヂンは、父が王宮へ行つて不在、母が土耳其風呂へ行つて此れも不在と云ふ時を狙つて、時こそ來れと、ベルシヤ美人をかれの部屋へ連れ込んだ。何しろ日頃愛し合つてゐる二人の事ではあり、青春の血が熱する年齢ではあり、二人の者は直ぐに身も心も一つにする約束を實行して了つた。

ところが、秘密事と云ふものは現はれやすいもので、其事遂に父のカ、ンの耳に入つたので、父は烈火の如くに怒つた。彼は決してベルシヤ美人を求むる爲めに費やした一萬圓を惜むのではなかつた。王に對して面目を失なふと云ふ事と、伴のやり方の下等なのが如何にも忍び難いと思つたのである。いくらヌウレッヂンが涙ながらに詫びても、長い間父は容さなかつた。王に對する叛逆者として殺して了ふとまで罵つた。然し、妻が百方ヌウレッヂンの爲めに詫びたり慰諭めたりした結果、伴に對つて斯う言つた。

「不屈者め！ ようく御母様に御禮を言へ！ きさまが幾ら何と言つたつて許すんぢやないけれど、折角御母様が心配して色々氣の毒がるから、御母様の顔に免じて、先づ赦してやるのだ。それから、既にベルシヤ美人と然う云ふ關係になつて了つた以上は仕方が無いから、あの女はきさまに呉れてやる。然し、今後は斷じてベルシヤ美人を奴隷として扱はず、立派な妻として待遇すると云ふ條件附だぞ。」

さうすれば、さきまは彼の女を賣飛ばしめぬだらうし、見捨てる事もあるまい。」
こんな寛大な言葉を聴かされやうとは決して思はなかつたヌウレッヂンは、心も空に喜んで、幾度も幾度も繰返して父に禮を述べた。さうしてベルシャ美人と一緒になれると云ふ事を、彼女と共に喜んだ。
大臣カ、ンは、王が奴隷を買へと命じた事に就いて好結果を得たか何うか、王から下問さるゝまでも無く、屢々其問題に就いて報告するやうに特別注意を拂つて、さうして、其適當な婦人を得るには斯々云々の困難が横たはつて居るので、或は王の所望に背くやうな事がありはせぬかと、そればかりを恐れて居るなど、眞實しやかに答へた。さうかうする中に、一日が経つて、王も何日とは無しに其事を忘れて了つた。王宮には既に幾十人と云ふ美人が居るのだから、王が左程熱心でなかつたのも當然であつたらう。

此色づぼい問題は、最初大臣カ、ンが豫期したよりも以上の秘密の裡に守られて、やがて一年餘りの月日が経つた。或日、大臣は土耳其風呂に入つて楽しんでゐたが、急に大切な用が出来たし、可なり身體も温まつたので、風呂から出て来た。ところが丁度戸外には強い冷たい風が吹いてゐたので、迂濶風邪を引いて了つた。人間運の悪い時は詮方の無いもので、大臣カ、ンの風邪は遂に肺炎に變じ、病床に横たはらなければ叶ぬ容態となつたから、家族は無論の事、親戚知人一同熱心に療養看護に手を盡したが、日に増し悪くなるばかり。
大臣は愈々命が失なると云ふ際に、伴ヌウレッヂンを枕元に呼んで斯う言つた。

「私が、苦しい最後の呼吸の間からお前に頼む事は、私と約束した通り、ベルシャ美人の事に就いて充分に注意しろと云ふ事だ。よいか。忘れるな！」

これが最後の言葉であつた。それから二三分経つと彼は息が絶えたのである。家族一同の悲歎は申すまでも無い。王は、賢明な忠實な良大臣を失なつたと言つて非常に惜み、人民は、彼等を愛護して呉れた國務大臣を再び見られぬかと云つて痛切に悼んだ。大臣カ、ンの葬儀はブツソラア開闢以來第一の立派なもので、頗る壯麗に華麗に行なはれ、朝野の名士は悉く其式に列し、全市民は擧つて哀悼の意を表した。

ヌウレッヂンは父の死後、悲しみの極みに囚はれ、朝から晩まで毎日父の靈を拜するばかりで、久しく誰とも面會を謝絶した。やがて、幾分か悲しみの薄らいだところで、極めて親しい一人の友人と會ふと、其友人はヌウレッヂンの涙を乾かす爲めに色々慰さめて、既に死んだ父をいつまで悲しんでゐても仕方が無い、もし君が病氣にでも成らうものなら大變だ、一つ大いに元氣を出して、盛んに人を集めて愉快な話でもしろと勧めた。

ヌウレッヂンは其れも然うだと思つた。さうして直ぐに友人や知人の所へ招待状を出した。かれの周圍には忽ち夥多しい客が集まつて来た。其爲めに長く酌してゐた氣も晴れるし、大分愉快にもなつたので、ヌウレッヂンは毎日のやうに客をした。さうしては、金の費つた料理を出したり、藝人を呼んだりしてわあく騒いだ。客は宛から五月の蠅の如くにかれの周圍に集まつて、かれの無頓着なのを賞め立てた。然し、彼等は總じて、ヌウレッヂンの所有して居る物を口を極めて賞め立てた。さうすれば必と彼等に得が行くからであつた。

「御主人、私は過日なんか唯だ御邸を見たいばかりで御邪魔に出ましたせ。私も随分方々の御邸を見

ましたが、御宅ほど立派なのは見た事が御座いません。加之、あの庭と来ては全く天上のバラダイスと云ふのも彼れ以上ではなからうと思はれる位ですな。」

「いや、そんなに御氣に入つたのは私の本望です。」とヌウレッヂンは答へた。「ペンとインキと紙を持つて来て下さい。え……なアに、心配御無用、もう何も仰しやるな。私は屋敷を一つ君に進呈する事にしたんですから。」

と萬事が此調子で、家を褒めれば家を興り、浴場でも庭でも倉庫でも、外國人が来るとは泊る事にしてあるホテル式の建物でも（これなんぞは一年の収入が大した額に上るのである）何でも彼でも人が賞めさへすれば直ぐに與つて了ふのだ。かれの最愛の妻となつたベルシヤ美人は非常に心配して、幾度も幾度も忠告をしたけれど、かれは耳を假さうともせず、益々其贅澤な、寧ろ亂れた生活を續けてゐた。

一年間は夢の如くに過ぎ去つた。其間ヌウレッヂンは何事もせず、唯だ御馳走を食べては遊んでばかりゐて、時々客に何か進呈しては日を送つたのだ。其れが爲めにかれは、父の大臣が千辛萬苦して得た處の多くの財産を、滅茶々に使ひ捨てた。

一年過ぎてからの或る日、ヌウレッヂンが例の多くに多くの客を集めて笑ひ興じて居ると、家令が其室の入口まで来て、主人に少し内密に話さなければならぬ事があるから、別室へ来て呉れと言つてヌウレッヂンを連れ出した。すると、彼の友人の一人が好奇心を起し、一體どんな秘密の話を爲るか偷聞してやらうと考へて、主従兩人が入つた別室の扉に耳を附けると、低い聲で家令の話が能く聞こえた。

「御前！ 私は最後の計算をしてお目に懸かせようと思つて参りましたのです。私が疾うから將來を見とほして、今までに度々煩さい程あなたに申上げました通りの、情ない最後の時が来ましたのです。」

最初私は御前から夥多しい金額を御預り致しましたが、幾ら御注意申上げてても御前が御聴きにならずにドシ／＼御使ひになりましたので、もう綺麗に、一圓の金も無くなりました。此處に一切の支出を明細に記した帳簿が御座いますから、何卒御覽下さいまし。なほ御前が今まで通り私に働らせやうと云ふ御考へで御座いますなら、何卒餘程纏つた金額を御渡し願ひ度う存じます。それが御出来にならないとすれば、私は御役を御免被むりたう御座います。とても勤まりませんですから。」

ヌウレッヂンは餘りの事に茫然として、たゞ默然たるばかりであつた。家令の言葉を偷聞した男は直ぐに元の部屋へ歸つて、其處に集まつて居る連中に、今聞いた通りの事を報告した。

「と云つたやうな次第ですからな。諸君御注意が必要でせう。私は今日限りヌウレッヂン氏を訪問しない覺悟です。もうあゝなつちや爲様がありませんからな。」

「さうですか。」と彼等は答へた。「いや、我々は皆あなたと同じ様に、もう此家に用は無いのですよ。今後はヌウレッヂン氏を我々の友人として煩はさぬ事に爲ませう。」

やがてヌウレッヂンが別室を出て元の席へ歸つて来ると、友人の一人は不意に立上つた。「御主人！ 遺憾ながら私はもはや貴君と御交際を願ふ次第には参りませんですから、これで中座致しますが何卒悪からず思召して下さい。では失禮致します。」

と言ひながら、厭やに丁寧に挨拶して出て行つた。ヌウレッヂンが變な顔をして默禮して見送ると、第二番目の男が又もや何とか好い加減の口上を述べて出て行つた。次に第三が立ち第四が立ち、たうとう一人も残らず歸つて行つて了つた。

客が一人も居なくなると、ヌウレッヂンは胸を掻き掻られるやうな心地になつて直ぐにペルシャ美人の部屋へ行き、家令の話した通りを言ひ聞かせて、遺瀬無さうな顔をした。

「あなた！」と悲しげにペルシャ美人は言つた。「たうとう私が考へてゐた通りの最後が参りましたね、斯う云ふ不幸な境遇に成つては叶ないと思つて、随分幾度もあなたに御注意申上げたんですけれど、あなたは御聴きになりませんでしたものね。」

「今までにお前の忠告に従がはなかつたのは非常に悪かつたと認めて居る。家の財産は私が勝手に冗費ひをして無くしたと云ふ事も事實だ、然し、お前だつて、あれほど長く親しく交際した友人が、私が今急に逆境に陥ちたからと云つて、私を捨て、了ふとは思はないだらう？」

「まだあなたは御友達の方を信用してゐらつしやるんですか。それでは一層慘目ですわねえ。」

「けれども従来随分私は爲めになつてやつたんだからねえ……私はお前よりは善意を以て友人を解してゐるよ。向ふだつて恩義と云ふものを知つて居る筈だから、少しは私に情を見せて呉れさうなものぢやないか。明日は、いつも皆が私の家へ訪ねて来る時間よりも早く、今度は此方から出かけて行つて、みんなを訪問してやらう。まあお前黙つて見てゐて御覧、明日出かけて歸つて来る時には、友人一同の親切から集めた金を澤山持つて来るから。さうしたら私は今後生活の方法を一變しやうと決心してゐるんだ。友人から借り集めた金で何か商賣を始める事に爲やうよ。」

翌朝ヌウレッヂンは友人訪問に出かけた。かれは先づ友人中第一の金満家の家へ出かけた。すると、一人の奴隷が出て来たが、扉を開く前に、

「どなたでゐらつしやいますか？」

と尋ねた。

「御主人にさう言つて呉れたまへ、ヌウレッヂンだつて、先頃死んだ大臣カンの侍だつて！」

と言ふと、大臣カンの名は響いたものなので、奴隷は直に扉を開いてヌウレッヂンを一室に通し、奥の方に居る主人に告げる爲めに客を残して引込んだ。

奥にゐた主人は、奴隷の知らせを聞くと共に、わざと客に聞こえよがしに大きな聲を出した。

「なに？ ヌウレッヂンだつて？ お目に懸らないと言つて呉れ！」と、さもく軽蔑したらしい口調で言つた。「これから何時でも其人が来たら、玄關拂ひを食はすんだぞ。いゝか、忘れないやうにね。」

ヌウレッヂンはこれを聞くと、物をも言はず唐如駆け出して屋外へ出た。腹が立つて腹が立つて、胸が煮えくり返るやうであつた。

「畜生ッ！ 恩知らず！」とかれは罵しつた。「昨日は、あんな巧い事を言つて、ペコ／＼頭を下げて、決して友情の變らない事を明言した癖に、今日はあんな事を言ふ。ひどい奴だ！」

かれは次の友人を尋ねた。その主人も亦召使の者に、同じやうな断わりを言はせた。三番目に訪問した家でも同様の口上を聞かされた。つまり、彼は至る所の友人から悉く断わられたのである。

ヌウレッヂンは深く自ら省みねばならぬ事になつた。さうして、かれの繁榮であつた時、懇ろに人を待遇し、値多き物を惜気も無く與へた時に於てのみ、眞面目な口調で變り無き友情を誓うた者は、孰れも虚偽の友である。さう云ふ卑劣な人間に依頼しやうと云ふ考へを起したのは全然誤りであつたと気が附いた。かれは往來を歩いて居る中は、出来るだけ其悲しみを包み隠してゐたが、自宅へ歸るや否やペルシャ美人の部屋へ轉げ込むやうにして入つて行つた。

「あ、あ、お前の言つた通りだ。當り過ぎる程當つた。一人だつて私と會つて話を爲て呉れる奴は有りやしない。私は亡びるんだ。何か好い分別があるなら聴かせて呉れ。」

「ほんとに困つた事になりましたね。」と彼女は答へた。「お金を拵へる方法と云へば、奴隷や家具を賣るより外に仕方が御座いませんでせう。さうして、其中に何とか工夫を御考へになるまで支へる外は御座いませんね。」

ヌウレッヂンは那麽方法で金を拵へるのは實に厭やだと思つた。然し、厭やだと言つて外に何も好い方法が無いのだから、據なくベルシヤ美人を除くの外悉く男女の奴隷を賣り、立派な家具を拂ひ、可なり纏まつた金を手に入れた。彼等夫婦は其金で随分久しく生活してゐたが、坐して食へば山も空しで、遂々また一文無しになつて了つた。加之今度は、賣つて金にするやうな物が無いのだから酷い。彼が悲しい顔をしてベルシヤ美人に事情を語ると、彼女も寂しい顔をして答へた。

「あなた！ 私は元來あなたの奴隷で、あなたの御父様は私の爲めに一萬圓御拂ひになつたのでしたわね。ですから私今でも彼是それ位のお金にはなるだらうと存じますよ。何卒直ぐ私を奴隷商人の居る所へやつて、賣つて下さいませう。さうして其お金で、何處か人の知らない町へ行つて、何か商賣でも御始めになつたら宜しう御座いませう。」

「これ／＼冗談言つちや困るよ。どうして那麽馬鹿な事を考へたんだね？」と又ヌウレッヂンは叫んだ。「私は御父様と確り約束してあるんぢやないか。假令どんな事があつてもお前を賣らないと誓つてあるんぢやないか。其堅い誓を破るなんて云ふ罪惡を犯す事が出来るものか出来ないものか、まア考へて御覽。」

「そりやアもう實に情無い事で御座いますわ。だけど、今は死ぬか生きるかと云ふ場合で、外に何と仕様も御座いませんのですからねえ。」

さう言はれて見ればヌウレッヂンに他の良策の有らう筈は無い。ベルシヤ美人を賣らなければ金の出所は無い。かれは彼女の申出に従ふより外は無かつた。さうして、眞に血の涙を呑むの思ひで、ベルシヤ美人を女奴隷取引所へ連れて行き、取引所の役員のハギ、ハツサンと云ふ男に委細を頼んだ。

ハギ、ハツサンとヌウレッヂンは、直ぐに商人等の集まつて居る所へ現はれた。ハツサンは顔にも様子にも快活の色を示して、

「諸君」と大きな聲で言つた。「圓い物は胡栗ばかりとは定つてゐません、長い物は鞭ばかりとも定つてゐません、すべての卵が皆新らしいとも定つてゐません。諸君は多年此奴隷賣りに従事せられた間に於て、數へ切れない程多くの奴隷を御覽になつたでせう。然し、茲に私が今お目に懸けやうとする奴隷と比ぶるに足る程の者を御覽になつた方は、恐らく御一人も有るまいと信じます。さア、先づ實物を驚と御覽の後、私の言ふ事が法螺か何うか御判断を願ひます。」

と言つて、ベルシヤ美人を引張り出した。ベルシヤ美人は覆面布を外した。彼女の顔を一瞥見るや否や、流石の商賣人連も其美しさには驚いて、どんなに安く踏んでも四千圓位の價値は大丈夫と云ふ事に皆々同意した。

「さア價が附いた。ベルシヤの奴隷が四千圓！」

と大きな聲でハギ、ハツサンは叫んだ。丁度其時、有名な意地悪大臣のサウイが近邊に来てゐたが、「四千圓！」と呼聲の上つたのを耳に挟むと同時に、四千圓なぞと云ふ大した價値の有る女はどんなだ

らう一つ見てやれと云ふ量見で、馬を急がせて近寄つた。さうしてハギ、ハッサンの周囲に多くの商人が集まつて居るのを見ると、

「こりや、除け、除け！」と彼は嗷鳴つた。「我輩にも其奴隷を見せろ。」

人々の間へ割込んで、馬上ながらにベルシャ美人を見ると、大臣サウイは其美しさに驚ろいて、直ぐに、ハギ、ハッサンに聲をかけた。

「おい！ お前は今四千圓とか言つてゐたねえ」

「左様で御座います、閣下！」とハギ、ハッサンは敬意を表して答へた。「皆さんは、四千圓と云ふ價を御附けになつたんで御座いますが、私はもつと買つて貰ひ度いと存じますんで……へい、もつとウンと奮發して下さるのは請合で御座いますよ。」

「うむ、よし。誰もそれ以上の價を附けないのなら、我輩が四千圓で買ふ事にする。」

かう言ひながらじろりと商人連中を胸はした。四千圓以上の價を附けたら承知しないぞと言はんばかりの恐ろしい眼容である。暫く待つて見たが誰も價を附けるものが無いので、大臣は又ハギ、ハッサンに聲をかけた。

「おい！ 何をグズグズしとるんか！ 賣手を捕へて四千圓で約束して了つたら好からう。」

で、ハギ、ハッサンはヌウレッヂンと相談する爲に少しわきへ退ぞいたが、餘り大臣の態度が癪に觸るので、斯う云ふ策略を持出した。

「一つ狂言を書かうちやありませんか。何か貴君があの人美人に對して非常に腹を立つた事があつて、其腹立紛れに、ささまの様な奴は奴隷の市へ出して賣つたふぞと言つたので、行き掛り上此處へ連れて

來たには來たが、決して眞とに賣らうと云ふ考へではない。と云つた風をして、私が今サウイ大臣の手にあの人美人を渡さうとしますから、其時貴君は不意に傍から手を出して美人を捕へて、一先づ御宅へ連れて行らつしやいよ。四千圓なんて、價ちやありませんからね。」

ヌウレッヂンは元々賣り度い氣は更に無いのだから、ハッサンの言葉に従がふ事になつた。

やがて、ハギ、ハッサンはヌウレッヂンとベルシャ美人を連れて、なほ馬に乗つて待つてゐた大臣サウイのそばへ行つた。

「閣下！ 約束をきめて奴隷を連れて參りました。愈々閣下の物ときまりましたのですから、何卒御連れなすつて下さいまし。」

と言ひながら、大臣に渡さうとする時、不意に横からヌウレッヂンが手を出してベルシャ美人を引捕へ、唐突二三度小突き廻した。

「ささまは、もう一度宅へ連れて歸らう。餘りささまの剛情が癪に觸つたんで、市に持出して賣つたはうと言つたんだが、決して心から賣る積りではないんだ。」

と言つて、手を取つて勿々と歩き出した。此ヌウレッヂンの行爲を見ると大臣サウイは烈火の如くに怒つた。さうして、直ぐに馬を急がせてヌウレッヂンを追かけ、ベルシャ美人を奪ひ去らうとしたが、ヌウレッヂンの方が大臣よりは敏捷に立廻つた。かれは素早くベルシャ美人の手を離してサウイの馬の轡に飛付き、力任せに二三歩押戻した。サウイは躍起となつて轡からヌウレッヂンを離さうと試みたが、ヌウレッヂンは貴公子育ちに似合はず大方の有る所へ持つて來て、黒山のやうに群集つた彌次馬が、日頃心憎く思ふ大臣の弱つて居る様子を見てワイ／＼嘯し立てるものだから、それに勢を得て、遂